

トロイア攻略者オデュッセウスの慟哭と希望

内田 次信

1 オデュッセウスの慟哭

(1) トロイア陥落の歌を聴いて慟哭するオデュッセウス

—英雄の「自己否定」か？

トロイア戦の伝承において、古くからオデュッセウスの功績であることが確立していた木馬の計とそれによるトロイア陥落⁽¹⁾は、スクリア島において、彼もいる宴の場で、彼自身の要望によって、楽人デモドコスの歌の主題にされた。英雄は、この楽人の演奏を気に入り、自らリクエストをするが、それは彼自身の活躍に関係することだったのである。

さあ話題を変え、木製の馬の仕かけについても
歌ってくれ。エペイオスがアテーネーの援けを得て造ったのを、
神々しいオデュッセウスが、たばかりの道具として、[トロイアの]城砦にも
たらしたあの馬のことを。
その中に戦士たちを充たしておき、彼らがイーリオスを全滅させることにな
ったのだ。

(8.492-95)

そこで楽人は、この主題に沿って吟じてゆく。ところが、その締めくくりで楽人が、

オデュッセウスは、神に等しいメネラーオスとともに、
アレースのような様で、デーイポボスの館に向かった。
そこで、とても恐ろしい戦いを試み、
それから、大いなる心のアテーネーの力で、勝利をおさめた

(8.517-20)

と歌うと、オデュッセウスは涙にかきくれる。それはあたかも、一人の女が、
国と子供たちを守ろうとして戦死した夫の死体に取り付き、大いに嘆いている

と、その背中を敵兵が槍で打ちながら、奴隷にすべく引き立てる様に似ていた、という比喩が加えられる(8.521-30)。男の振舞いを女の行動に、また勝者(トロイア戦の英雄)を敗者に喩えるこの箇所は、「逆さ比喩」の中でもっとも有名な例である⁽²⁾。

オデュッセウスが、アルキノオス王の宮廷で歌を聴きながら涙に暮れるのは、じつはこれで二回目である。その前にも、やはりトロイア戦争に関して、しかもやはり自分が関係する場面の歌を楽人から聴いて、涙を催し、周りに気づかれないよう、緋色の外衣を頭からかぶって抑えようとした、アルキノオス王だけはそれに気づいたと言われている(8.83sq.)。

トロイア戦争における自分の活躍談を親しく聴いて涙する「トロイア攻略者」の姿、とくに戦争のいたましさを喚起するとともに解しうるその「逆さ比喩」を目して、少なからぬ研究者が、オデュッセウスは敗者トロイア人たちに心理的に同化している、あるいは、ここで主人公のトロイア戦勇士としての側面が否定されようとしている、という趣旨の論を述べる。

たとえばナジによると、ここでのオデュッセウスの悲嘆は普遍化されていて、彼は今、戦争における彼自身の犠牲者と同じ悲しみを感じている、という⁽³⁾。

また、ここに「勝者敗者双方に通底する深い悲哀」を見る丹下によると、英雄はここで「敗者と同じ涙を流し」ているのであり、「トロイア戦争というおのれの過去の十年間の体験を全否定」している、「この涙はオデュッセウスのおのれの勲功への否定、そして戦争そのものに対する否定的評価の現われ」であるという。彼は、『オデュッセイア』に、新しい社会の到来が反映されているとする⁽⁴⁾。

また小川の考えによると、ホメロスの追求したのは、「苦難の事態に耐えつつ生きることを学んでゆく」「倫理的な生の在り方をめぐる誉れ」であり、その過程の一環で、「トロイアの女たちの身の上になりきって涙を流した」このオデュッセウスは、デモドコスの歌を通じて、「かくまでも人間は人間に対して無慈悲」であるという事実を、あるいは、「自分が立てた「誉れ」とは何か、…戦争とはどういうもので…あるか」という疑問を、自覚させられることになるという⁽⁵⁾。これは、トロイア戦伝説の中で言い伝えられてきた「英雄の誉れ」の物語を、ホメロスという詩人が倫理的な意味で変容させようとしているという、全体的な把握の仕方に基づいている。この説の場合は、勇士の一種の「学習」ということになるだろうが、やはり、「自分が立てた「誉れ」とは何か」ということに関する自己否定的な見直しが含まれている。

さらに、フェミニズムの観点からフォリは、やはり英雄の「犠牲者」の立場に対する理解がここにはあるという見方を踏まえながら、社会的「弱者」とも言われる女性と男性との間の「相互依存」の関係や「成熟した結婚」がイタケにおいては実現すると論じる。そしてそういう関係を明らかにするのが、くだんの箇所を含めた「逆さ比喻」の数々であると言う⁽⁶⁾。

ブッチは、『オデュッセイア』でセイレンたちが、トロイア戦争での誉れにかかわる歌を聴かせようと英雄に約束する場面(12.184sq.)を論じつつ、デモドコスの吟唱にも言及しながら、戦争の偉大な功績を主題とする歌は自慢よりも悲嘆を引き起こす、そういう主題を扱う『イリアス』を、『オデュッセイア』の詩人は否定しようとしていると論じる⁽⁷⁾。

敗者への心的同化の涙だという捉え方は、非専門家の間でも、定説のように扱われていることがある⁽⁸⁾。しかし他方では、この見方に賛同していないと見られる専門家ももちろんいる。この箇所では、オデュッセウスは、自分自身を嘆いているのだとミンチンは述べ⁽⁹⁾、デ・ヨングは、楽人の歌によって、過去の栄光とその後の十年間の惨めさとのコントラストを思い知らされたから英雄は泣くのだ、と言う⁽¹⁰⁾。筆者は、以下の議論において、基本的にはミンチンやデ・ヨングらと同様の視点に立ちながら、後述するように、英雄による追憶の視線の方向をより詳しく見極めようと試みる。

なお、ソポクレスの悲劇『アイアス』に登場するオデュッセウスは、「共通の人間性」への理解と、自分たちを害そうとして蹉跌したアイアスの悲劇的運命への憐憫をたしかに表現する⁽¹¹⁾。歴史家ヘロドトスにおいても、ペルシア王キュロスが、処刑しかけた「敗者」クロイソスを、「同じ人間」として哀れみ、土壇場で許すという行為が描かれる(1.86.6)。しかし、自明のことであるが、ホメロスの物語世界と、数百年後の時代とを、歴史的社会的状況についてももちろんのこと、その考え方や感じ方に関しても、同列に論じることは必ずしもできない。たとえば、すぐ後で触れるように、悲嘆が女々しいかどうかという観念も、その数百年で大きく変わっている。ホメロスの英雄の心情の特性を見極めながら考察する必要がある。

(2) 追憶、情動、比較

くだんの箇所は、すでに古代においても、ある程度注目されていたようである。すなわちアリストテレスは、このオデュッセウスの慟哭を、「豎琴吟唱詩人の歌を聴くうち、[過去のことを]想い出して泣いた」と説明している(『詩学』

1455a2sq.). これは、もちろん基本的に正しい。肉体的苦痛から泣き喚いたピロクテス⁽¹²⁾などとは異なり、ここでオデュッセウスが、あることを追憶して、あるいは想い出させられて、悲嘆していることは疑いないからである。したがってそれは、ごく当たり前の説明の域を出ないとも言える。しかしわれわれは、問題の箇所や、それに関係する他の諸場面を論じるさいに、いったい英雄は何を追憶しているのかという具体的な点を、テキストに基づいて正確に読み取る労力を払わないといけなければならないが、それがこれまで十分に行なわれているとは思えない。われわれは、アリストテレスの評言を、この点に関するより綿密な考察の契機として銘記することにしよう⁽¹³⁾。

また、オデュッセウスの悲嘆には、自分がかかわったトロイア戦争への追憶が深く絡んでいる。その想い出が、おそらく鮮明な映像を伴いながら、痛切な心情を引き起こすという側面がある。

さらに、情動と落涙を催す戦争体験の追憶は、『オデュッセイア』の場合、しばしば戦友同士の運命の比較を伴っている。これは、創作手法としては、後代にシュンクリシスと呼ばれるものと関連する⁽¹⁴⁾。もちろんホメロスがこの修辭的用語を知っていたというわけではない。しかし、比較する行為は、競い合い（アゴン）の手段の一種として、もともとギリシア人の心性に深く根付いている。

以下の議論では、追憶、内面の情動、そして比較という三つの要素を、必要に応じてそのつど敷衍的説明を加えながら、考察の基本的観点として用いる。

(3) 泣く意味の多様性、喜びの涙

「心的同化」説においては、長い放浪を続けているオデュッセウスは、自分の最大の功績を楽人に歌ってもらって自分を慰め、気持ちを晴らそうとした、ところが意に反して、「敗者への憐憫」をそれによって掻き立てられ、逆に悲嘆に突き落とされた、という経過が考えられているであろう⁽¹⁵⁾。だが果たして彼の涙は、自分でまったく予期しない心の動きの結果だったであろうか。この点をまず考える。

英雄が泣くのは、日本の武士たちと同じで珍しくなく、「立派な男は常に涙を催しやすい」というギリシアの諺があったほどである⁽¹⁶⁾。そこには、後代において、たとえばストア派的観点から、過度の悲嘆や女々しさの現れとして非難される行為も含まれる⁽¹⁷⁾。しかし、すでに古典時代から考え方は変化していたのである⁽¹⁸⁾。だが注意すべきことは、彼らの涙は多様なきっかけに由るので

あり、決して、心理的に文字通り純粹に「嘆いて」いるばかりではない、つまり悲観したり、絶望したり、あるいは自分を呪ったりしている場合ばかりではないという点である⁽¹⁹⁾。

悲観的「嘆き」そのものではない落涙の顕著な例としては、喜びの涙がある。一例を挙げると、オデュッセウスの部下たちは、一時、キルケの魔法によって獣に変身させられていたが、彼の努力で人間の姿に戻ることができた。彼らは、オデュッセウスを見るなりその手に取り付き、皆が「憧れの涙」⁽²⁰⁾を流して泣きくずれたという箇所(10.397sq.)、あるいは、帰国できたオデュッセウスが、息子に身を明かして彼に接吻し、涙を地上に落としたという場面(16.190sq.)等がある。

(4) 悲嘆する喜び

ホメロスの英雄たちは、たとえ悲惨な経験を長い年月にわたって味わい、その辛い記憶を重い石のように心中にわだかまらせていても、ときにそれをあえて呼び覚まし、口にし、または耳朶に及ばせて、しばらく「楽しむ」すべにする機会を持つとした⁽²¹⁾。

今はスパルタの自分の王宮に住むメネラオスは、

あのとき、

広大なトロイエーで、馬のよく育つアルゴスから離れて、死んだ者たち

(4.898-99)

が生きていてくれたら、自分の今の財産は三分の一でもよい、と述べ、彼らを想い出しては悲嘆にくれる日々だという。しかしそこには一種の甘美な感情も混じっている。

それでもわたしは、皆のことを嘆き、悲しみながら、

よくわれわれの広間に坐っては、

あるときは悲嘆によってこの心を楽しませ、またあるときは

それを止める。凄まじい悲嘆にはすぐ飽きるものだからだ。

(4.100-03)

また、トロイア戦中のことになるが、アキレウスは、ヘクトルに殺された友

パトロクロスのことを偲びながら、自ら悲嘆に身を任せる。部下のミュルミドネスたちに指示して彼はこう言う。

馬と戦車ごと[遺体の]近くに寄って、
パトロクロスのことを嘆こうではないか。それが死者にとっての誉れになる
のだから。

だが、呪わしい悲嘆を楽しんだ後は、
馬を[くびきから]解いて、ここでいっしょに食事することにしよう。

(『イリアス』23.8-11)

そして、母神テティスが彼らの間に「悲嘆への憧れ」をかき立てる中、パトロクロスの遺体の周りを三度めぐりつつ、彼らは哀悼の声を張り上げる。それを先導するアキレウスが、横たわる友の胸に両手を置きながら話しかける。

冥界の館でも達者でいろ、パトロクロスよ。
以前に約束したことを、もう今、すべて、お前のために果たすだろうから
—ヘクトールをここに引きずってきて、生のまま犬どもに食い裂かせること、
(その他のこと)を。

(『イリアス』23.19-22)

そのように、「以前の」、友が殺された直後のときの自分の言葉(18.334sq.)をあえて口にし、自分も死んでしまいたいと思ったそのときの苦痛の記憶を新たにしながら、彼は悲嘆の喜びに身をゆだねる⁽²²⁾。

そしてオデュッセウスも、悲嘆の喜びを知っている。母の亡霊を前にして彼は、双方が抱擁し合って「凄まじい悲嘆を楽しむ」ことにしようと呼びかける(『オデュッセイア』12.212)。お互いの顔を眺めながら、彼は、国を出てから十数年間⁽²³⁾の自分の受難を想い出し、母は、その間の館の苦労を反芻することになっただろう。ただし、「夢」のような亡霊を抱くことはかなわず、母はむなしく飛び去ってしまった。それはともかく、「凄まじい(クリュエロス)」悲嘆というのは、それを耳にする者をぞっとさせるほどの嘆き声ということであり、それを「楽しむ」という句は、アキレウスに関する上記の箇所での「呪わしい悲嘆を楽しむ」という表現同様、悲嘆と喜びとの結合が有するパラドックス性をより強調する形になっている。

彼らは、それが自分たちに悲嘆を引き起こすことをよく知りつつ、むしろそれを望みながら、辛い記憶をわざわざ呼び起こしてそれに身をゆだねる。これは、遠い時代の異国の英雄でないわれわれにも理解できなくはない行為であり、涙であろう。ましてそれが、純粋に敗残の忌まわしい思い出ではなく、とにかく——ヘクトル殺害やトロイア陥落など——自分たちの勝利と功績に関連する記憶なら、英雄たちは、それを呼び覚ますことが、たとえある面ではふたたび傷を新たにすることになろうとも、別の面では、その涙の暖かさによって少しは慰められ元氣付けられて、自己確認するよすがになることを感じ取っていたのである。例えばアキレウスは、パトロクロスを偲ぶ悲嘆と復讐心から、ヘクトルとの対決に突き進むが、他方では彼を倒すことが自分の名誉になることも同時に意識している(『イリアス』18.121)。プッチは、それを「自己破滅的なノスタルジア」の行為と称するが⁽²⁴⁾、そのようにもっぱら否定的な側面ばかりを見るよりも、スタンフォードのように、アリストテレスのカタルシス理論を思い起こしたほうがよさそうである⁽²⁵⁾。しかしカタルシスという概念を持ち出さずとも、涙に一種の快楽があり得ることは、一般に(常識的に)認められていたであろう⁽²⁶⁾。

(5) 慟哭と帰国の主題

『オデュッセイア』において悲嘆は、帰国の主題にきわめてしばしば関連する。上記の、イタケに帰着したオデュッセウスとその子同士による喜びの慟哭(16.190sq.)は、この中心主題にそのまま結合している。また、オデュッセウスのお蔭で人間の姿に戻れた部下たちの慟哭も、豚のままでは帰国はもちろんできないという心理が底にあるだろう。それにすぐ続く箇所では、英雄の姿を見て、部下たちがまるで故国イタケに帰ったかのように喜び涙するというくだりがあり、彼らにとって、リーダーのオデュッセウスの存在と帰国とが同義に近いことが示されている(10.408sq., 1.5 参照)。

他方、悲嘆の慟哭も、この主題にきわめてしばしば関連する。オデュッセウスが、カリュプソの島の海岸に坐って、涙の乾く暇もないくらいに「帰国のことで嘆き続けている」という様子や(5.151sq.)、彼の部下たちが、もうこれで「愛する祖国に帰れる」と思っていたのに、恐ろしい冥界に行けとキルケが命じていると聞かされて、悲嘆に暮れるというくだり(10.562sq.)、その他があり、帰国物語たる『オデュッセイア』において、悲嘆が、かなわぬ帰還、またはいつまでも帰らぬ夫・父あるいは戦友の運命と絡み合わされている例は、枚挙にい

とまがないくらいである。

ここで、第8巻でのオデュッセウスのくだんの慟哭と、第4巻における一場面での息子の悲嘆とが、叙述表現上、互いを想起する関係になっていることに注目しよう⁽²⁷⁾。息子テレマコス⁽²⁷⁾は、アテナの奨励で、父の消息や面影を尋ねてペロポネソス半島に旅をする。そしてスパルタで、メネラオスに歓待される。初めはメネラオスは、訪ねてきた彼がオデュッセウスの子であることを、うすうすと感じ取ってはいるが、はっきりとは認識できない。彼に向かってメネラオスは話す—自分は、エジプトなどを転々と放浪して八年目にやっと帰国できた、兄アガメムノンはその間に謀殺された、戦死した他の戦友たちを含め彼らのことを想って嘆く日々だが、それも、一人の男のことで悲嘆するほどではない、すなわちオデュッセウスは、ギリシア人の中でいちばん苦勞をし骨を折った男なのに、もう長いこと行方不明で、生きているのか、死んでしまったのか、われわれには分からない、彼の老父も、思慮ある妻も、生まれたばかりで家に置いていった息子も、彼のことを嘆いていることだろう、と(4.81sq.)。この最後の言葉を聞いて、テレマコスは涙を抑えられなくなる。

[メネラオスが]こう言うと、彼[テレマコス]に、父を慕って嘆く気持ちを掻き立てた。

彼は、まぶたから涙を地面に滴らせた。父のことを聞いたからだ。

そして両方の手で、緋色の外套を目の前に引き上げていた。

彼の様子にメネラーオスは気がついた。

それから、自分の心と胸の中で、どうすべきか思い迷った、

あるいは彼に、自分から、父のことを話させるようにしようか、

あるいはまず質問をして、一つ一つのことを確かめてみようか、と。

(4.113-19)

メネラオスが、相手の身の上を尋ねようかと迷っていると、妻のヘレネが二階から降りてきて、夫がうすうす察していたが控えていたことをあっさり口にし、彼がオデュッセウスの子であることが明らかにされる、という展開に続く。

ステリア人の島を舞台とする第8巻でも、楽人の歌を聞いて涙するオデュッセウスは、第一回目の落涙場面で、緋色の外衣を頭からかぶりながら涙を隠そうとし、アルキノオス王に気づかれる。また第二回目の場面では、改めて外衣を頭からかぶって、とは言われないが、おそらくこちらでもそのようにして自

分の感情を隠す⁽²⁸⁾、それで他の者には分からないが、王だけは気づく。そしてこの二回目の落涙場面で王は、身の上を明かすようオデュッセウスに求める、彼がそれに答えて語り始める、という形で話は進む。

テレマコスの涙は、言うまでもなく、老父・妻・子の中の一員として、「生きているのか、死んでしまったのか…分からない」オデュッセウスへの憧れの涙である。他方、やはりスケリア島でも「故郷ほど素晴らしいものはない」(9.8)と明言するオデュッセウスが、夫や子を奪われ国から追われようとして号泣する女に喩えられるのは、その敗残の女と心理状態において同化させられているというよりも、やはり、息子の涙の場面と鏡像のように呼応する、家族への思慕の一表現とみるべきではないか。

歌を聴いて涙する家族はもう一人いる。ヴェールで顔を覆いつつ、「わたしに、忘れられない悲しみが降りかかっている…。 というのもわたしは、そのような人を待ちわびている—その名声が、ヘラスにもアルゴスの真ん中にも行き渡っている夫のことをいつも思い浮かべながら」(1.342sq.)と言って、ギリシア人たちの辛い帰国の歌を拒絶しようとするイタケ島のペネロペである。これは、トロイア戦の話題をことごとく拒む反応というよりも、立派な戦士であった彼が何故帰って来れないのかという悔しさをこめた、夫の帰国に関する悲観的感情と悲しみに駆られた行動である⁽²⁹⁾。

(6) 神々の密通などの歌

スケリア島に戻ることにして、オデュッセウスがデモドコスから聴く歌は、落涙する二回の場面の間にもう一つあり、そこでは、美青年の神アレスと、醜い鍛冶神へパイストスの妻であるアプロディテとの間の密通事件が扱われている。こちらの歌には彼は、「それを聴きながら心の中で愉しんだ」とだけ簡単に言われている(8.368)。落涙の場面での歌は、彼自身の名前も出てくる「わたしの多くの悲しみ」(9.15)に直接関係するのに対して、神々の密通に関するこの滑稽な、メルヘン的特徴を有する⁽³⁰⁾話は、宴会で気楽に愉しく聴く歌の一つだったのである(9.5sq参照)。しかしこの歌も、帰国の主題にある程度結び付いている。すでに古代において、間男をするアレスが懲らしめられる描写は、オデュッセウスにとって求婚者殺戮のヒントになっていると解されていた(アテナイオス 192DE)⁽³¹⁾。神の具体的な手管が参考になったかはともかく、弱い側が強い方に対し狡知を用いて復讐を試み成功するという大まかな点では、故郷での成り行きに展望と希望を与える一助になったと言えるかもしれない。オデュッ

セウスが、故郷でアテナの力により年老いた乞食に変身させられる姿は、足のなえた神に通じる。この変身については、オデュッセウスも聴衆・読者も、現時点ではまだ何も知らないが、ホメロスがよく用いる予示（前方指示）の手法によっている⁽³²⁾。

しかし、他方では、ここの求愛者アレスは、とにかく一度は、誘惑に成功している。したがって、冥界で予言者テイレシアスたちから、求婚者たちのことも警告されていたオデュッセウスには、この点は懸念の材料にならざるを得ない。この歌を「聴きながら、彼は心の中で愉しんだ」(368)と、抑え気味に、一種おさなりにしかその反応が記されていないのは、この含みであろう。

さらに一度、楽人の歌を彼は聴く機会がある(13.27sq.)。しかしここでは、彼がいよいよ国へ向けて出発することに気を取られている状態にあるのに呼応するように、そこでどういう内容が歌われたのか、全く記述はされない（後記3節参照）。

これらの歌も、このようにして、求婚者殺戮を含む帰国の主題と何らかの点で関連していることが確かめられる。

(7) オデュッセウスの一回目の慟哭

改めて、デモドコスの吟唱のさいにオデュッセウスが催した二回の涙について、より詳しく考えることにしよう。彼の第一回目の涙を引き起こす歌では、「天に達している」(8.74)有名な話という前置きで、オデュッセウスとアキレウスとの争いが主題に取り上げられる。二人は、神々の宴で、激しい言い争いをした、

すると、人々の王アガメムノーンは、
もっとも優れたアカイオイ[ギリシア人]が争い合ったことを心中喜んだ。
というのは、[かつて]そのようにポイボス・アポッローンが、神々しいピュー
ートーで、彼に託宣して述べたからだ。
神託を得ようとして、彼が、石の敷居を踏み越えたときのことである。
なぜならそのとき、禍の始まりが、偉大なゼウスのはかりごとにより、
トロイエー人とダナオイとに襲いかかろうとしていたのだ。

(8.77-82)

この歌を聴くさなかにオデュッセウスは涙に駆られ、緋色の外衣を頭からかぶりながらそれを隠し、楽人が歌を中断している間には、杯を取って、神々のた

めに頻りと地面へ酒を注いだ。

この争いや神託の逸話について、それにはつきり対応している伝承を挙げることは困難であり、詩人の創作という見方もできる⁽³³⁾。しかし、「天に達している」有名な話と言われるので、岡は、当時じっさいに語られていたトロイア戦伝説の一部だった可能性があるとする⁽³⁴⁾。その場合、有名な話であるにもかかわらず、後世にはほとんど伝わらなかったということになる。われわれは、この箇所に対する古注の説明のあれこれや、今日の学者の解釈を参照しながら、より納得しうる読み方を模索することにしよう。

まず、この事件には神託が関係する。アガメムノンが喜んだのは、それがいま成就したと考えたからである。神託が、デルポイ神殿の「石の敷居を踏み越えたとき」の彼に与えられた時期は、引用文の直後で、「そのとき、禍の始まり」がトロイア人とギリシア人とに襲いかかり出していたという句での「そのとき」と呼応するであろう⁽³⁵⁾。別の解釈では、「そのとき」は、アキレウスとオデュッセウスとのその言い争いが起きたとき、とも解し得る⁽³⁶⁾。しかしこれは、テキスト上少しさかのぼることになるという点から言っても、妥当ではないだろう。また、そのときギリシア・トロイア双方にとって「禍の始まり」が生じ出していた、と言われるが、これは戦争初期を指すと思われる⁽³⁷⁾。ところが、アキレウス・オデュッセウス両人の言い争いは、後述のように、むしろ末期の出来事と解すべきである。どうやら、「人々の王」、ギリシア軍の総大将アガメムノンは、二国間の戦争の成り行きについて、ギリシアからの船隊出航より以前に、神託を伺おうとしたらしい⁽³⁸⁾。戦争が勃発しかけ、ギリシア・トロイア双方に禍が降りかかりそうになっていたとき、つまり陥落にさかのぼること約十年前に、くだんの託宣は与えられたものと見られる。もっとも優れたギリシア人たちが互いに争い合うのを彼が目にするとき、トロイアの陥落は近づく⁽³⁹⁾、といった趣旨のものであったと推察される。

次に、両英雄のその言い争いがいつごろ起きたのか、という問題である。それを、戦争初期、キュクロスの一つで語られているテネドス島での事件に結びつける説がある⁽⁴⁰⁾。しかしその場合、それはまだトロイアに向かう遠征途中の時点になるので、アガメムノンが、予言の実現が近づいたのを感じて喜んだというには早すぎる⁽⁴¹⁾。これだと、戦争はそれから長いこと続くので、「その日」は近いと約束していた託宣はナンセンスということになろう。『イリアス』で、カルカスの予言はやっと十年目に達成する見込みであると、その十年目の時点で語られるのが参照される(『イリアス』2.326sq.)。長期にわたって戦争の紆余

曲折がいろいろとあり、アガメムノンの気持ちが鬱していたある日、両英雄の言い争いが出来た、そのとき彼は予言を思い出し、悲観していた分だけ喜んだ、と推察できよう。両英雄の言い争いは、託宣が「その日」の接近を予告していた戦争末期の事件と考えられる。

では、末期として、時期をより特定しうるか？ これはもっと難しい問題である。古注釈で、神託の言う「もっとも優れたギリシア人同士の争い」というのは、『イリアス』第1巻で描かれるアガメムノン自身とアキレウスのことであり、それをアガメムノンは誤解して、まだ禍の始まりに過ぎぬのにぬか喜びをした、とする説が紹介されている⁽⁴²⁾。この説によると、アキレウスとオデュッセウスの争いは、『イリアス』で描かれるそのアキレウスとアガメムノンの争いよりも前に起こったものになる。後者の争いは、『イリアス』全体の筋において、アキレウスによるヘクトル殺害に終結する。アポロンが、ヘクトル殺害によってトロイア陥落は近づくということの意味していた、とする解釈は可能である。トロイア最大の守護者ヘクトルを倒すことは、その攻略と密接につながるからである⁽⁴³⁾。

しかし、こういう説において、アガメムノンが誤解したという「もっとも優れたアカイオイ」の句は一般的な表現なので、必ずしも総大将を含む必要はない⁽⁴⁴⁾。客観的に、アキレウスとオデュッセウスは、もっとも代表的なギリシア人と見なされる場合があった。ギリシア軍中の毒舌家テルシテスは、この二人にいつも食って掛かっていたと言われるが、そこで両者は双数形で表されているので、「お前たち二人は…」と並べる形で詰った、ということだろう（『イリアス』2.220sq.）。アガメムノンの受け止め方は自然であり、神託の誤解ということはよく起きるものの、この場合はそういう解釈のほうがひねりすぎという観を与える。人間の側からの、託宣、予兆や神意の誤解を、皮肉な筆致で述べる趣味は、ホメロスには総じて見いだされない。

この説に関してさらに問題にすべきは、その場合に、そういうアキレウスとオデュッセウスとの争いがどういう意味を持つのか、それに何か有意義なポイントがあるのか、という点である。もし、両者のその争いするときアガメムノンは攻略が近いと信じて喜んだ、しかしじつはまだもう一回争いが生じた、そしてギリシア・トロイア両方には、禍がゼウスによっていっぱい用意されていた、というようにする場合、言い争いのモチーフを二重にしなければならない理由は何なのか？ 自分自身とアキレウスとの争いを体験して、アガメムノンは心中ひそかに喜んだ、ところが…、という流れにしても大きな違いはないのではな

いか?⁽⁴⁵⁾.

残るもう一種類の古注の説明は、総合的な観点から、より受け容れやすいものである。「誤解論」とは異なり、さまざまな古注者から同趣旨のことを若干の点で相違する文で説かれているので、ある程度広く認められていた説と思われる（今日においてもこの説に従う場合が多い）。場合によっては、何か具体的な伝承にさかのぼるものであるかもしれない。その説によると、時期は、戦争開始後十年目、アキレウスがすでにヘクトルを倒した後のある宴で、今後のトロイア攻撃に関して彼とオデュッセウスとが論争し、アキレウスが、勇武を称賛しながら、力づくで押し寄せるべしと言う一方で、オデュッセウスは、智恵を讃えながら、策略を用いて攻めるべし、と言い合ったという⁽⁴⁶⁾。この論争は決着がつかず、物別れに、あるいは喧嘩別れに終わったらしい。その後アキレウスは、キュクロスの『アイティオピス』で描かれたように、戦場でエチオピア王メムノンを倒した勢いで、トロイアのスカイア門に押し入ったところを、アポロンが援助するパリスによって射殺された。このように「力」の主唱者が倒れた後、トロイア陥落の実現は、木馬作戦と「智」の駆使を待たなければならなかった。

アポロンは、真砂の数も知っているという。自分が、やがて十年後に、アキレウスを倒すことも、そしてその後オデュッセウスが、木馬の計でトロイアを落とすことも、見通しているはずである。両英雄が争い合うようになったときトロイアの陥落は近い、と予言するアポロンは、「力」一辺倒の英雄に対して、いや、不落の都トロイアは、巧妙な計略によってしか落とせないと確信を深めてきている他方の英雄が、その意見を相手に真っ向からぶつけるに至ったとき、はじめてその日は近づくと言ったのだらう⁽⁴⁷⁾。そしてアキレウスの死によって、ギリシア軍はオデュッセウスの考えに決定的に肩入れするようになり、戦争の成否をその智恵にかけたのである⁽⁴⁸⁾。くだんの言い争いは、一連のこういう成り行きを予告するシグナルであった。こういう経緯が、どういう伝承または叙事詩に織り込まれていたか、われわれには分からない。ダネクは、『アキレイス』つまり『アキレウスの歌』という伝承詩で、この英雄の死までが描かれていたかと推測する⁽⁴⁹⁾。しかし、少なくともいま扱っているデモドコスの歌では、アキレウスとともに、その退場後のオデュッセウスの卓越した活躍にも目配りがされていたはずである⁽⁵⁰⁾。

このデモドコスの第一回目の歌で用いられる「天に達する」という表現は、やや後でオデュッセウスがスケリア人たちに自己紹介する中で、

わたしはラーエルテースの子オデュッセウス、狡知の業の数々で、
すべての人に知られている男であり、わたしの名は天にまで届いている

(9.19-20)

と言っている文での、「狡知の業の数々で、…わたしの名は天にまで届いている」という表現に通じる。「名声が天に達している」の類いの表現が見られるのは、ホメロスにおいて、ネストルの盾について言われる『イリアス』8.192 の他は、オデュッセウスに関する『オデュッセイア』のこの箇所のみであり、彼の名声と密接に結びついた言い回しである⁽⁵¹⁾。彼の「狡知の業」の代表が、木馬の計である。この歌でもやはり木馬のことに歌の内容は関連していて、それで「天に達する」有名な話という前置きがあったのではないかという推測は可能であろう。ただし、木馬の中に潜んだ戦士たちの活躍自体は、この「オデュッセウスとアキレウスの言い争い」という歌には含まれなかっただろう。それは、スケリア島では、楽人の三つ目の歌で詳しく物語られることになる(8.500sq.)。おそらく、両英雄の争論を扱う歌では、その後のアキレウスの死を大きなきっかけとして、その後、木馬の計の考案に進むという成り行きが言及されるか、少なくとも暗示されたのではないかと思われる。楽人は、何度も中断し、何度も再開した⁽⁵²⁾。このテキストに短く記されている以上に、彼の歌は長いものであったようである⁽⁵³⁾。

しかし、なぜ彼は、自分の大活躍に通じる趣旨の歌を聴いて涙しなればならなかったのか。二人の英雄が言い争うのを見てアガメムノンは、「心中喜んだ」という。しかしオデュッセウスは、このスケリアに辿り着く以前に冥界を訪れたとき、「悲しみに暮れる」(11.388)アガメムノンの亡霊と出会い、親しく話を交わしている。アガメムノンは、かの言い争いの事件のさいには、十年にわたって続いてきた戦争も、アポロンの予言と照らし合わせると、これでやっと成功裏に終わらせられそうだと喜んだ。その後じっさいにトロイアの陥落は実現した。トロイア攻略は、総大将アガメムノンの誉れとしても讃えられうる事件である(9.263sq.)。ところが、オデュッセウスが冥界で彼自身の口から聞いたように、アガメムノンは帰国したとたんに妻とその間男に謀殺されたのである。オデュッセウスは、スケリア島のアルキノオス王たちに、自分の放浪を回顧して語る中で、冥界での体験の一部をこう述べる。

あなたに、他の、それよりもっと哀れな話をするのも惜しみはしません
—あの後で滅んだ、わたしの戦友たちの受難のことをです。
彼らは、トロイエー人の、敵をうめかせる雄たけびは逃れたものの、
帰国のさいに、悪い妻のゆえに、破滅したのです。

(11.381-84)

「それよりもっと」の句は、トロイアの地で倒れた戦友たちの場合よりも、の意である(11.372 参照)⁽⁵⁴⁾。ここで言われる、トロイア戦争は克服したが、その後で帰国しようとしたときに死んだ哀れきわまる戦友とは、アガメムノンとその部下たちのことであり、この後の箇所、彼の亡霊とオデュッセウスとの会談が記述される。英雄アガメムノンとその部下たちは、今や、むなしい亡霊の姿で現われ、かつてはその逞しい手足にあった強い力は全く無くなっている⁽⁵⁵⁾。間男と妻とにだまし討ちに合った自分の不運をひととおりの物語ったアガメムノンの亡霊は、嘆息とともに、

ほんとうに俺は、
子供や下僕たちの歓迎を受けながら、
家に帰ることになろうと思っていた

(11.430-32)

と言い、妻の行為は女全体の名を汚すことになる振舞いだと付け足す。これを受けてオデュッセウスが答える。

おお、まことにアトレウスの一族に、広くをみそなわすゼウスは、
恐ろしいほどの憎悪を向けていたのだな—それは初めから、
女を通じたはかりごとによっているのだ。ヘレネーのためにわれわれの多く
が死に、
あなたには、遠く離れている間に、クリュタイムネーストラーが策略をめぐ
らしていたとは。

(11.436-39)

このオデュッセウスの言葉は、楽人デモドコスの歌を聴いて彼が泣かされたときの句、

なぜならそのとき、禍の始まりが、偉大なゼウスのはかりごとにより、
トロイェー人とダナオイとに襲いかかろうとしていたのだ

(8.81-82)

と呼応している、つまり「ゼウスのはかりごと」という句を含んでいるのである⁽⁵⁶⁾。「襲いかか(る)」(キュリンデタイ)の語は、より直訳的には「転がる、うねる、押し寄せる」であり、大波が押し寄せるイメージに由来するようである。たとえばヘクトルがギリシア軍に突進してくるときに、「われわれに向かってこの禍が、すなわち剛力のヘクトルが、押し寄せてくる」(『イリアス』11.347)というときの、災禍の接近を表すときに用いられる。また、パトロクロスが倒される前後の危機的状況について、「神がダナオイに禍を転がらせて(押し寄せさせて)来ている」(『イリアス』17.688)という表現もされる。この、神によって転がされ、もたらされる災禍という観点で言えば、いま取り扱った箇所と同じ『オデュッセイア』冥界場面で叙述される、シシュポスの永遠の刑罰を思い起こしてもよいであろう(『オデュッセイア』11.593sq.)。こちらは、山頂から大岩が、下にいる人間に向かって転がり落ちて来るイメージである。山上に向けて押し上げられ、また「転がり」落ちるその懲罰的な岩は、今挙げたオデュッセウスの言葉では、ゼウスからの恐ろしいほどの憎悪と言われ、デモドコスの詩句では禍の始まりと表現される。神から来る懲罰的な禍は、『キュブリア』に見いだされるような「人口削減計画」に関連するかもしれない。そこでも、トロイア戦争は、大地にかかる人間の重みを減らすための「ゼウスのはかりごと」で起こされたものと言われている(断片1)⁽⁵⁷⁾。根拠ある懲罰なのか、人間には必ずしも分からないが、とにかく神々に憎悪されているらしいことが感じられる。

冥界訪問以来久しぶりにアガメムノンの名を耳にしたオデュッセウスが涙したのは、くだんの言い争いに接して「喜んだ」アガメムノンが、そしてその後、自分の計略のおかげで大目的を達して、華々しい凱旋の中、大いに「歓迎」されるはずと思い込みながら帰国したこの総大將が、惨めな死を遂げたという事実を、冥界での彼の情けない亡霊姿の情景とともに、新たに想起させられたからであろう。それは、もちろん、まだこれから帰国しなければならぬ自分の運命にもかかわっている。せつかくそのような大手柄を立てた後で、十年も放浪し続けている彼には、アガメムノンに対してと同様、自分自身に対しても、

神々の「憎悪」が向けられていると感じられる。そこで、涙を流しつつ彼は、神々の意を宥めようと、何度も地面に酒を注ぐ⁽⁵⁸⁾。

(8) 二回目の慟哭——悲嘆する喜び

二回目の慟哭を引き起こす歌——デモドコスの吟唱全体では三つ目の歌——の主題、つまり木馬の計による陥落は、上記のように、オデュッセウス自らリクエストをして吟唱させたものに他ならない。この点は、彼自身がとにかくこの主題を好み、誇りにしていたことを示すわけである。彼は、第一回の歌においても、上記の解釈によれば、木馬につながる話を聴かされた。少なくともそれは、トロイア戦争そのものにかかわっている。そしてそれを聴きながら彼は涙した。ではなぜまた彼は、おそらく同様の反応に自分を駆りたてると予期する同じ種類的话题を、自分で望んだのか。

オデュッセウスが、トロイア戦争の——おそらく陥落の——主題をふたたびリクエストしたとき、それが自分を悲嘆の中に突き落とすだろうことは、おそらくある程度覚悟していたであろう。彼は、宴の初めのほうで、自分の分になっている肉の一部をデモドコスに贈りながら、彼に対する思いをこう述べる。

触れ役よ、ほら、これをデーモドコスに持って行って、彼が食べるようにしてやってくれ。

彼にわたしは、悲しみの中にいるが、好意を示したいのだ。

(8.477-78)

そして、楽人たちには、世人の敬意や、ムーサの恩寵が与えられていると言葉を続ける。デモドコスは肉を受け取って喜ぶ。しばらく宴が進行し、一同が飲食に充たされたとき、オデュッセウスは今度は直接楽人に話しかける。

デーモドコスよ、わたしは人間すべての中でお前をいちばん称賛する。ゼウスの娘ムーサがお前を教えたか、アポローンがそうしたかに違いない。というのは、アカイオイの運命を、とても適切にお前は歌うからだ——アカイオイが何をなし、どういう目に会い、どのような苦勞をしたかという

ことを。まるで、おまえ自身がそこにいたか、他の[そういう]誰かから聞いたかのよう

(8.487-91)

そう言って、「悲しみの中にいるが」、木馬の計と陥落のことを歌うよう求めるのである。

やはりトロイア戦争の主題を扱う第一回目の歌で涙した英雄が、ここでふたたびあえてそれを望むのは、何か心境の大きな変化があったのだろうか。第一回の歌とこの歌との間には、しばらく時間が経過している。この間に、場所は一時屋外に移った。そして、運動競技においてオデュッセウスは、長い放浪で痛めつけられた身体であるにもかかわらず、円盤投げの競技で他を圧倒して面目を施した。その後、神々の密通事件の歌を聴き、これは一種屈託のない歌であり、しかも、上で述べたように、上首尾の帰国への希望をある程度持たせてくれる歌だったので、喜ぶことができた。その後でまた王宮の中に入り、いま引用した宴の場面になり、デモドコスへの話しかけとリクエストに繋がってゆく。この展開自体を見れば、屋外で浩然の気に接し、そのように自分の力を再確認し、嬉しい歌に接する間に、彼は、「英雄的な自信に目覚め」、この心理で、自分の最大の功績を聴きたいという気になったのだ、と解することができるだろうか⁽⁵⁹⁾。

しかし、アキレウスと自分との言い争いの歌を聴いて滂沱の涙を流したときと、このリクエストをするときとの間に、彼の心理が変わっているしは見られない。上記のように、ヘパイストスたちにかかわる歌には、懸念をもたらす要素も存したから、気を晴らさせるまでには至らない。「わたしは、悲しみの中にいるが」と言いながらそれをリクエストする彼なのである。そしてそれに応じる楽人の歌が、「アカイオイが何をなし、どういう目に会い、どのような苦勞をしたか」という辛い話題を含むことを彼は承知しながら、それを求めた。心理的に言って、自分の功績が目の前で吟唱される喜びを求める気持ちもあったであろうが、同時に、少なくとも無意識のうちに、悲嘆への憧れに動かされ、それに身をゆだねたいと願った彼だったと推察できる⁽⁶⁰⁾。かりに、自分の功績への思いにある程度充たされて屋内に戻ったとしても、おそらく、次に聴かされるデモドコスの歌によって、「そういう手柄を立てた自分なのに」という気持ちから、むしろ改めて悲嘆を呼び戻し、それを増大させることにさえただろう。

(9) オデュッセウス自身による涙なしの陥落回顧

では、ここでオデュッセウスが憧れる悲嘆とは、より具体的に、どういう性

質のものか？ 単に、この比喻は、彼が哀れな状態にあることを浮き彫りにする、と説明するだけでは不十分だからである。さらに、その涙が喚起されたきっかけをより特定する必要がある。しかし、それに対する答えを出す前に、もうひとつの問題に触れておこう。

じつは、デモドコスの歌を聴いて泣かされた後、それほど時間も経過していないとき、そのオデュッセウス自身が、木馬に関する話を自分自身で物語る箇所が他にある。場所はやはりスケリア島であり、聴衆も同じである。そこではオデュッセウス自らが、冥界における体験談を王宮の人々に語り聞かせる「アポロゴス(回顧談)」中の一節になっている(11.523 sq.)。ところが、この場面では彼は、語りながら泣いたりはしない。この違いは何故なのか。

上で挙げた論者たちによると、彼が楽人デモドコスの歌におけるトロイア戦叙述を聴いて、捕虜女との比喻を通じて描かれるような強烈な悲嘆に突き落とされたのは、彼が、敗残の女へ心理的に同化し同情したからであり、あるいは勝者たる自分と敗者の側とに共通する、人間の哀切な状況を感じ取ったからである⁽⁶¹⁾。しかし、木馬に関連するそのデモドコスの歌と、オデュッセウス自身による叙述との間に、この戦闘事件の英雄性、あるいは一心的同化説に立つて言うなら——その裏面として挙げてもよい残虐性の観点において、相違があるわけではない。より具体的に、両方の箇所を見てみよう。

デモドコスの歌のさいには、まずオデュッセウスが次のようにリクエストをする、

さあ話題を変え、木製の馬の仕かけについても
歌ってくれ。エペイオスがアテーネーの援けを得て造ったのを、
神々しいオデュッセウスが、たばかりの道具として、[トロイアの]城砦にも
たらしたあの馬のことを。
その中に戦士たちを充たしておき、彼らがイーリオスを全滅させることにな
ったのだ。

(8.492-95)

このリクエストを受けて楽人が、ギリシア軍による偽りの退却から始めて歌い進む。すでに木馬がトロイア市中に引き入れられ、広場に据えられている情景描写を経て、察するにその終わりのほうの部分として、こう吟唱した。

都は滅びる定めにあったのだ、
すべてのアルゴス人の勇者たちが、トロイエー人たちに殺戮と死をもたらそ
うとして
その中に坐っている木製の大きな馬を、受け入れてしまったときには、
彼[楽人]は歌った、アカイオイの子たち[ギリシア軍]が、うつろな潜み場所
を去って、馬から抜け出、
市を滅ぼしたさまを。
彼は歌った、他の者は、それぞれの場所で、そびえる都を破壊していった、
しかしオデュッセウスは、神に等しいメネラーオスとともに、
アレースのような様で、デーイポボスの館に向かった、
そこで、とても恐ろしい戦いを試み、
それから、大いなる心のアテーナーの力で、勝利をおさめた、と。

(8.511-20)

他方、いま扱っている二箇所うちの後のほうで、オデュッセウス自身は、ア
キレウスの子ネオプトレモスの勇武のことを称賛して語る中で、木馬の件に言
い及んでこう述べる。

だが、エペイオスが造った馬に、われわれアルゴス人の勇者たちが
乗り込んだとき——[戦士で]密集したこの潜み場所を、開けるのも閉じるのも、
すべてわたしに任されていたのだが——
…（他の者たちはびくびくしていたのに、彼はそうではなく）…
わたしに、馬から出させてくれと
何度も頼みながら、剣のつかや、
青銅で重い槍に手を伸ばすのだった。そしてトロイエー人たちに禍をもたら
そうと逸っていた。
だがわれわれが、ブリアモスのそびえる都を攻め落とすと、
彼は、十分な分け前と誉れの品を手にして、自分の船に乗った。

(11.523-25, 530-34)

前置きで、エペイオス制作の馬に、めぼしい勇士たちがすべて乗り込んだとい
う表現も互に対応し、また、この作戦を指揮するオデュッセウスの栄光や彼
自身の誇らかな気持ちにも、両箇所共通して言及される。「(自分) 神々しい

オデュッセウスが、たばかりの道具として…」の句と、「密集したこの潜み場所を、開けるのも閉じるのも、すべてわたしに任されていた」の詩句とは呼応する。他方、木馬の中のギリシア人たちが、トロイアに対する戦意に充ちていたということも、両箇所と同様に述べられる。「アルゴス人の勇者たちが、トロイエー人たちに殺戮と死をもたらそうとして」という文と、「トロイエー人たちに禍をもたらそうと逸っていた」という詩句とが対応する。なお、「トロイエー人たちに禍をもたらそうと…」の文は、ネオプトレモスについて言っているが、ここで彼はギリシア人の代表、手本として称賛的に描かれている。ギリシアの戦士たち全員が、敵意と殺意にあふれていたことはもちろんであり、その点が両方の箇所でも、「他の者は、それぞれの場所で、そびえる都を破壊していった」とか、「われわれがプリアモスのそびえる都を攻め落とすと」と言われているのである。後者の箇所でも、「われわれが…攻め落とすと、彼は、十分な分け前と誉れの品を手にして」という「われわれ」には、オデュッセウスが、自分の口で語りながら、自分自身を含めて言っているわけであり、彼も、作戦の発案・指揮者として、そういう褒賞品を十分に与えられ、それを誇らかな気持ちで受け取ったはずである。

要するに、デモドコスの歌によって泣かされた彼は、その後も、いわばそれに懲りることなく、内容や表現においてその歌に通じる同じ話を——自らの手柄に直接関係する英雄的な勲功談を——自ら、涙なしに——むしろ誇りを交えて——語るのである。この流浪回顧談では、トロイア攻略以外にも、キコネス族の町を滅ぼし、「妻たち」——くだんの「逆さ比喩」での捕虜女を参照——と財産とを奪って皆で分け合った、と悪びれず述べる彼である(9.41 sq.)。楽人の歌で、敗者への同情に目覚めたと称されるオデュッセウスは、かくまでも簡単に、短時間(半日の間)に、自分の良心の痛みを忘れてしまったのか^(6.2)。デモドコスのくだんの歌と、オデュッセウス自身による叙述との間の相互関係や、その相違の原因を説明することは、解釈者にとっていわば大きな試金石である。この観点から言って、同情説、心的同化説が、論理的に苦しいことは明らかである^(6.3)。

(10) 「逆さ比喩」における誇張表現と家族への思い

くだんの捕虜女との比較は、上記のように「逆さ比喩」の一例である。別の例として挙げられる^(6.4)ある箇所も独特である。すなわち、上でも少し触れたオデュッセウス父子の再会場面で、彼らが喜び涙する様子を、ハゲワシの行動に喩える箇所である(16.214 sq.)。

そこでは、二十年ぶりに帰国した父に息子は抱きつき、両方が「悲嘆への憧れ」に身を任せて慟哭した、彼らは、まだ羽根が生える前の雛を人に奪われたハゲワシ以上に⁽⁶⁵⁾頻りと大声で泣いたと叙述される。ここでは、オデュッセウス父子は、再会できて喜び合う中で涙に暮れるのだが、鳥たちは、子と引き離されて文字通り嘆く。そのように状況的に反対のみならず、雛を奪われた鳥は一種の「犠牲者」であるのに対して、帰国を果たし、しかも息子と無事再会した英雄は、まだ求婚者への復讐が残ってはいるが、ほとんど「勝者」と言ってもよいわけである。少なくとも、この「敗者」を虐げる人間の一人である。この鳥はハゲワシ類⁽⁶⁶⁾で、叙事詩ではけっしてイメージの良いものではない。そういう鳥に、英雄オデュッセウス父子が、悲嘆の振舞いの観点からなぞらえられている。しかし、いくらなんでも「勝者」の英雄たちの、「敗者」ハゲワシへの心的同化や同情がここには認められると論じる人はいないだろう。せいぜい、多数の求婚者たちとまだこれから戦わねばならない無勢の英雄父子の非力な情勢が、そういうハゲワシたちと相通じるものを感じさせうる、という程度である。しかしそれは、心理的な類比ではない。この点は、いま述べたように、ほぼ正反対である。

むしろ、この比喩の特徴としてまず認められるのは、その表現の誇張性である。これらの鳥が、非常に大きな声で、しかもひっきりなしに鳴くことがあるという習性が人々によく知られ、耳目を引いていたと推察されるが、それを上回る仕方で父子は激しく泣いたと、誇張した言い方が用いられる。

より重要な点は、これらの鳥たちが特別に示すとされる子への愛である。そういう大きな鳴き方が、ほんとうに雛をとられたときのものなのか、確かではあるまい。しかしいずれにしても当時の人々は、そう信じたようである。そしてそれは、この鳥たちの家族愛の現れと考えられた⁽⁶⁷⁾。

もちろん「逆さ」という独特の性質自体がすでに聴衆・読者の注意を喚起するが、この比喩は、誇張的表現によってさらに強調を加えながら、家族愛という一点をそれだけ浮き彫りにする。そして、逆さ比喩の多くに共通するのは、そういう家族同士の思いの強調である。それを、逆転した比較でことさら際立たせようとしていると思われる。

問題の比喩における捕虜女の置かれた状況は極限的である。祖国を死守しようとした夫も、子も殺され、国も、自分の自由も失われる。また極端な表現で、「死につつあり、びくびくしている」(8.526)夫の身体に取り付いて、と言われる。ここにアンドロマケの運命を想起しようとする論者⁽⁶⁸⁾もいるが、倒された

ヘクトルがまだ「びくびくしている」とき、その彼にすがり付いているときに、アンドロマケが捕虜になったわけではない。むしろここでは、陥落時のどういう都市でも起こりうる情景を想定している⁽⁶⁹⁾。ただそれがあえて極限状況で考えられ、誇張的に表現される。

そして家族愛が強調される。妻は「愛する夫にすがりついて嘆き」(8.523)、その夫は、国と「子供たち」(8.525)から、無情の日を防ごうとして倒れた。その「子供たち」とも生き別れになることが含意される。女は、単身で、奴隷になるべく引き立てられる。

もちろん帰国という『オデュッセイア』の中心主題に関係している。ただしそれは、対照的狀況を通じてである。ここで描かれるのは、家族と祖国との極限的な意味での喪失であり、また無事の帰還に対極的に位置する悲劇的運命である。戦争を生き抜き、愛する妻と子供のもとへ戻る出征者に対して、この女は、愛する夫と子供から、彼らを殺されることによって、永遠に引き離される。故郷に帰り、父祖の地にふたたび身を落ち着かせる男に対して、こういう女は、祖国から連れ出され、自由の身から、異国での奴隷の境遇に突き落とされる。

そのような、帰国の実現とは完全に対極的な運命を表すのには、女性を基に叙述するほうがふさわしい。いうまでもなく英雄時代には、市内に留まる妻が夫を戦場でなくすという事例のほうが、逆の場合よりも圧倒的に多いはずであり、女性が、この種の家族喪失の悲劇的情景において主役にされるのは自然なのである⁽⁷⁰⁾。「そのように」、そういう女のように、衰れた様子でオデュッセウスは泣いた(8.531)という表現は、帰国との関連で、もっとも悲劇的な状況にある人間が悲嘆するような仕方でも悲嘆したという、彼の外的な様子についての誇張的強調的な表現である。心理的に彼女に、英雄が滅ぼした「敗者」の立場に、同情し、心的に同化して、とは、詩人は全く述べていない。もちろん、それはあり得ないと頭から否定しようとしているのではない。しかし、もしそのように主張するなら、それを支持するテキスト的な、論理的な、あるいは傍証や状況証拠などに基づく、十分な論拠を示す必要がある。しかしそういう努力を払わなければ、ただ思い込み的に印象批判的な読み方へ走っているだけであるという批判を招くであろう。

(11) 何を想い出したか—妻を取り戻したメネラオスとの自己対比

では、くだんの歌の特に何が、どういう点が、オデュッセウスを悲嘆に突き落としたのか。この歌は二部分に分かれる⁽⁷¹⁾。第一部は第8歌499-513行であ

る。神への序から始めながら「歌を示した(*phaine d' aoidēn*)」楽人は、ギリシア軍が、陣営に火をつけてから、退却したと見せかけて船出したこと(じっさいは船隊はトロイア近くのテネドスの蔭に隠れていた)、戦士たちが「名高い」オデュッセウスを中心として馬の腹に潜んでいたが、馬はすでにトロイア市内に引き入れられその広場に据えられていたこと、トロイア人たちが、高所から突き落とせという意見などを含め、その扱いをめぐって三様に議論し合った後、けっきょく神々への宥めの品としてそこに留め置いたこと、トロイア人たちの殺戮のためギリシア兵が坐りこんでいる木馬を市が引き入れてしまったら、もうそれは陥落する定めだったこと、を述べる。第二部は 514 行から最後の 520 行までである。楽人は「また歌った(*ēeiden d'*)」、馬から抜け出たギリシア軍が市を滅ぼしたこと(包括的な句)、戦士たちはめいめいが各場所で破壊を加えていったが、「オデュッセウスは、神に等しいメネラーオスとともに、アレースのような様で、デーイポボスの館に向かった、そこで、とても恐ろしい戦いを試み、それから、大いなる心のアテーネーの力で、勝利をおさめた」、ということを。

このうち、第一部には、少なくともそれ自体で英雄の涙を誘いそうな要素は見当たらない。むしろ、敵の人間に取り巻かれる中で、狭い馬の腹中にじっと息を潜めながら閉じこもっていた、その中心にいたのが「名高い」オデュッセウスだった、という点からして、彼を誇らかな回想に誘ったであろう。潜伏や待ち伏せは、戦士の武徳や度胸のあるなしをいちばん明らかにする作戦行動と見なされていた⁽⁷²⁾、まして今彼らは、トロイア人が突き落とせなどと言いつけているのを耳にしながら、それほどに剣呑な状況下でそこに坐っているのであり、木馬の中の者は(ネオプトレモスを除いてほぼ皆が)恐怖で震え、涙を押しぬぐっていたという他の箇所でも記される言葉も、あながち誇張ではないのである(11.527)。恐怖感という関連ではないが、浮き足立つ一同をオデュッセウスは冷静沈着な態度で制御し、耐えさせたという点を、同じ場所に潜んでいた戦友メネラーオスが、(また別の箇所においてであるが)最大の讃辞とともに証言し、「(木馬内の)アカイア人全てを救った」と称えている(4.271 sq.)。オデュッセウスにとって、自分の勇気や胆力の発揮を誇らかな気持ちで回顧するきっかけにはなっても、それで悲しまねばならないところは全くない。

われわれの答えは、第二部に求められそうである。心的同化論者たちは、ごく概括的な表現であるが、めいめいが各場所で破壊を加えていったという文(516)が、捕虜たちへの同情心をかき立てたのだと唱えたいかもしれない⁽⁷³⁾。しかしこの文は、むしろ、それに続く文を導き、引き立てる役割を果たす句で

ある⁽⁷⁴⁾。「他の者は、それぞれの場所で…破壊を加えていった」、「しかしオデュッセウスは、メネラーオスと…勝利をおさめた」という流れになるのであり、この最後の部分が歌われてから、「このように楽人は歌った」、「しかしオデュッセウスは泣き崩れた」(521sq.)と地の文で続けられる。戦友メネラーオスに関することが、ちょうど一回目の慟哭の時にはアガメムノンの名がきっかけになったように、英雄の思いをかき乱したと見られる。

オデュッセウスとメネラーオスは、デイポボスの館にまっすぐ向かった⁽⁷⁵⁾。「他の者は、それぞれの場所で…」⁽⁷⁶⁾という文とそれは対比され、二人が初めから明確に持っていた目標がそれだけ強調される。トロイア王子デイポボスは、パリスが戦死した後、ヘレネをめぐる兄弟ヘレノスと争った後、彼女の新たな夫に選ばれたと伝えられる⁽⁷⁷⁾。ヘレネをかどわかしたパリスが、ピロクテテスの矢で射られて死んだとき、前夫であるメネラーオスは、その遺体を傷つけ、辱めた⁽⁷⁸⁾。恨み骨髄に達していた証であるが、その憎悪は、今、彼女の新しい夫に向けられていたのである。そしてデイポボスの館に、オデュッセウスとともに、ひたすら突き進んだ彼は、激しい戦闘の末に—デイポボスは生き残るトロイア人で最強の戦士だった⁽⁷⁹⁾—恋敵を倒す。メネラーオスが直接殺したかどうかという点は分からないし、重大でもない⁽⁸⁰⁾。『オデュッセイア』のテキストでは、供を連れず二人だけで闘ったと解し得る。二人が共同で、デイポボス打倒を果たしたのである。ウェルギリウスの記述によると、その後デイポボスの死体は、パリスがそうされたように、むごい仕打ちを受けた(『アエネイス』6.494sq.)。この点も古い伝承に遡りうる。

そしてメネラーオスは愛する妻を取り戻し、自分の船に連れ帰った⁽⁸¹⁾。陥落後、帰国の船出のさいに、オデュッセウスとメネラーオスは袂を分かった(『オデュッセイア』3.130sq.)。その後オデュッセウスは、このスケリア島にたどり着く前に、冥界に下っている。そしてそこで、戦友たちの亡霊にも出会っているが、その中にアガメムノンとその部下たちや、アキレウスとその朋友パトロクロス、アンティロコスや、アイアス(大アイアス)らの姿は認めたが、メネラーオスは、当然だが、見かけていないので、まだ生存中であることを察することが出来たわけである。メネラーオスが、トロイア出立後、長期にわたって放浪し、やっと最近になってスパルタに帰国しているという詳しい点はオデュッセウスには、いまの時点では、知るよしもない。しかしとにかく彼が、あの陥落時に、幸せな様子で愛する妻と船に乗って国に向け旅立った姿は、オデュッセウスの目に今もそのままの状態で見えているのである。彼はもう帰国を果たしたので

ろうか?

二人でいっしょに「とても恐ろしい戦い」を行い、ダイポボスを倒したように、彼とメネラオスは、しばしば共同行動を取った間柄である。オデュッセウスが、出征を促されたときに狂気を偽ってそれを忌避しようとしたという話が、ホメロス以前からあったかどうかは別として、いったん軍に加わると、オデュッセウスは中枢部の重要メンバーとして、アガ멤ノン・メネラオス兄弟に欠くべからざる存在となり、重大な作戦や交渉を任される。それだけでもメネラオスたちに一目を置かれる要因になるが、しばしばそういう仕事において、彼と肩を並べて働いたのである。たとえば、ヘレネの返還を求めてトロイア城内に赴くという、戦争回避か勃発かを決する重大な交渉を任されたギリシア人使節団には、メネラオスとともにオデュッセウスが代表の一人として赴いた(アポロドロス『摘要』3.28)。そしてもちろん木馬の腹中である。「すべての」ギリシアの勇士がそこに潜んだと言われているが(『オデュッセイア』4.272)、めぼしい者では、オデュッセウスの他には、ディオメデス、ネオプトレモス、そしてメネラオスが『オデュッセイア』では挙げられるだけである⁽⁸²⁾。そして馬の中にいたとき「ギリシア人全員を救った」(4.288)オデュッセウスは、そこから出た後、メネラオスと共同行動を取り、最大の危険の中、彼を援けて悲願を達成させる。テレマコスを前にして、もし彼の父オデュッセウスがギリシアに無事帰ったなら、自分の領地を一つ空けて、イタケから彼を家族と国民ごとスパルタに移住させ、日常的に親しく交流したのに、とメネラオスが、いつまでも帰国できない戦友を慨嘆して言うのは、そういう二人の長く深い交際を基にしている(4.171sq.)。感謝を込めてそう言うのももっともなメネラオスであるが、いつまでもなくオデュッセウスの側も、文字通り苦労を共にした仲であるだけに、ひととき親近感を抱いていたはずである。

作品の基礎をなす伝説の観点から言って、長い放浪を共に余儀なくされる両者は、その体験の内容や、それを叙述する詩句において、互いに比較しうる面を持つ⁽⁸³⁾。これは基本的にホメロス以前の伝承による。しかしそれとともに、オデュッセウスの最大の功績、木馬作戦を介して、彼とメネラオスをことさら結びつけるのは、『オデュッセイア』の詩人の意図的構成に他ならないだろう。第4巻でこれに関する追憶が、オデュッセウスを称賛するメネラオスによって行われ、ここ第8巻ではオデュッセウスの聴いているところでメネラオスの名と共にそれが語られることで、それぞれの箇所でも戦友は、そのときの危険に満ちた栄光の作戦を、互いの顔を眼前に思い浮かべながら、追体験することに

なる。

しかし、自分オデュッセウスは、幸せな——と推察される——戦友と比して、受難に次ぐ受難によって、諸所を転々としながら、帰国を阻まれ、妻のもとに戻ることをいつまでも妨げられている。あのときはアテナの援けがあった(8.520)。トロイアで彼女に守護されていたことは、はっきり認識できる。しかし、トロイアを出てからは、女神の恵みはもはや絶たれてしまったのか?⁽⁸⁴⁾ そういう思いに捉われ、その幸福の回復に自ら手を貸した親しい戦友の運命と対照的な⁽⁸⁵⁾、自分の長い苦難を改めて痛感させられた英雄の心は、ここで張り裂けてしまった⁽⁸⁶⁾。

2 冥界における悲哀と希望

(1)冥界行

オデュッセウスは、今は、スケリア島のパイアケス人たちのもとに滞在しているが、陥落したトロイアを出てからこの島に達する前に、さまざまな場所へ漂着したり、立ち寄ったりしている。その一つに冥界がある⁽⁸⁷⁾。冥界訪問談(ネキュイア)は、オデュッセウス自身の口からスケリア人たちに向けて語られる放浪回顧談(アポロゴスまたはアポロゴイ)の一部である。魔女キルケに命じられて行なったこの冥界訪問の主たる目的は、有名な予言者テイレシアスの靈魂に、行く末のことなどを訊くことであつたが、彼以外にも多くの亡霊と出会い、言葉を交わしたり、その活動のさまを目撃したりする。どういう亡霊に関連するかという観点でこの箇所の内容を見ると、以下のようになる。

導入部 最初に総括的に、彼の前に集まってきた靈魂全般に言及がされる(11.36sq.)。

次いで個別的に、

I (1) オデュッセウスの部下エルペノルの靈魂との会話がある(51sq.)。

I (2) 母アンティクレイアの霊を見かけるが、まだ言葉は交わさない(84sq.)。

II そして、もともとの目的たるテイレシアスとの対談が行なわれる(90sq.)。次に他のさまざまな霊たちが姿を見せる。このテイレシアス以外の亡霊たちは、女と男との二種類に大別される。まず女の霊たちで、

III (1) 母の靈魂と今度は親しく話を交わし(152sq.)、

III (2) それから、神話(前トロイア戦)時代の女たち計一四人が現れ、順番

に身の上話をする(225sq.).

次いで—オデュッセウスの回顧談が一時中断される場面(インテルメッツォ)を経て再開されてから—, 神話的な女たちの霊が散った後に現れた男の霊たちのことが語られる.

IV(1) まずトロイアの戦友たちのうち, アガメムノンと言葉を交わし(387sq.),

IV(2) 次にアキレウスと話す(467sq.).

IV(3) 他の戦友たちの霊とも会話した後(具体的記述はない), アイアスにも話しかけるが, 彼だけは応答しない(541sq.).

IV(4) それから, 前時代の男たちの霊を計六人見るが, その様子を窺うだけで, 言葉は交わさない. ただし最後のヘラクレスとは会話する(568sq.).

結部 無数の靈魂たちが集まってきたので恐怖を感じ, 船に戻って立ち去る(632sq.巻末まで).

この冥界訪問談については, 古来から学者たちが、『オデュッセイア』にとって真正ではない部分として, その全体を後代の編集者に帰したり, そこまで行かなくともいくつかの部分の後代の挿入による箇所として削除すべきと解する. とくにIV(4)部に対しては, そういう分析的試みには慎重な学者も, 疑いを向けることが多い^(8, 8). しかしラインハルトも言うように, 分析的アプローチ法は, そういう学者たちの無根拠な「詩作」を次から次へと紡ぎ出させることに通じる. ここでは統一論的な視点で論じる.

この冥界訪問談全体の構成を, 整然とした形で捉えようとする見解があるが^(8, 9), むしろ, より技の隠れた交差的な形のものになっていると考えられよう⁽⁹⁾. そしてその交差は何重にも複雑に絡み合う. それは, 内容, 人物の性格・知識や主人公のかかわり方の観点から言って, 各個別部分の他への関連性が, 多くの場合, 一通りではないことを意味する. それだけ意味が複層的ということである. 何重もの交差と言ったのは, たとえば, 後記でより詳しく説明するが, I(1)はIIともIII(1)ともIII(2)ともIV(1)-(3)とも連関線が引かれるのであり, I(2)とIII(1)とを結ぶ線とも, IIとIV(4)とを結ぶ線とも交わっている. 個々の部分の内容をより詳しく見てみよう.

(2)エルペノル「希望の男」とテイレシアスの予言

まず初めに現れる部下エルペノルは, キルケの島で死んだばかりで, まだ正

式な葬式を受けていないので、冥界に入ることができずにいる。今オデュッセウスの一行は、キルケの指示で、冥界の辺縁、オケアノス河のほとりで地面に穴を掘り、そこに犠牲獣の血を注ぎ込んで、霊たちを闇の奥からおびき寄せようとしている。ふだんは煙や夢のようにむなし、影のような存在である靈魂は、血を舐めると一時的に力を得て、話をする元気が出るのである。迷える霊エルペノルは、オデュッセウスたちの船より先に着いて、このオケアノスのほとり、冥界の入り口付近で彷徨っていたが、彼を認めて真っ先に近寄り、話しかけてきた。この亡霊は、血を飲まずとも、話す力は保持しているというのは、まだ火葬を受けておらず、身体は残っているということかららしい^(9 1)。

エルペノルの言うには、一人だけで、暑さを避けてキルケの館の屋根で、酔っ払って寝ていたとき、一同が発する物音に慌てて跳び起きたが、長いはしごを降りることを失念し墜落した、そして首の骨を折ったのだという(11. 61sq.)^(9 2)。おそらく船上で、あいつがいないと、少し騒いでいたのだろう^(9 3)。というのも、オデュッセウスは、彼が現れるのを見た瞬間から涙を流し、憐れみながら、「どうやって来た？ 船より速く着くとは」(57sq.)と問いかけるのである。そして彼の話聞いてから、キルケの島に戻ったら、葬式をしてやることを約束する。

エルペノルに関するこの小エピソードは、英雄の冥界行や『オデュッセイア』にとってどういう意義を持つのか、従来から研究者たちを戸惑わせてきた^(9 4)。クレーンの考えによると、エルペノルの死は、オデュッセウスとその一行の行動に何の影響も及ぼさない^(9 5)。しかし、繊細な意味を情感豊かに感じ取るラインハルトは、このエピソードにおいて描き出される信実と愛に満ちた追憶に、名もない者に対する戦友としての務めの遂行に、われわれの注意を向けさせる^(9 6)。エルペノルは、オデュッセウスの部下の中でもっとも若い男であり、まだ手柄も立てていなかった。またその死に方から窺われるように、ややおっちょこちよいの気味があった。彼のことをスケリア人たちに、以下の引用文のように語るとき、リーダーだったオデュッセウスの口調には、バカな奴め、だが可哀想なことをした、という思いがにじんでいる。キルケの指示を果たすため、夜明け早々に彼は、部下たちをたたき起こす。

「もう今は、寝続けて甘い眠りをむさぼるな。
さあ行こう。女王キルケーが、すでにわたしに指示を与えているから」
こうわたしが言うと、彼らの雄々しい心は従った。

しかし、それでも、そこからでも、同僚たちを無事に連れ出すことはできなかった。

いちばん年若のエルペーノールという者がいた。あまり

戦でも強くなく、分別もしっかりはしていなかった。

彼は一あいつ奴⁽⁹⁷⁾、同僚たちと離れて、キルケーの聖なる館で、涼しさを求め、酔いつぶれて寝ていたのだ。

(10.548-55)

そしてエルペノールは、皆が出かける物音に慌ててしまい、上記のような死に方をする。

冥界で靈魂としての彼に再会し、深く憐れんだ(11.55)オデュッセウスは、彼の願いの通りに、キルケの島に戻った後、彼には分不相応とも思える立派な葬式をしてやる。このエピソードが、直後に現れる母アンティクレイアとの場面に、あふれる情愛の点でつながることを、ラインハルトは指摘する⁽⁹⁸⁾。それとともに、戦友への強い思いや義務感という点から言って、アキレウスら偉大なトロイア戦士たちと対談する箇所(IV(1)-(3))にも通じている⁽⁹⁹⁾。ただ、ラインハルトの言うように、エルペノールという、「戦で(も)強くない」、無名の頼りない部下にも、オデュッセウスは分け隔てのない愛を向けたということが示されるのである。もちろん、年若の分だけ、目をかけてもいたのだろう。

しかし、エルペノールのエピソードには、もっと大きな意味、より広い関連性もありそうである。自分の死んださまを説明した後、彼はオデュッセウスに嘆願する。

今はあなたに、後に残っている人たち、ここにはいない人たちにかけて
一奥様と、あなたを小さいときから育てたお父上と、
あなたの屋敷に一人子として残されてきたテーレマコスの名にかけて一お願い
します。

…(キルケーの島に戻られることは分かっているの)…

それから、その島で、王よ、頼みます、わたしのことを想い出してください。
わたしのことに構わず、哀悼も葬式もせずに後に残して立ち去ることで、
あなたに対する神々からの怒りの元にわたしがなることがないように！

(11.66-68, 71-73)

「後に」、故郷に、残してきた人々のもとに、あなたが無事帰りたいと思っているなら、というこの嘆願の前置きは、『イリアス』第 15 巻でも見られる定型的な文で、そこでは、自軍の船泊まりのところへヘクトルたちによって追い込まれ、窮地に陥ったギリシア人たちを、老将ネストルが励まして、「子供と妻と財産と親たちのことをめいめい思い出せ」と言いながら、「ここにいない彼らのために、ここでわしは嘆願する、しっかり踏みとどまれ」と訴える（『イリアス』15.662sq.）。

しかしそこ、今の箇所と異なるのは、第一の点として、ネストルの言葉での「子供」が、ここでは一人息子テレマコスに特定されることである。他のメンバーは、日本語訳では「奥様」「お父上」としたが、直訳すればさっけなく「妻」や「父」であり、特定の名（ペネロペ、ラエルテス）に変えられてはいない。父については「あなたを小さいときから育てた」という句が付くが、一般的な表現である。

第二の点として、ネストルの激励では、お前たちがこの窮地を脱して家族に再会したい（帰国したい）のなら、という帰還願望へのストレートな訴えかけであるのに対して、エルペノルの嘆願では、「あなたに対する神々からの怒りの元にわたしがなることがないように」、そしてその結果帰国が妨げられることのないように、という一つの脅しを介している点である。ここでは、冥界場面にふさわしいと言えるが、宗教的な観点が持ち込まれている。同様の脅しは『イリアス』第 22 巻で、ヘクトルの口から放たれる。アキレウスから瀕死の傷を負わされた彼は、自分の遺体を父母へ、葬儀のために、渡して欲しいと頼むが、アキレウスは無慈悲に拒絶する。するとヘクトルは、「俺が、お前に対する神々の怒りの元にならないよう、よく考えよ」（『イリアス』22.358）と言って、いつの日か、パリスとアポロンによって彼が倒されることになるはずの日に、予言的に言及する。これは、化けて出てお前（オデュッセウス）に祟ってやるぞ、といった「幽霊理論」的な脅し⁽¹⁰⁰⁾というより、その『イリアス』の箇所で「神々」が「アポロン」によって具体的に言い換えられるように、葬儀という宗教的義務に背く不敬な行為に下される神々の懲罰ということを表すはずである。あるいはエリニース（復讐の女神）の呪いに関係するだろう⁽¹⁰¹⁾。その限りでは、「祟り」の脅しといってもよい。ただし、オデュッセウスがエルペノルの願いに応じてキルケの島でそれを遂行するのは、そういう宗教的懸念もあるとともに、やはり部下への愛情にも基づいている。「滂沱の涙を流しながら」、弔いをし、哀悼する彼である（『オデュッセイア』12.12）。

つまり、エルペノルのエピソードでは、親しい者（戦友や家族）の想起⁽¹⁰²⁾ということ以外に、「一人子」テレマコスという点がことさら取り上げられる点で、この冥界場面を通じて繰り返して出てくる子孫の主題一般につながるのであり、とくに、アガメムノンの子のことなど、IV(1)-IV(3)での一人子の家系の英雄たちの物語に、この意味からも、連結線が結ばれるのである⁽¹⁰³⁾。

そして、もう一つの重要な関連性は、宗教的要素や葬式のされ方から見た、他部分とのつながりである。これは、『オデュッセイア』の冒頭以来出てきた太陽神やポセイドンの怒りという作品全体の中心主題に関係する。自分が英雄にとって、「神々の怒りの元」にならないように、というエルペノルの言葉(11.73)は、直訳ではずばり「神々の怒り(テオーン・メーニーマ)」であり、エルペノルはここで、一種の神々の使いのように機能している。彼の願いをかなえてやることは、神々の怒りを回避することになる。神々からの憎悪ということが、オデュッセウスの意識につきまとい離れないことは、楽人デモドコスの第一回の歌に接したさいにも示されていたが、この冥界訪問談の中では、テイレシアスの予言においてこの点が焦点におかれるのと呼応する。テイレシアスは、オデュッセウスの苦難が、彼によってその息子ポリュペモスを盲目にされたポセイドンの怒りに起因することを教え—これは子孫の主題にも関係する—、さらに太陽神の聖牛に手をかけないようにという警告によって、もうひとつの「神々の怒り」にも触れる。ポセイドンの怒りは、神の力を軽んじたオデュッセウスの思い上がり(ヒュプリス)によって、また太陽神のそれは、警告を守らなかった部下たちの愚かしさ(アタスタリアイ)によって引き起こされる。

さらにわれわれの注意を引くのは、エルペノルの骨を埋めた塚の上に彼の愛用したオールを突き差し、墓標の代わりにするという点が、やはりテイレシアスの予言の中にある一つの指示を思い起こさせることである。自分が「神々の怒りの元にならないよう」配慮してくれと言うエルペノルは、具体的な処置として、キルケの島へ帰航した後、次のような葬式をしてくれるようオデュッセウスに要望する(上の引用文の続きである)。

いや、わたしを、わたしの持っている限りの武具とともに火葬し、
さらに、波頭白き海の岸辺に—哀れな男のことを、後世の者たちも知って
れるよう—
わたしのために塚を盛ってください。
こういうことをわたしに果たし、墳墓の上には櫂を突き差して欲しいのです

—生きているときも、わたしの仲間たちのあいだで、わたしが操っていたあの權を！

(11.74-78)

そしてオデュッセウスは、キルケの島に戻ってから、涙とともにそれを果たしてやる。島の「海岸のいちばん先端が突き出たところで」(12.11)、彼を薪山の上で焼き、その上に塚を盛って、墓標の柱をそこに引き上げ立ててから、

墳墓のいちばん高いところに、彼の手に馴染んだ權を突き差した。(12.15)

他方、エルペノルのエピソードの次に来るテイレシアスの霊との対話では、他のこととともに、ポセイドンの怒りをオデュッセウスがいかに宥められるか、という点が教示される。帰国の主題と神々の怒りとは、本叙事詩で互いに密接に関係する主題である。後者の主題にとって、悲劇的伝説に充ちたテバイの有名な予言者テイレシアスは、適合した役割を果たしうる⁽¹⁰⁴⁾。そしてさらに、予言者の知恵にふさわしく、オデュッセウスの運命のずっと先のほう、その終焉にまで言及する⁽¹⁰⁵⁾。

帰国を遂げ、また求婚者たちを殺したら——とテイレシアスは英雄に言う——

そののちに、手に馴染んだ權を取り、歩いてゆくがよい、
海を知らず、また、塩を交えない食事を食べる人々のもとに到るまで。
彼らは、頬が朱色の船も知らず、
船の翼たる、手に馴染む權も知らない。
その明らかな徴をお前に話そう、すぐ気づくはずだ。
道を行く他の人が、お前と出会って、
初殻をほろぼすものを、輝かしい肩の上に担いでいると言ったら、
そのときに、大地へ、手に馴染んだ權を突き差し、
見事な犠牲を——雄羊、牡牛、そして雌豚に乗りかかる雄豚を——
主ポセイドンに捧げてから、
家に戻り行き、聖なる百牛のにえを、
広大な天に住む不死の神々へ——その全てに順番に——
奉ずるのだ。お前自身の死は、海から離れて、
まことに穏やかにやって来るだろう。それが、
裕かな老年によって弱められているお前の命をとることだろう。そして周り

には、
幸せな民が住んでいるであろう。こういうことをわたしは、確かなこととして告げる。

(11.121-36)

「手に馴染んだ權を突き差す」行為は、一方では盛り土の上で、他方では大地の上でなされる。この象徴的な行為の一方は、冥界に入れずに迷っていたエルペノルの霊にとってその障碍を取り除き、その限りで安らかな居場所を彼に得させてやると同時に、オデュッセウスにとっては「神々の怒り」を防ぐことにもなる。他方は、放浪を重ねてきたオデュッセウスのその苦難の原因であるポセイドンの怒りを宥め、故郷での安楽な死と、統治者としての恵まれた生涯の完結をもたらす。天上に住む神々、とくに太陽神の怒りも、犠牲を通じて鎮めることになる。テキストで明示はされないが、エルペノルを焼く薪山や塚の上でも、酒注ぎなどそれなりの儀式がおこなわれたであろう。宗教儀礼の慣習では、一定の規則が守られるからである。

たしかに一方は、戦友エルペノルのためにしてやる行為であり、他方は、第一義的には、自分の安心立命のためにするものである。オデュッセウスの場合は、「甘美な帰国」(11.100)の完全な成就であるのに対して、エルペノルのは、一種夢半ばでついでた若者の運命の帰結である。しかしエルペノルが、「わたしの仲間たちのあいだで、わたしが操っていたあの權」を、自分の記念碑として立ててくれるよう望むように、そしてオデュッセウスがそれに応えて、彼のことを「後世の者たちも知ってくれるよう」、島の突端の目立つところに立派な⁽¹⁰⁶⁾塚を築いてやったように、他の戦友同様英雄になる夢を抱いていたエルペノルが、今それを、アキレウスの塚にも似た記念の墓という形で曲がりなりにも実現したのは、不完全な形ながら、オデュッセウスの戦士としての人生にも通じている。そして大地に立てる權は、彼自身の安らぎをいずれもたらす手段になることを、テイレシアスの予言によって知っているオデュッセウスは、そのことを頭のどこかに置きながら、今キルケの島で、深い愛情とともに、エルペノルへの務めを果たしてやる。少なくともここでは、英雄の他者への「心的同化」を確言してよさそうである⁽¹⁰⁷⁾。いや、エルペノルは他者ではなく、彼が長年の苦勞を共にした、そして可愛がっていたと思われる若き戦友である。少し頼りない男ではあったが、ある意味ではオデュッセウスの分身であることが、權のシンボルで示されている。

エルペノルという人名は、「エルピス=希望」という要素を持ち、「希望の男(の

子)」という意味合いを持つ⁽¹⁰⁸⁾。これは、詩人がある意味を込めて導入した虚構の人物であるらしい。ラインハルトはそれを、「裏切られた希望」という皮肉または悲劇の意味合いで捉えるが⁽¹⁰⁹⁾、はたしてそこには否定的な側面だけしかないであろうか。「手に馴染んだ櫂を大地に突き差す」という象徴的行為によって、自分の終焉の平安をかちえる方途をテイレシアスから教示された英雄は、戦友への愛情と哀悼を込めてエルペノルの塚の上に彼の櫂を突き差すとき、自分自身の希望の日々にも思いを馳せる。この小さなエピソードは、単に、第10、11および12巻を結ぶつなぎ的なヒトコマであるという「定説」⁽¹¹⁰⁾によっては捉えきれない深い情感や、光明を覗かせる展望を織り込んでいる。

(3) 母アンティクレイアの霊—悲哀と安堵

英雄が、エルペノルの次に話をする相手は予言者テイレシアスであるが、実はその前に母アンティクレイアの霊が、オデュッセウスの目の前に現れた。トロイアに向け出発したときはまだ生きていた彼女をここで見出した英雄は、涙を流し、哀れんだが、それでも、まず予言者の話を聴くことが本来の目的であるという考えから、「しきりと慨嘆しつつも」(11.88)、血を流した穴の上に剣をかざしつつ、そこに近づくことを彼女に許さなかった。ここには、リーダーとして、自分と部下たちの帰国のためには、いとし者への感情も克己的に抑制せねばならないディレンマと悲哀が簡潔に表現されている。

しかし、テイレシアスの少し長い話が終わった後、その予言・教示そのものへの返答はそそくさと一行だけで終わらせて(11.139)、自分がいることを母にどう分かせたらよいかとテイレシアスに尋ねる彼である。「目の前の自分が認識できないようだ、まっすぐ自分を見ようともしないし、話しかけてもくれない」と。「答えは容易だ、血に近づけ(舐めさせ)れば、(お前のことを認識し)確かなことを話すようになるだろう」、そう言って予言者は立ち去る(11.146sq.)。オデュッセウスは、ふつうの靈魂に適用されるこの冥界の原理をはじめて教えられる。未葬儀状態のエルペノルは話す力や意識をまだ失っていない、テイレシアスはそれをもともと保持している特別な霊だったのである⁽¹¹¹⁾。最愛の一人息子をすぐ目の前に見えても、血を飲まない限り、それと分からない母の靈魂であった。とにかく英雄は、彼女を迎えるべく、そのままの態勢で母の近づくのを待つ。血を飲むと、彼女は、直ぐにオデュッセウスを認めた(11.153)、そして嘆きながら話しかけた。

英雄と母との再会は、この『オデュッセイア』の冥界エピソードでもっとも

悲哀に充ちた場面として有名である。アンティクレイアは、自分の死に関して、

おまえを焦がれる気持ち、おまえの智慧が、輝かしいオデュッセウスよ、
またおまえの優しさが、わたしのいとしい命を奪ったのです

(11.202-03)

と言って、頼もしい智慧により「輝かしい」名声をはせている誇らしい息子のことを、また、自分にいつも優しい心遣いを見せてくれた彼のことを、長い年月待ち続ける心痛が、自分の命取りとなったことを明かす。「いとしい命を奪う」という表現は、伝統的には、敵の戦士の殺害を表す句である⁽¹¹²⁾。ここでは、愛される息子が、彼への愛情を介して、母を殺すという逆説的文脈で用いられ、この冥界訪問談全体を貫いている要素の一つたる子への思い、あるいは子孫という主題が、もっとも濃密な形で出ている。『オデュッセイア』創作のための素材の一部となった民話「帰国する夫」では、主人公の帰国のさいにはまだ母は生きていて、その復讐などの手助けをしたという説がある⁽¹¹³⁾。もしそうだとすると、『オデュッセイア』の詩人は、彼女を先に死なせ、冥界で悲しい再会をさせたことで、この代表的なペーソスの場面を独創的に演出したことになる。

また、オデュッセウスが三度母を抱こうとしたが、亡霊はその都度、影や夢のように、彼の両手をすり抜けたという場面はとくに有名である(11.204sq.)。先行例として、やはり『イリアス』で、まだ火葬を受けていないパトロクロスがアキレウスの夢の中に現われたのを、アキレウスが抱こうとして果たせないという箇所がある(『イリアス』23.65sq.)。こちらは一回のみの試みに終わる(23.99sq.)という相違点があるが、しかし、さらに重要と思われる違いは、『イリアス』の箇所では、アキレウスによる抱擁の試みの前に、パトロクロスの霊のほうからも、(最後の)握手をしようと友に呼びかけるという点である(23.75)。アキレウスは、一つにはそれに応じる形で彼を抱こうとするが、果たせず、霊はきいきい鳴きながら、まるで煙のように地下へ降っていった、と叙述される。霊魂には、生者が抱擁できるような実体はもうないということをパトロクロスは(まだ)知らない。火葬を受けていないパトロクロスは、迷える霊なので、そういう自己認識がまだ得られていないらしい⁽¹¹⁴⁾。アキレウスが誉れある火葬の準備を進めているのに、そのこともパトロクロスの霊魂は知らないようである⁽¹¹⁵⁾。

それに対してアンティクレイアは、いわば正式な霊魂なので、冥界の原理や

掟はよく了解している。彼女のほうから、抱き合いましょうと呼びかけることはしない。感極まったオデュッセウスが、彼女を抱こうとし、三度すり抜けたことを嘆息して、どうして逃げるのか、それともあなたは、ペルセポネがわたしをそれだけ嘆かせようとして送り込んだ単なる幻像なのかと言うと、彼女は、智恵ある息子にこう教え諭す。

ああ、わが子よ、すべての人間でいちばん不幸せな男よ、
ゼウスの娘ペルセポネイアがおまえを騙しているわけではない。
いや、これが死すべき者の定めなのです、人が死んでしまうときには。
つまり、肉や骨を筋が結び合わせることはもはやなく
…(それらは火に焼き尽くされ)…、
魂のほうは、夢のように[身体から]飛び去って、ひらひら飛び回るものになるのです。

(11.216-19, 222)

靈魂は、血を飲めば「直ぐに」(11.153)意識を取り戻すが、逆に言えば、この一時的な力が失われれば、直ぐにまたその状態になるということである。冥界の悲しい原理をこのように教え諭したアンティクレイアは、この後また、血を飲まぬ限り、自分が死ぬほど愛した肉親が目の前にいても認識できないという、外的にもそうだが意識的にもぼんやりした存在に戻る。こういう点を思い合わせると、その哀れなギャップの大きさが、アンティクレイアをめぐる悲哀の情をそれだけ強く感じさせる。

しかし他方では、少なくとも今は、パトロクロスの霊と違って、道理もわかり知識も取り戻しているアンティクレイアである。ただしテイレシアスのように遠くまで予見できるわけではない。死ぬ瞬間までのことが、彼女の亡霊の記憶に甦ったということである。彼女は、イタケの情勢について質問する息子に答える。オデュッセウスの問いは、母がどういう理由で死んだのかという上記の点を除くと、一つは、「父および後に残してきた息子のこと」(11.174)に関してである。これは、領主としてのオデュッセウス自身の「特権(ゲラス)」を二人がまだ保持しているか、それともすでに他の者が握っているかという、自分の家をめぐる政治的な状況の問題にかかわっている。もう一つは、妻がどういつもりでいるのか、どういう心でいるのか、家に留まってすべてを守っているか、それとももう他の男と再婚したか、という問いである。

アンティクレイアは、彼の質問に対して、逆の順に答える⁽¹¹⁶⁾。まずペネロ

ペのことであるが、彼女アンティクレイアがイタケで死んだ時点では、求婚者たちがペネロペへの求愛のために館に押しかけてくるという事態はまだ起きていなかったはずである。今オデュッセウスが行なっている冥界訪問は、トロイア陥落後13年目ころの出来事だが、求婚者たちが館にやって来だすのは、オデュッセウスが帰国する20年目の時点から見て3,4年前、つまりトロイア陥落後17年目頃からだからである⁽¹¹⁷⁾。アンティクレイアの前に英雄と言葉を交わした予言者テイレシアスは、彼女とは異なり、遠く将来まで見通す力を有しており、この冥界訪問よりも約7年後にオデュッセウスが帰国することももちろん予告するし、さらに、そこで見いだすはずの困難な状況にも言及しながら、「暴慢な」求婚者たちが館の財産を食い潰しているであろうこと、そして婚資金を持参して妻に求婚しているであろうことまで教示していた(11.115sq.)⁽¹¹⁸⁾。オデュッセウスの質問は、テイレシアスから聞いた、求婚者たちと妻とに関する言及を念頭において、さらに母からその点を詳しく訊こうとしたものらしいが、彼女は「暴慢な」求婚者たちについては何も知らないで、ただ彼女の知識に基づいて、ペネロペは、(夫の帰りを待って)よく耐えながら、館に留まっている、しかし日夜泣き暮らしている、とだけ答える。「館に留まっている」というのは、すでに10数年も夫が帰らない中で、いつ妻に再婚話が持ち込まれるか分からないという状況にあるが、彼女は留まり続けている、といった、一般的な意味で言われているだろう。

嫁に関しては、彼女の視点からは、とくに問題がないので、結果的に短い解答になっているのに対し、「(わたしの)父と息子」(11.74)という並列的な表現で英雄が質問した、館の権力にかかわる点には、合計して長い言葉が費やされる。イタケの王たる資格が、オデュッセウスの家系に父祖代々継承されてきた権利であることを、求婚者の首領格アンティノオスも、テレマコス相手に認めている(1.386sq.)。しかも、後述するが、オデュッセウスの家は、代々、一人息子の系統である。「父と息子」のもとに「わたしの特権」がまだあるか、というオデュッセウスの質問は、彼の長い不在の間に、一条の線で伝えられてきた館の権力が危機に曝されているのではないか、という強い不安を基にしている。求婚者たちは、じっさいに、テレマコスを亡き者にしようとする画策するのである。

しかし、息子と館の権益とに関しては、アンティクレイアは、英雄を安堵させる言葉を口にする。

おまえの華々しい特権は、まだ誰の手にも渡っていない。いや、テーレマコ

すが、
なんの気苦労もなしに領地を所有し、公平な宴で
食事に与っている——そういう宴は、法を司る男が味わうのにふさわしいもの
——、
皆が招待する彼なのだから。

(11.184-87)

アンティクレイアが、地上で最後に孫の姿を見たのは、遅くとも、オデュッセウスがトロイアへ出発して約13年後のことと推察される。したがって、出征時に赤子だったテレマコスも、そのときせいぜい13歳くらいである。ここの彼女の言葉、「領地を所有し」、「皆が彼を(食事に)招待している」、というのは、おそらくイタケの長老や主だった者たちが、オデュッセウスの恩義を肝に銘じ、その威信を尊んで、まだ年少ながらテレマコスを、父の代理のように扱い、丁重に遇したということだろう⁽¹¹⁹⁾。「そういう宴は、法を司る男(ディカスポロン・アンドラ)が味わうのにふさわしいもの」という句は、少し腑に落ちないが、13歳くらいの少年が、現実に裁きを行なっているというより、テレマコスが「男」になったらきつとそういう役を果たすに違いない、そのような「男」の栄誉をすでに受けながら、という意味と解される。裁き人の務めということであるが、『聖書』での「士師(さばきつかさ)」が王的な役割も果たすように、ここでも、テレマコスに約束されていると思われる王的な地位を反映する働きのことを述べている。さらに後で叙述されるように、この冥界訪問談では、裁定役を務めるクレタ王ミノスの活動に対応する(11.568sq.)。アンティクレイアは、このような言葉で、「おまえの華々しい特権(カーロン・ガラス)」はまだ守られているとイタケ王オデュッセウスに保証する。

しかし彼女は他方では、その後で、「父と子」のうちの前者、つまり自分の夫ラエルテスのことに話を進め、帰らぬ息子のゆえに彼が大きな悲嘆と悲愁に陥り、田舎の地所に引きこもっていることを告げる。夫の悲しみを自分アンティクレイアも共有し、そのために命の緒が絶えたことを付け足す。この後に、すでに触れた、母の亡霊を抱こうとする三度のむなしい試みが行なわれる。悲愁する父は、悲嘆死した母と結び付けられ、館の権利(ガラス)の問題とはその限りで切り離されて、もっぱら父母の哀しい愛情という観点から提示される。

このようにして、オデュッセウスが母に問うた質問(170sq.)、つまり(1)彼女の死の理由、(2)「父と子」はまだ館の特権を保持しているか、(3)妻はまだ館

に留まっているか、それとも誰かと再婚したか、という三点のうち、母の答えにおいて、まず(3)の点は、問題なし(留まっている)とされ、次いで、(2)については「子」のほうだけが取り上げられて館の特権と直結させられ、イタケ人に尊重されているテレマコス姿を示して、英雄に安堵を与える⁽¹²⁰⁾。そしてもう一点の「父」のほうは、(1)と結合されて、父母の愛の深さと悲愁が描き出される。

これは、先に、アンティクレイア登場場面で見えた英雄のディレンマ描写に呼応する二側面的な提示法と言える。彼は、血のたまった穴に近づいてきた母の霊を見るなり、哀れを催し、涙したが、それでもその上に剣をかざし続け、テイレシアスから帰国についての忠告と予言を聞くまでは、それを舐めることを許さなかった(11.84sq.)。同様に、情愛と現実という二点について、彼女とのじっさいの対話では、一方では、悲嘆の極に陥った父母の哀れさと英雄の母への愛情とが描かれるが、他方では、妻の問題ない様子、そしてとくに一人息子の安心できる状況が示され、館と一族の地位の安泰がとりあえず今のところは保持されていることが確認される。もちろんそういう状況は、アンティクレイア死後に「暴慢な」求婚者たちが館に現れるようになって、客観的に重大な変化をこうむるようになるが⁽¹²¹⁾、それをまだ具体的に何も知らない英雄の心理にとっては、少なくともこの時点では、大きな救いとなる要素である⁽¹²²⁾。

予言者テイレシアスは、息子テレマコスや老父ラエルテスのことには、何も触れていなかった。このアンティクレイア場面では、この点の情報を補いながら⁽¹²³⁾、一方では父と母の愛情にかかわる悲哀が、他方では息子の存在と直結する館の安泰という現実面での安堵⁽¹²⁴⁾とが絡み合った情景が描かれる。

(4) 「女たちのカタログ」——家系の主題

アンティクレイアの後に英雄の前に現れた女たちのことが、次に叙述される(235sq.)。神話時代の王族に属する彼女たちは、オデュッセウスに、自分たちの「生まれ」(234)、家系を物語った。家系ということでは、すでにアンティクレイアが現われたときに、「大いなる心のアウトリュコス娘」(85)と紹介されていた。知将オデュッセウスが、狡知——この「大いなる心」——で有名なこの男の孫であることが、この家系表示の暗の意味である。狡知は、帰国後にも求婚者殺害で発揮される性質であり、大きな主題に関係する。アンティクレイア場面に続くこの「女たちのカタログ」の箇所では、一つにはこの意味合いを受け継いで、それぞれの王家の連綿たる継承と発展がテーマになっている。

例えば最初に出てくるテュロは、エリス王サルモネウスの娘であり、由緒正しいアイオロス一族のイオルコス王クレテウスの妻となったが、神ポセイドンにも愛されて、後のイオルコス王ペリアスや、ピュロス王ネレウスら王族の子たちを生んだ。ポセイドンに抱かれたとき彼女は、「この交わりを喜ぶがよい…お前は立派な子たちを産むであろう」(248sq.)と、この神に祝福されている。

しかし、そういう華々しい歴史を誇る家系の祖になる女性ばかりではない。例えばクレタ王女パイドラ(321)は、夫であるアテナイ王テセウスを裏切って義理の息子に求愛し、拒絶されると、夫に彼のことを讒言し、結果的にテセウスの呪いを通じてその息子を死なせることになる。そのように、その女性を娶る側の家に幸運をもたらしたのではない女性たちも、英雄の前に現れる。

実はそういう負の側面に数えられる要素は、華々しい家系を生み出した女性の代表であるかに見えるテュロの履歴にも、暗示的に含まれている。彼女は、乙女のとき、河神エニペウスに恋して、頻りとそこに足を向けていた、そういうある日河神に化けたポセイドンに犯された、神はこのことを家の者には黙っているよう彼女に命じた、その後神の子たちを生んだが、人間クレテウスの嫁となった後は別の子供たちをもうけた。テュロの行動に認めうると言えるこういう一種の男性遍歴の傾向⁽¹²⁵⁾は、この後で叙述される場面で、アガメムノンが、女性一般への不信感から、貞淑な奥方ペネロペにも用心することをオデュッセウスに忠告する行為(441sq.)の神話的根拠の一つを提供しているとも思える。

この「女たちのカタログ」には、複層的な意味合いが含まれているが⁽¹²⁶⁾、中心的な二つの主題としては、神話的な婦人たちの人生に即して見られた肯定的な、また否定的な諸例を通じて、世子の継承や「家」の問題が、「夫婦関係」のあり方と絡み合わされて提示される。

「女たちのカタログ」場面や、今触れたアガメムノンの言葉の内容は、『オデュッセイア』後半部の展開につながってゆく。そこでは、主人公は、愛する妻に対してはなかなか自分を打ち明けず、アンビバレントな態度を取るのに対して、息子には帰国早々自分の正体を明かし、復讐計画の欠くべからざる協力者にする。二重性を有するこの展開は、すでに冥界訪問場面において準備される。しかしそのような伏線的な要素も含みながら⁽¹²⁷⁾、主調としては、ポセイドンによる「この交わりを喜ぶがよい…お前は立派な子たちを産むであろう」という言葉で表されている、子孫とその継承という主題が表に出ている。

(5) アガメムノン、アキレウスおよびアイアスの霊との遭遇

インテルメッツォ(間奏劇)と称される中断部分(328-84)を経て、オデュッセウスは、冥界訪問談の後半部分を引き続きステリア人に語り聞かせる。こちらはすべて男たちの霊に関する話であり、とくに、主人公の主だった戦友たち、つまりアガメムノン、アキレウス、そしてアイアス(大アイアス)の靈魂との遭遇場面が中心となる。この三人の死者が味わった、そして味わっている運命はさまざまであり、対談の内容も三者三様である。アガメムノンとの対話では、今触れた女性不信をアガメムノンの心に植え付けた妻の裏切りと、それによって惨めな死に方を帰国時に遂げた彼の悲劇が中心話題になる。アキレウス場面においては、生前は神のように敬われ、死後もパトロクロスら錚々たる仲間を引き従えているその「至福さ」(483)へのオデュッセウスの讚美と、それに対するアキレウス自身の反論がやり取りされる。そしてアイアスの場面は、亡きアキレウスの武具をめぐる争いにおいてオデュッセウスに勝利を奪われたアイアスが、屈辱感のあまり、アガメムノンやオデュッセウスたちに復讐の刃を向けようとしたとき、女神アテナによって狂わされ⁽¹²⁸⁾、彼らを相手にしているつもりでその家畜を殺したが、その後正気に返って自害をした⁽¹²⁹⁾この英雄が、まだオデュッセウスへの恨みを忘れず、彼の呼びかけに無言で答えるという形の「対話」になっている。このように三人の戦士をめぐる三様の場面であるが、オデュッセウスを含めて四人には——アイアスについてははっきりしたことがある。それは、彼らがいずれも一人息子しか有さないということである。

(6) 一人息子の英雄たち

ホメロスで描かれる英雄たちには、それぞれ一人の息子しか恵まれないことが多い。しかもそれがときには代々にわたることもある。アガメムノンの息子は、オレステス一人であり(ただし娘はいる)、兄弟メネラオスにも、庶子の息子メガペンテスがあるだけである(娘はいる)。アキレウスは、子として、ネオプトレモスを息子に持つだけであり、また彼自身が、父ペレウスの一人息子である⁽¹³⁰⁾。アイアスの息子については、ホメロスでは言及されない。しかし、一伝によれば、トロイアでプリュギア人の女奴隷に生ませた子エウリュサクスだけである⁽¹³¹⁾。そしてオデュッセウスは、子として息子テレマコスを持つだけであり、彼自身、ラエルテスの一人息子であり、父はこれまたアルケイシオスの一人息子という、格別な一人子の家系に属している(16.117sq.)。

こういう点で、ホメロス以外の伝承では、オデュッセウスの息子として、テレマコス以外にも何人か伝えているのと対照的である。たとえば、ホメロスとほぼ同時代の叙事詩人ヘシオドスは、オデュッセウスとキルケとの間の息子としてテレゴノスら三人を、またニンフのカリュプソとの間には二人の息子をもうけさせている⁽¹³²⁾。叙事詩の環のひとつ『テレゴニア』では、このテレゴノスが、主要なキャラクターになる。『テレゴニア』の内容は、オデュッセウスの帰国後の出来事に属するので、この限りでは『オデュッセイア』と相反する伝承ではないと言えるが、一年にわたるキルケのもとでの、また七年間のカリュプソのもとでの英雄の滞在に関して、彼女たちの妊娠や出産のことには『オデュッセイア』では全く触れられないし、今挙げた、祖父以来の系統を述べる箇所では、不自然な、人工的な感を与える⁽¹³³⁾くらいの一人子の家系の歴史をことさら強調して、そういう別伝の可能性を否定する態度を見せていると言える⁽¹³⁴⁾。

そしてくだんの三人の戦友との会話場面で、何も言葉を返さなかったアイアスは別として、残る二人は、両方とも、地上に残してきた自分の一人子のことを気にかけて、熱心にオデュッセウスに情報を求めるのである。

(7) アイアスの孤独

テキストの順序では三人のうち最後になっているが、アイアスの場면을初めに扱うことにする。彼は、アガ멤ノンとももちろんつながりを持つとともに、ここでは、その靈魂がオデュッセウスの前に現われたけれど何も応答しなかったという展開を通じて、アキレウスの武具をめぐる争いに起因するオデュッセウスとの確執が冥界まで持ち込まれているという状況が示され、彼との深い因縁が改めて読者に提示される。さらに彼は、直前にオデュッセウスと話を交わしたアキレウスとも比較対照される。

アイアスは、自殺後、その未遂の凶行に怒ったアガ멤ノンによって、葬式の慣習に反する形で、ギリシア人のうち「ただ一人」火葬を禁じられ、代わりに棺に入れられて埋葬された⁽¹³⁵⁾。この差別的な処置は、ホメロスにおいて、トロイア戦にかかわる者で、男女を問わず、自殺を実行したただ一人の人間という事態にも一部は関係するだろう。ホメロスではもう一例だけ自殺者が挙げられる。トロイア戦ではなくテバイの伝説に属する、オイディプスの母エピカステ（後代の「イオカステ」）である。彼女は、自殺に際して、「母のエリニウス（呪い）」が果たすであろうまことに多くの苦しみをオイディプスに残してい

ったと、まがまがしい口調で語られる(11.279sq.)⁽¹³⁶⁾。アイアスも、呪い(復讐)の女神エリニウスに呼びかけながら自害したであろう。ソポクレスの『アイアス』では、主人公は、アガメムノンらのみならず、ギリシア「全軍」を容赦なく罰せよとまでエリニウスに訴えかける(843sq.)。この劇では、エリニウスの要素はそれほど重要ではないが、ホメロスが念頭に置いている本来の形の伝承では、エピカステの場合と同様、もっと中心的な役割を果たしていたであろう⁽¹³⁷⁾。正当性の乏しい(138)復讐のために総大将ら戦友たちを殺そうとしたという異常な試みのみならず、それが挫折した後に、なお復讐のための自殺を決行する行為は、名誉のための自決という、自殺をある程度正当化する動機を相殺し、情状酌量を困難にする⁽¹³⁹⁾。自殺そのものに対してホメロスがどのような考えを持っていたか、にわかには判断できないが⁽¹⁴⁰⁾、悲劇、とくにそれを七回も取り上げるソポクレスと比べると、それには二回しか触れないこと自体が、より否定的な見方を示唆しているとも言える。いずれにせよ、正当性の疑わしい怒りから復讐の自決に走る行為が、葬儀における彼の疎外的処置を招いた。

アッテイカではアイアスは英雄神として崇拝され、彼を名祖とする「アイアンティス」という有力な部族もあったので、アテナイの観客を相手にしたソポクレスの悲劇では、そういう事情も念頭においてと思われる名誉回復の場面が、大団円に向けて展開される⁽¹⁴¹⁾。ソポクレスが、エリニウスと呪いの要素を抑制したのは、それがこの英雄の人格をそれだけ否定的に見せ、彼の名誉にとって不利な条件を増すから、という一面があるだろう。しかしホメロスにおいては、英雄神崇拝は知られていない、または黙殺されているので、そういう名誉回復の救いは『オデュッセイア』では用意されていない⁽¹⁴²⁾。わずかにオデュッセウスの口から、お前が死んだことでギリシア人には大きな塔が失われた(556)、と追悼のオマーージュが捧げられるだけである。

そういう、戦友たちへの禍害的な側面⁽¹⁴³⁾の他に、彼の自殺は、自分自身の家の存続という、ホメロスの英雄たちにとっての大きな関心事についても、否定的な判断を余儀なくさせる。彼らから見て、大きな疑問を抱かせる死に方を選んだ人物と言わざるを得ない面がある。

トロイアで、アイアスと奴隷女との間に生まれ育ったエウリュサケスは、戦争の後、祖先の地、つまりギリシアのサラミスの地を踏んだ。彼はホメロスでは名が挙げられないが、叙事詩の環の一つ『ノストイ』で、ギリシア人の帰国に関連して、アイアスの生き残った兄弟テウクロスといっしょに扱われていた

可能性があり⁽¹⁴⁴⁾、ホメロスにも知られていたかもしれない。ソポクレスの悲劇では、母テクメッサとともに、アイアスの家族とのつながりを象徴する人物が、このエウリュサケスである⁽¹⁴⁵⁾。アイアスは、わが子を守る機会を、あるいは—もしエウリュサケスらの存在がホメロスにはまだ知られていなかったとすれば—子孫をもうけたり増やしたりする可能性を、自ら遮断した。無事帰国して家の権力をふたたび掌握するか、そうでなければ、戦場で華々しい死を遂げて子孫のために大きな名誉を残すというのが、ホメロスの勇士たちの前に置かれている選択肢であるが⁽¹⁴⁶⁾、アイアスはどちらとも異なる道をたどった。

後でより詳しく述べるが、アイアスの場面に先行するアガメムノンおよびアキレウスとの対談場面では、それぞれの最後の部分で、一人息子のことが切実な話題として取り上げられる。アガメムノンは、わが子オレステスが地上のどこで生きているかとオデュッセウスに必死に尋ねるし、アキレウスのほうは、わが子のことをオデュッセウスに称賛されると、

アイアコスの脚早き孫[アキレウス]の靈魂は、
大股の足取りで、アスポデロスの野を歩いて行った。
喜んでいたのだ、彼の息子は際立った男であるとわたしが話したので。

(11.538-40)

それに対し、この箇所第二のアキレウス的な表現を何度も受ける⁽¹⁴⁷⁾アイアスは、恨みを忘れてくれとオデュッセウスが言葉を尽くしたにもかかわらず、

わたしに何も答えなかった。そして他の靈魂たちの間へ、
死せる亡者たちのいる闇の中へ、歩いて行った。

(11.563-64)

外見的な行動の点では、アキレウスの場合と似た表現を受けているが、対照的な心の両者である。

アキレウスに付き従っていた霊たち、パトロクロスやアンティロコスらが、アキレウスの場面の後にオデュッセウスの周りに集まり、アキレウスと同様めいめいが、「悲しみの元」、つまり後ろ髪を引かれるように地上に残してきた家族のことを質問したが、

テラモーンの子アイアースの霊だけは、
離れて立っていた。

(11.543-44)

これは、武器に関する審判のときの恨みのゆえに(544sq.)という理由からである。しかし、そのために、ここで父テラモンに代表される家族⁽¹⁴⁸⁾に対する自分の関心も一ほんらいはあったとして⁽¹⁴⁹⁾一殺してしまっている。自分の心中の怒りに支配されているのである⁽¹⁵⁰⁾。直前の場面でアキレウスは、わが子や、故郷にいる父ペレウスのことを強く気遣う態度を表していた(494sq.)。またこちらの箇所では、くだんの武器裁判が、アキレウスの母テティスによって、亡き息子のために催されたものと言われる(546sq.)⁽¹⁵¹⁾。こういう点も、親子間の愛ということに関連する。これらの例と、アイアスによる家族愛の自己圧殺とが対比される。

アイアスの場面は、武器のことに起因するオデュッセウスへの恨みという単発的な主題にかかわるだけではない。むしろ、アガ멤ノンやアキレウスらとの対比を通じて、家族とのつながりという本作品の大きな問題を、否定的な例で浮き彫りにする。しかしこのアイアスの姿は、とくに、対面相手オデュッセウスと対比できる。オデュッセウスは、ペネロペとの神話的夫婦愛で有名であるのみならず、子との関係においても、「テーレマコス之父」という、父称(パトローニュミコン)とは逆に子の名前を介して呼称される独特の英雄である。誓言するときに、もしそのとおりにならなかったら、

もはやテーレマコスの父とは呼ばれたくない (『イリアス』2.259)

と自ら言う彼である⁽¹⁵²⁾。彼は、より多くは、「ラーエルティアデース」すなわちラエルテスの子と呼ばれるが、父に対する愛情はとくに『オデュッセイア』最終巻で描き出されることになる。

(8)アガ멤ノンと一人子オレステス

アガ멤ノンとその部下たちの登場は、「悪しき妻(女)のため帰国のときに死んだ」者たち(384)という句で導入される。そのように、この対話場面では、間男アイギストスと組んだ妻クリュタイムネストラによる謀殺事件のことがもっぱら話題にされる。しかし話の後半は、オデュッセウスの息子への言及を経

由して、アガメムノンの一人子オレステスのことに移行してゆき、この問題で全体は閉じられることになる。

アガメムノンは、オデュッセウスの質問に答えて自分の悲劇の顛末を物語った後、オデュッセウスに、お前も、妻に甘い顔を見せることなく、何でも明かしてしまうこともせずに、一部は話すが、一部は隠すという態度で臨め、と忠告して言う(441sq.)。しかし、「とはいえ、お前はオデュッセウスよ、妻に殺されるという目には会わないだろう」、ペネロペはとても思慮ある女性だから、と修正して言う。そして、かつて、オデュッセウスに出征を促すため、イタケ島に(メネラオスと)赴いたときのことを思い出しながら⁽¹⁵³⁾、彼にこう話しかける。

戦争に向かうわれわれが彼女を残してきたとき、まことに
彼女は若い花嫁だった。その胸には、
いとけない子が抱かれていた。彼はきっと今は、男たちの間に坐っているに
違いない。
幸せな子が一愛する父が、かならず帰ってきて彼と再会することだろう、
そして彼のほうは父を抱きしめることだろう。

(11.447-51)

ここの「今」は、アンティクレイアの話の場合と同様、トロイア陥落後13日目あたりの時点を指すようである。アガメムノンは、成長しつつある少年テレマコス話題にしながら、彼が、主だったイタケ人のもとで敬意をもって遇されている情景を、その父オデュッセウスに思い描かせる。そしてさらに喜ばせ、希望を抱かせるように、彼の帰国と息子との再会を予想する。これは、帰国したアガメムノンを殺した妻とは異なり、ペネロペがとても思慮深い女性だからという根拠によっている。テレマコスの順調な成長も、わが子オレステスにまで手をかけようとしたクリュタイムネストラとペネロペとの対比から推断されるのである。今の引用文の後で、自分の妻は、わが子の姿さえ見させてくれず、その前に自分を殺したと、憎悪を込めて言う。

そして⁽¹⁵⁴⁾、そのわが子オレステスのことにアガメムノンは話題を向け、これまででは説明するほうだったが、今度はオデュッセウスに質問をする立場に変わる。

だが俺にこのことを言ってくれ、確かなことを述べてほしい、
ひょっとして、俺の子がまだ生きてると聞いていないか
—ひょっとしてオルコメノスで、あるいは砂多きピュロスで、
あるいはひょっとして広大なスパルターのメネラーオスのもとに彼はいる、
と。
なぜなら、立派なオレステースは、まだ地上で死んではいないからだ。

(11.457-51)

冥界でその姿を見かけないので、オレステースがどうやらまだ死んではいないことはなんとか信じられる。だが、どこで暮らしているのか、という点はまったく分からない。しかしこれは、まだギリシアに舞い戻ってはいないオデュッセウスにとって、無理な質問である。冥界にはオレステースは来ていないという点も、死者としてそこに住んでいるわけではないオデュッセウスは承知していない。慎重な彼は、オレステースが「生きているか死んでいるか」自分は知らない、と率直に簡略に答える(463sq.)。しかし、かりに少しでも情報を持っていたら、それをアガメムノンに喜んで伝えたことだろう—次に会ったアキレウスに対してそうするように。

オレステースは、父殺害のさいに、乳母によって救出され⁽¹⁵⁵⁾、伝令のタルテュビオスに託されたが、どこへ逃れたかという点は、まだ伝承的に固まっていなかったかもしれない。『オデュッセイア』では、彼は、アイギストスが政権を握ってから八年目に⁽¹⁵⁶⁾、「アテナイから」⁽¹⁵⁷⁾ミュケナイに帰還し、アイギストスを殺して父の復讐を果たしたと言われるが、一般には、ポキス(デルポイを含む地方)が彼の亡命地とされる⁽¹⁵⁸⁾。『オデュッセイア』でオレステースの亡命地がなぜアテナイにされているのか不明だが、とにかく、アテナイにせよ、ポキスにせよ、ミュケナイから遠く離れた土地であり、亡命させる乳母たちが、彼をめぐる状況の剣呑さを強く感じて、できるだけ遠ざけようとした反映が、ここに見られると言える。アガメムノンの家系を保持する唯一の系、その一人子にかける周囲の人間の懸命な思いが基にある。

他方、アガメムノンがここで息子の亡命地として想定しているのは、いずれも、彼に親しい者の土地やその勢力下にある国である。オルコメノスはここでは、ギリシア北部ではなく、むしろペロポネソスの中央部、アルカディアの都市のことであろう。アガメムノンの息のかかった地域に属している⁽¹⁵⁹⁾。ピュロスはギリシア軍老将ネストルの領地、スパルタは兄弟メネラーオスに治められ

ている。アガメムノンというキャラクターは、『オデュッセイア』においては、もっぱら、「悪しき妻」を持った総大将という特徴を打ち出される。彼が、自分の偉大な王としての権威を念頭に、わが子をかくまってくれそうな場所を次々と必死に思い浮かべようとする様子は、じっさいはもっと遠い土地に逃れさせねばならない厳しい状況だったという聴衆・読者の知識と照らし合わせると、裏切られた夫・王の惨めさを皮肉に浮き彫りにする手段になっている。現実問題として、ネストルはオレステス亡命のさいには帰国したばかりだったし、メネラオスはまだ洋上を放浪中だったので、ミュケナイを援ける力は彼らにはなかった。そのような点からアガメムノンの惨めさが描き出されるとともに、「ひょっとして(プー)」という語を三度も使いながら⁽¹⁶⁰⁾、オレステスが生きている証や噂を、ワラにもすがる思いで、必死に聞き出そうとするアガメムノンの情景が、オデュッセウスの前で展開される。

(9) トロイア攻略の追想—語りと追憶、内的反応

いよいよ、オデュッセウス自身が、自分で直接関係したトロイア攻略の話を物語るという箇所差し掛かった。ここで、追想とそれに伴う感情の動きという点について、改めて述べておきたい。

トロイア戦をオデュッセウスが語るということは、追憶するということである。彼は今—テキストで言うところ『オデュッセイア』第11巻において—、スケリア島人(パイアケス)に対し、約七年前に冥界訪問をしたときのことを回想して語って聞かせているが、その訪問で亡霊たちと対談したときには、トロイア戦争の出来事も、部分的だが、霊たちに語っている。それを今再現しているので、一字一句同じというわけではないだろうが、とにかく亡霊たちに語ったことを、だいたいそのまま繰り返して話すことになるわけである。またこの島に来る前に、風神アイオロスの島に漂着したときにも、「一つ一つのことを質問する」アイオロスに、「イーリオスとアルゴス人の船隊とアカイオイの帰国」のことを語ってやった(10.14sq.)。この段階ではまだ冥界訪問はしていないが、放浪談の他、戦争そのものに関することも「一つ一つ」質問に応じて話したわけであり、当然、最大の事件であるトロイア攻略も話題に含められたはずである。これを含めると、三回目のトロイア戦争およびその攻略の追想ということになる⁽¹⁶¹⁾。アイオロスを相手に、戦争についてより具体的にどのように語ったか、テキスト上では記されていないが、冥界の亡霊に、そして今それを繰り返してスケリア島人に、どういうことを追憶して語ったかということは、われ

われ読者にも示されている。ホメロスによって「トロイア攻略者」と幾度も呼ばれるオデュッセウスが関与したその陥落にまつわる体験を、英雄自身が、アキレウスの霊に、またスケリア島人に、叙述するのである。

追想は、辛い性質のものは一人間世界から離れて気楽な生活を送っているスケリア人たちは別として、聴く者をもその感情に巻き込み、哀しい連想に駆り立てたりしながら、暗澹たる気持ちにさせ、悲嘆にくれさせるものである。父の噂を求めて旅してきたテレマコスに相手に物語るネストルの思い出話や(3.102-17)、とくに、同じくテレマコスにオデュッセウスのことなどを話すメネラオスの追想がそうである(4.104-16, 168-89)。ネストルは、5年かけても6年かけても語りつくせないほどの苦難をトロイアで味わったと述べながら、戦争への忌まわしい記憶を呼び起こすが、このとき彼は、とくに、かの地で倒れたアキレウスら戦友たち、なかんずく自分の「いとしい」子アンティロコスの死を思い出している。またメネラオスは、戦死した朋友たち全般の運命を嘆きつつ、とくに、いちばん苦勞をしてくれたと彼が感謝を込めて言うオデュッセウスが未だに帰国せず、生きていのかどうかも分からないことが、寝食すら楽しめない状態に自分を置いていると述べ、オデュッセウスの父や妻や子の悲しみに言い及ぶと、それを聴いていたテレマコスに涙にかきくれさせる。もうひとつの箇所でもメネラオスは、オデュッセウスへの深い友情を吐露しながら、「ただひとり」帰国できないままになっている彼のことを悲嘆すると、その場にいる皆を泣かせる。その中には、テレマコスに同行してきているペイシストラトス(ネストルの子)が、兄アンティロコスの死を思い出させられて嘆く姿がある。

他方、トロイア陥落の話題を、楽人デモドコスから聴かされたときは涙に暮れたオデュッセウスは、同じ話を自分から人に語るときには、その様子は全く見せない。むしろ、後述のように、「トロイア攻略者」にふさわしい誇らかな語り口がわれわれ読者の耳に伝わってくる。しかもそれは一アイオロス相手にしたときのその場の雰囲気は記されていないので今は飛ばすとして12度にわたり、同じ口ぶりで繰り返されるのである。人から聴かされて嘆こうと、自分で思い出しながら涙しようとする、いずれも、追憶がその感情を掻き起こす点で相違はないことは、今引用した複数の箇所からも知ることが出来る。この観点から考えると、同一の主題に関するオデュッセウスの異なる反応や態度は、それを介して思い出す対象の内容や性質が同一ではないからであると推論される。したがって、そのときに何を追想し、何を追想させられているのかという、それぞれの文脈を正確に読み取る努力をわれわれは払わねばならない。

(10)アキレウスの霊との遭遇—死への呪詛

さて、アガメムノンの次にアキレウスの霊が、他の錚々たる戦士たちを引き連れて、オデュッセウスの前に現れた(467sq.)。具体的に名が挙げられているのは、パトロクロス、アンティロコスそしてアイアスだが、アキレウスの率いる勇猛なミュルミドネス族の者たちも当然そこには群がっているはずである⁽¹⁶²⁾。アガメムノンの霊にも部下たちがつき従っていたが、惨めな死に方をした部下たちは名さえ挙げられなかった。他方、アキレウスの周囲の者たちの多くは、戦場で華々しい死を遂げた勇士たちである。この目覚しい光景を見てオデュッセウスは、大きな感銘を受けたらしい。何故わざわざ冥界まで来たのだというアキレウスの問いに、テイレシアスの霊から帰国に関する忠言を求めるためと簡単に答えた後、オデュッセウスは、自分はまだギリシアの地の近くまで行ったこともないと言って(481sq.)⁽¹⁶³⁾、自分の放浪の運命を呪う一方、アキレウスをこの上なく幸せだと称賛する。

絶えず不幸をかかえている俺なのだ。しかし、アキレウスよ、お前より幸せな者は以前にも誰一人いなかったし、これからもそうだろう。お前が生きていた間は、われわれアルゴス人から、神々に等しいほどに敬われていたし、今はまた、ここ[冥界]にいても、死者たちに強大な力を揮っている。

だから、死んだからといって、けっして嘆くな、アキレウスよ。

(11.482-86)

引用した文の最後の句は、その前の発言でアキレウスが、自分たちのことを、「心(意識)を持たない死人たち」などと呪詛して述べたことを念頭においている。アキレウスは、他の箇所では、死者仲間アガメムノンから、華々しい戦死を遂げたその栄誉と幸福を讃えられるが(24.36sq.)、ここでは、辛い生存を味わっている生者の代表とも言うべきオデュッセウスから、似た称賛を受ける。アガメムノンに対しては憐憫の情しか示せなかったオデュッセウスは、アキレウスには対極的な態度を表わす。対比の観点をういながら、放浪を続ける自分よりも恵まれている、誰よりも、総大将よりも、華々しい英雄の人生であったし、死者ぶりではないか、と言う。

しかしオデュッセウスの言葉にアキレウスは、「すぐさま」反発しながら答え

る。

死のことで、俺に対して慰めごとを言うな、輝かしいオデュッセウスよ。
地上にいながら、他の男のもつで——生活の糧が乏しい小作人のもつで、
雇い人になったほうがましだ
——滅んでしまった死者たちすべてを治めるよりも。

(11.488-51)

この言葉は、死者の惨めな状態を、生者のうちでもっとも不運な境遇の者と——貧しい小作人に臨時的に雇われる最下層民で、一応安定した生活を送れる家付きの奴隷よりも惨めな者と——比べている。冥界の生活は、それよりも不幸と言っている。放浪中ではあるがまだ地上で⁽¹⁶⁴⁾命を保ち、しかも領主の地位を回復する望みをとにかく残している「輝かしい」オデュッセウスは、そういう雇い人よりもましなので、したがって、死人たる自分アキレウスよりもオデュッセウスはまだずっと恵まれていると応酬していることになる。

この場面には、苦難の中を生き抜く忍耐の人オデュッセウスと、死を賭して誉れを追求した『イリアス』の英雄アキレウスとの対比があると見なされることが多い。しかし、アキレウスは、ここで、『イリアス』における英雄的理想の否定者として現れていると解する⁽¹⁶⁵⁾よりも、ダネクの考えるように、『イリアス』的な誉れの観念もそれはそれで維持されつつ、そこにさらにオデュッセウスの叙事詩においては、帰国を勝ちえる誉れも付け加わると見るべきである⁽¹⁶⁶⁾。

(11) 戦友同士の運命の比較（シュンクリシス）と感情の動き

それはともかく、ここでわれわれは、登場人物たちによる自己呪詛の応酬や互いの運命の幸・不幸度の比べ合いによって表現され、またそれを通じてさらに新たに引き起こされる内的、心理的な動きに注目したい。これは、上記アガメムノンの場面でも見られた点である。妻によって謀殺されたことをさぞ嘆いた彼は、お前オデュッセウスは大丈夫だろう、妻ペネロペは賢明な女性だからと、羨むように、安心させるように言った(444sq.)。今アキレウスは、死人たる自分よりも、たとえ長い放浪を強いられてはいても、お前オデュッセウスの境遇のほうがずっとましだと実質的に述べている。『オデュッセイア』最終巻には第二の冥界場面が含まれるが、そこではアガメムノンは、哀れな死に様を

した自分との対比で、華々しい葬礼を受けることの出来たアキレウスを幸福（オルピオス）と讃える（24.36sq.）。しかしその後でさらに別の比較対照が行われる。すなわちオデュッセウスが、彼らの信じるところでは妻の協力を得て、求婚者復讐を果たし領主の地位を回復したがゆえに、幸福（オルピオス）と称され、アキレウスよりもさらに優ると暗に修正される（192sq.）。デモドコスの歌にかかわる場面（8.521sq.）では、われわれの読み方によれば、オデュッセウスは、自分とメネラオスとの運の比較から泣き崩れた。ただしこの場合は、今触れたアガ멤ノンのオデュッセウス讃美の箇所と同様、比較相手は目の前にはいない。

シュンクリシス、つまり比較対照あるいは比較同定の技法は、すでに『イリアス』において意識的に利用されている基本的創作法の一つである⁽¹⁶⁷⁾。今われわれは、死者間の、また死者と生者間の——言い換えれば生と死の二次元を通じた——運命の比べ合いを目にしているが、それはプルタルコスの『対比列伝』における偉人たちの性格や行動や運命の比較⁽¹⁶⁸⁾のように、第三者の客観的な視点から行われるのではなく、当事者同士、つまり苦しい経験を戦場で共有した戦友同士による、しかもその後の運命も考慮に含めた、互いの総合的幸福度の比較である。そこには、そういう当事者たち自身の、追憶や諸連想をともなう幸・不幸の判断によって引き起こされる内的心理的動きが絡んでくる。

この観点から見て、登場人物による、比較相手より劣った自分の運命に関する悲嘆は、逆に、そのような比較を面と向かって語られる側からすると、こちらの安心と希望を少しでも増す契機となる。オデュッセウスはアガ멤ノンから、伴侶の点において、そしてその伴侶に守られる息子の点に関して、より恵まれていると言われた。彼は今はアキレウスから、生存中であり、しかも領主の地位に戻る可能性を残しているがゆえに、羨ましがられる。

しかし、三戦友との場面でクローズアップされる息子の話題に関しては、比較対照とともに、比較同定の視点も用いられる。後者は、ホメロスにおいては、「何々のように、そのように」という形で表現される直喩（シミリ）の技法において、より鮮明な直截的な現れ方をするが、以下でわれわれが扱う例では、それは、もっと隠れた巧妙な仕方では表現される。他方では、冥界場面の初めのほうから少しずつ築き上げられてきた息子の希望というテーマが、ここで結実することになる。われわれは、以下では、比較対照と同定とが併用されながら、アキレウスとオデュッセウスとの運命のシュンクリシスが進められる仕方や、そういう比較が、さまざまな追想を伴いながら、登場人物、とくにオデュッセウスの内面に引き起こす心の動きを眺めることにしよう。

(12)アキレウスの子と家族、そしてオデュッセウスの子と家族

さて、アキレウスの霊は、先ほど引用した「死のことで…慰めごとを言うな」(488)といった言葉で、死者たることの絶望感をオデュッセウスに表現したが、そのことはさっさと切り上げ、陰鬱な気持ちを晴らそうとするようにすぐに別の話題に、地上に残してきた子ネオプトレモスのことに、話を転じる。

だが、俺の立派な息子の話を、さあ、聞かせてくれ、
先頭に立つ男になるべく、後から戦に加わったか、それともそうしなかった
のか、

(11.492-93)

「後から」というのは、実質的に「あの後から」つまり「自分アキレウスの死後」という意味である。戦争は、無比の英雄アキレウスの死後、トロイア陥落まで、客観的に言って新しい段階に入る。それまではトロイア城の前に姿を見せていなかった新しい戦士たちが求められ、現れる。その一人、ネオプトレモスは、テキストで後述されるが、父の死後にオデュッセウスたちによってスキュロス島（エーゲ海）から戦場へ連れてこられた。自分の亡き後、その大きな穴を息子が十分に埋め合わせられたのだろうか、新たなアキレウスとなることができただろうか——ここは、アキレウスの矜持とともに、息子への強い期待を込めた質問になっている。

アキレウスは『イリアス』においても、スキュロスにいるわがこの子のことを気づかう父親の顔を見せている。しかし他方では、親友パトロクロスのヘクトルによる殺害に接して、父よりも子よりも彼のほうが大事な存在だったと口走る彼である⁽¹⁶⁹⁾。しかしここでは、冥界でパトロクロスといっしょに過ごしているという状況もあるだろうが、家族のことを気にかけている。

しかし、息子にかける希望とは異なり、遠い故郷にいる年老いた父のことで、心配と不安を抑えがたいアキレウスである。息子に関する質問の後、父ペレウスのことで知っていることがあるかと彼は問う。

まだ彼[ペレウス]は、たくさんいるミュルミドネスの間で名誉を保っている
か、

それとも彼の榮譽を、ヘッラスとプティーエーの人々は取り上げているのか

—彼の手も足も、老年に押しえつけられているがゆえに。

(11.495-97)

このようにアキレウスがとくに気にかけるのは、故郷の父と一家の名誉(ティーマー)のことである。先に扱ったアンティクレイアとの場面で、オデュッセウスが、自分の父と息子に委ねられている領主の特権(グラス)のことを心配して訊いた(174sq.)のと同然である。伝承によっては、ペレウスはじっさいに国を追われ、他国で死んだとも伝えられる⁽¹⁷⁰⁾。アキレウスにとって、そして彼の話し相手オデュッセウスにとって、きわめて切実な憂慮すべき問題なのである。

死者たることを嘆くアキレウスの苦悩は、トロイアであれほどに敵を倒し、友軍を援けた自分の力が、今は、自分の老父を保護し、家を守護するのに役立たないという点である。

もし俺が、[父の]救助者として、陽の光のもとへ
—かつて広大なトロイエーで、[敵の]優れた民を殺し、
アルゴス人らを助けたような有りさまで—
もしそういう有りさまで、少しの間でも、父の館に行くことができたなら、
きっと俺の力と不敵の両腕を、呪わせてやったことだろう
—彼[父]を圧迫し、名誉から閉め出している者たちに。

(11.498-503)

アキレウスのこの願望は、死者たる彼にとっては、けっきょく不可能事である。しかし、彼自身の言葉を使うと、まだ「地上にいながら」(489)、故郷に帰還する可能性を保持しているオデュッセウスには、老父を助け、家の誉れを回復し維持するチャンスがある。

(13)アキレウスとしての、そしてテレマコスとしてのネオプトレモス
とはいえオデュッセウスは、アキレウスのそういう点での絶望を緩和する、というより、彼に安堵と希望を与える情報を、その後で提供する。アキレウスからの質問の最初の点に戻り、息子ネオプトレモスに関する事に彼は答える。ギリシアに舞い戻っていないオデュッセウスには、ペレウスのことは何も分からない。

だが、お前の愛する子ネオプトレモスについては、
お前がわたしを促すとおりに、真実をすべて話すことにしよう。
というのは、わたし自身で彼を、釣り合いのよい中空の船に乗せて、
スキューロスから、脛当て見事なアカイオイ〔ギリシア軍〕の中に連れて行っ
たのだ。

(11.506-09)

この文は、オデュッセウスが、幼児期は除いてネオプトレモスの戦士としての
人生のいちばん初期から密接につながっていることを示して、彼につい
ては真実を語れると唱える根拠の一つをなしている。しかし、これ以外の点で
も、ネオプトレモスへの言及は、アキレウスの心を揺り動かすのはもちろんの
こと、語り手オデュッセウスにおいても、さまざまな追憶と連想を呼び起こし、
内面の情動を引き起こすのである。

アキレウス自身がギリシア軍に迎えられたときも、その召集者にはオデュッ
セウスが含まれていた。故郷プティアから召集されたときのアキレウスは、や
はりまだ少年だった⁽¹⁷¹⁾。移動の手段はもちろん船だったはずである⁽¹⁷²⁾。そ
のようにして少年アキレウスをギリシア軍に連れて行ったオデュッセウスが、
彼の死後、その年若い息子をふたたび友軍のもとに率いて行くときには、父の
召集のときのことを合わせて思い出しながら、特別の思い出とともに、父の
面影を子の中に認めたことだろう。そのときの追憶をオデュッセウスは、今度
は父の亡霊を前に、脳裏で繰り返しながら、過去の思い出に現在の回想を重ね
合わせる。

そして年若いネオプトレモスを先導していったときのこの追憶は、故郷にい
るわが子テレマコスへの思いを改めて掻き立てたに相違ない。上述のように、
かつてオデュッセウス自身のもとに、その出征を促すため、アガメムノンたち
がイタケ島にやってきたことがある。そして、アガメムノンの言葉によると、
イタケから、

戦争に向かうわれわれが彼女〔ペネロペ〕を残してきたとき、まことに
彼女は若い花嫁だった。その胸には、
いとけない子が抱かれていた。

(11.447-49)

これはアガメムノンの視点から語られているが、同じ船に乗っているオデュッ

セウスの視点とももちろん共通する（「われわれ」参照）。いまアガメムノンは、そのときの共同の体験をオデュッセウスに語りながら想起させている。オデュッセウスにとっては、彼自身の家族に関していることなので、同情的な口調のアガメムノンよりも痛切な感情を抱きながら、遠ざかる妻子を見つめていたはずである。

この「いとけない子」テレマコス、アキレウスの子とはほぼ同年輩である。兩人とも、戦争開始前後に生まれている⁽¹⁷³⁾。わが子を遠い故郷に残し、後ろ髪を引かれるように出征してきたオデュッセウスは、自分が召集役として参戦させ、戦場の苦労を共にした戦友アキレウスが死んだあと、彼が生前気にかけていた⁽¹⁷⁴⁾ネオプトレモスを、スキュロス島から、ふたたび自分で親しく連れてきて、新たな戦友とする。それはあたかも、イタケ島の岸を離れてゆく船上から眺めやった幼いわが子を、十年後のいま、自分のもとに呼び寄せるがごとき行為だったと言えよう。ネオプトレモスの成長振りや頼もしい活躍を身近に見ながら、その姿に、遠く離れているテレマコスを日々重ね合わせるオデュッセウスだったであろう。

わが子ネオプトレモスは、ギリシア軍中で「先頭に立つ男（プロモス）」になったかとアキレウスは尋ねた(493)。この点についてオデュッセウスは、百点満点と言うべき評価で答えてやる。まず、軍中で何か協議をするときは、「真っ先に（プロトス）」発言をし、しかも語るべき的をはずすことがなかったネオプトレモスだったという(511)。次いで、戦闘においても第一人者であったことが述べられる。ネオプトレモスは、けっして集団の中に隠れ埋没したりせず、むしろ、軍列のずっと「先を駆け（プロテエスケン）」ながら、誰にも引けを取らない戦闘力を発揮したという(514sq.)。この働きぶりは、弁じる技においても戦の業においても優れた男たるべしと、父ペレウスがアキレウスに対して求めた戦士の理想像に呼応する⁽¹⁷⁵⁾。祖父の厳しい眼鏡にかなう孫の活躍ぶりは、後述する孫と老父との結びつきというモチーフにも関連しつつ、父と子の間の相同性を浮き彫りにする。

そして彼は多くのトロイア人を、その中でもトロイア援軍の勇士エウリュピュロスを倒した(516sq.)。ここの表現には、彼と父アキレウスとの相似性がさらに示される。アキレウスは、自分の働きについて、「[敵の]優れた民を殺し、アルゴス人らを守った」(500)と言ったが、オデュッセウスは、ネオプトレモスの活躍について、「アルゴス人らを助けながら、どれほどの民を殺したことか」(518)と、部分的に同一の表現を使う⁽¹⁷⁶⁾。また、ミュシア人テレポス⁽¹⁷⁷⁾の

子の殺害がとくに取りざたされるが、この「英雄エウリュピュロス」は、トロイア側において、「神のようなメムノン」に次ぐ美しい男だったという(522)。トロイア援軍中でもっとも恐るべき相手であったエチオピア王メムノンは、アキレウスによって倒された。その直後に彼も戦死する。その後に来たトロイア援軍で最大の敵が、ヘラクレスの子たちのうちでもっともこの英雄に似ていると言われたテレポス⁽¹⁷⁸⁾の子エウリュピュロスである。戦士の「美しさ」は、強さの反映ということだろう。そのときにもっとも強い相手メムノンを倒した父のように、その後の敵でもっとも優れた戦士エウリュピュロスを殺害することで、父同様にネオプトレモスも「アルゴス人らを助けた」のである。

ところで、アキレウスは、

もし俺が、[父の]救助者として、陽の光のもとへ

—かつて広大なトロイエーで、[敵の]優れた民を殺し、

アルゴス人らを助けたような有りさまで—

もしそういう有りさまで、少しの間でも、父の館に行くことができたなら、

きっと俺の力と不敵の両腕を、呪わせてやったことだろう

—彼[父]を圧迫し、名誉から閉め出している者たちに

(11.498-503)

と慨嘆した。しかし、もしもネオプトレモスが、父に匹敵する勇士として、「(祖)父の館」に戻れば、彼の代わりに老父を救助し、家の名誉を回復し維持することになるだろう。これは彼が、『イリアス』において、つまり生存中にトロイアにおいて、想定していた事態とは異なってくる。そこでは、自分の戦死後、自分に代わってパトロクロスにスキュロスでネオプトレモスを拾ってもらい、故郷の父のもとまで連れて行かせようと思っていた、と言っている(『イリアス』19.330sq.)。その箇所では、息子への期待は表現されておらず—ネオプトレモスが秘めていた、そしてオデュッセウスによって今証言されるその力を、アキレウスはそこでは察知していないようである—、むしろ親友が、老父や館の「救助者」として考えられていると思われる。しかし、そのパトロクロスも—彼より早く—死んでしまったので、この案にはもはや頼れないことになった。だが今オデュッセウスは、父の否定的な予想をいわば裏切る形で大活躍したネオプトレモスの姿を描いてやって、それに代わる希望をアキレウスに与えるのである。

エウリュピュロス殺害の後に、木馬作戦のことがアキレウスに話される(523sq.)。しかし、これに関する議論は後に回して、オデュッセウスによるネオプトレモス追想の最後の部分に目を向けることにしよう。木馬作戦自体においても卓越した雄々しさを発揮したネオプトレモスは、トロイア陥落の後、華々しい榮譽を得て船出する。

だがわれわれが、プリアモスのそびえる都を攻め落とすと、
彼[ネオプトレモス]は、十分な分け前と誉れの品を手にして、自分の船に乗
った。

無傷だった—鋭い青銅の武器にも当てられず、
接近戦で傷つけられることもなかった。戦闘では、そういうことは
頻繁に起きるのであり、アーレース[軍神]は見境なしに狂い回るものだが。

(11.533-37)

最後の文⁽¹⁷⁹⁾は、「勝負は時の運」的な考えも含んでいると言えるが、同時に、気まぐれな軍神にも邪魔立てされない運の強さと神々一般の守護をネオプトレモスは受けていたという意味合いである。そのような幸運にずっと恵まれつつ、彼は、「十分な分け前と誉れの品を手にして」船出したという。「誉れの品を手にして」とは、具体的には、アキレウスに倒されたトロイア將軍ヘクトルの妻アンドロマケを奴隷にしたことを意味するであろう⁽¹⁸⁰⁾。この戦士父子の、功績と榮譽の継承を象徴すると言える点である。オデュッセウスの知識はここまでだが、その後ネオプトレモスは、父の旗下にあったミュルミドネス族をギリシアの祖地まで無事連れて帰ったと、他の箇所でもネストルによって語られ(3.188sq.)、また別の箇所では、帰国しているメネラオスが、すでにトロイアでしていた約束を果たすため、自分の娘ヘルミオネをネオプトレモスのもとに嫁がせようとして、祝宴を催している様子が記される(4.3sq.)。『オデュッセイア』全体において、ネオプトレモスは幸せな帰国を遂げたという説が基にされている⁽¹⁸¹⁾。放浪中のオデュッセウスは、船出後のネオプトレモスのことについては、まだ具体的に何も知らないはずだが、『オデュッセイア』全体の説に沿うように、ここでアキレウスに対して、その息子の武運と榮譽を褒め上げることで、彼に大きな希望を与える。そのような神助に恵まれ、栄光に包まれて船に乗ったネオプトレモスは、きっと故国に華々しい凱旋を飾ったことだろう、そして老父を、苦境に追いやられていたら、助け、館を支えたことだろう、

と。そして、この希望を胸に、アキレウスの霊は、

大股の足取りで、アスポデロスの野を歩いて行った。

喜んでいたので、彼の息子は際立った男であるとわたしが話したので。

(11.539-40)

しかしこの希望は、オデュッセウスが、自分の言葉で自分自身を励ます形で、得るものでもある。これより前に、老父と子とに委ねられている館の代々の「特権」は大丈夫かと母の霊に尋ねたとき、彼女は安心させるように答えた。

おまえの華々しい特権は、まだ誰の手にも渡っていない。いや、テーレマコスが、

なんの気苦労もなしに領地を所有し、公平な宴で

食事に与っている——そういう宴は、法を司る男が味わうのにふさわしいもの——

皆が招待する彼なのだから。

(11.184-87)

そのときに得た安堵をふたたび呼び起こしながら、いま彼は、戦友アキレウスに対しては、彼の老父と館を守護するであろう息子の英姿を描いてやって喜ばせると同時に、自分自身も、わが子と同年輩の、戦争行動を親しく共にした若者の活躍を想起しながら、それを通じてテレマコスの頼もしい成長振りを思い描く。

もちろんこの場合、ネオプトレモスの文字通りの帰国とは異なり、出征したわけではないテレマコスが、帰還によって老父（祖父）と館を守護するということには、そのままの形ではならない——イタケに留まっているかぎりでは。しかし『オデュッセイア』の詩人は、テレマコスに、父の消息を尋ねてペロポネソスへ旅立たせ、ふたたびイタケに帰らせてから、求婚者殺戮に加わらせる。これは、アキレウスの場合のように父の代わりとして、ということではなく、父と協同して⁽¹⁸²⁾館を守護するという形になる。オデュッセウス父子が、ほぼ同時にイタケに帰国するという展開を通じて、館の守護における両者の一体性がそれだけ如実に表現される⁽¹⁸³⁾。アガ멤ノンの家の場合も、殺された父の代わりにその子オレステスが帰国して復讐を果たした。他方『オデュッセイア』

すなわち「オデュッセウスの歌」では、館の守護は、父も子も老父も健在のまま成し遂げられる、という特別なケースとして謳いあげられるが、いずれにせよ、「帰還する子」が、館の守護にかかわるという点では、それらの例と共通する。こういう展開の仕方は、ホメロスの作品でよく用いられる前方指示や後方指示の技法によっている⁽¹⁸⁴⁾。つまり、今の箇所では、帰国する守護者ネオプトレモスにかかわる叙述が、暗にテレマコスの存在と行動を指し示していると(注意深い)聴衆によって予感されたとおりに、作品後半部で、テレマコスの旅からの帰還が求婚者への復讐につながられるのである。

(14) 木馬とトロイア攻略の援助者

さて、テキスト上少し戻って、木馬作戦とトロイア攻略のことがオデュッセウスによってアキレウスに語られる箇所(11.523sq.)を今は扱おう。木馬作戦が『オデュッセイア』で明確に叙述されるのは、これを含めて三箇所ある。すでに論じた第8巻でのデモドコスの歌では、木馬製造から陥落(デイポボス殺害)まで、全体を一通り扱っているが(8.492sq.)、第4巻で、父の消息を得るためスパルタにやって来たテレマコスに対し、王メネラオスからそのことが語られる箇所では、観点をより絞って、木馬の腹中に他のギリシア人たちが潜んでいたオデュッセウスの沉着冷静さが描かれる(4.271sq.)⁽¹⁸⁵⁾。いま論じる第11巻でも、木馬製造への簡単な言及(523)は除いて、もっぱら木馬の中での戦士たちのことに注目がされるので、第4巻でのメネラオスによる記述との比較が有意義である。

後者の箇所ではメネラオスは、あれほどの男は見たことがないというオデュッセウスへの讃美のうちに、その能力を発揮した代表的な例として、木馬作戦のときのことを取り上げる。ギリシア人たちがその腹内で息を潜めていると、ヘレネが新たな夫デイポボスとともにやって来て、木馬の腹をなでながら、ギリシア人の妻たちの声を真似て男たちの名を次々に呼んでいったので、オデュッセウスの横にいたディオメデスとメネラオスは気をそそられ、出てゆこうとしたり、返事をしようとした、しかしオデュッセウスは、そういう二人を冷静に制止した、それで皆が静かに坐っていたが、アンティクロスという男だけが逸って声を出そうとしたので、その口をオデュッセウスは強く抑え続けた、やがてヘレネたちは立ち去った、という。

ギリシア人たち全員を危機に陥れようとするこのギリシア女性は、ここでは、近代文学で言う「ファム・ファタール」的な顔を見せているが⁽¹⁸⁶⁾、そのよう

にして木馬の周囲を三度巡るこの恐るべき女性と、当時のトロイア総将軍ディポボスのペアに、あたかも、腹の中央に坐る（4.281）オデュッセウス一人が対峙しているような構図である。腹内の他のギリシア人には、ディオメデスや、ここの語り手メネラオス自身も含まれているが、彼ら立派な将軍も、ヘレネに騙されて、軽率な行為に走りかねなかったのである。全員が彼によって救われたとメネラオスは言う（4.288）。

もちろん、語りの文脈の観点から見ると、いまメネラオスは、テレマコスに對して、彼の父への感謝を表し、その功績を称揚しようとしているということが、この叙述に影響を与えているだろう。しかしまた、基本的に木馬作戦が、オデュッセウスの働きを中心にした出来事であった点に変わりはないのである。

この二点、叙述の文脈⁽¹⁸⁷⁾と、トロイア攻略者としてのオデュッセウスの確立した名声とが、第11巻での、彼自身による叙述においても作用し合う。アキレウスの靈魂を前にして、自分自身の子を想起させるネオプトレモスの頼もしさと働きぶりを、事実在即して（11.507）、確信を持って伝えるオデュッセウスは、木馬の中においてもネオプトレモスが示した勇士ぶりを語って聞かせる。ギリシアのつわものたちがそこに揃っていたが、他の者たちは、涙をぬぐい、ひざを震わせていたのに、彼は顔色を変えず、涙をぬぐうこともしなかった、むしろ、馬から出させてほしいとオデュッセウスに懇願しては、しきりに劍や槍に手を伸ばす彼だった、という。「馬から出させてほしい」と懇願したという句（531）は、第4巻でメネラオスたちが、ヘレネの誘いに乗って「出ようと」逸ったという語（4.283）に通じるが、後者は愚かしさを反映する衝動であるのに対し、ネオプトレモスの、あふれる勇気の現れである。すでに触れたように、潜伏（待ち伏せ）作戦において、戦士の勇武がもっとも試されると言われた⁽¹⁸⁸⁾。

そのように若者の胆力を称揚するとともに、他方で、オデュッセウス自身の貢献にも言及することを忘れない。ネオプトレモスは協議の場で誰よりも優れた発言をしたと讃えるが、自分オデュッセウスとネストルは除いて、という留保をつけることを忘れない（11.512）。また、ネオプトレモスの血気は、うまくコントロールしてやらなければ、やはりこの作戦を挫折させてしまう恐れがあった。オデュッセウスは、この作戦全体の責任を担っていた。彼は言う、自分には、戦士が詰め込まれたその潜伏場所（木馬）を、開けることも閉じることも、すべて任されていた、と（11.525）。また、たしかに「他の」ギリシア人たちは震え、ネオプトレモスはそうではなかった、と述べるが（526, 528）、他の

「皆」とか、ネオプトレモス「だけ」が、とかとは言うてはいない。オデュッセウス自身で、この場合も、冷静に事態を見ながら、ネオプトレモスを導き、作戦のタイミングを計っていたのである。こういう点は自己称賛には違いないが、客観的にトロイア攻略は、いろいろな面で彼の偉大な功績なのである。この箇所をある論者は、「淡々とした事実報告」と評するが、むしろ、誇らかな自己言及がこのようにさりげなく織り込まれている⁽¹⁸⁹⁾。

この場面は、この勇敢な若者と、彼をリードするオデュッセウスとの二人の姿が支配する。「他の」ギリシア人たちに関しては、勇士たちがいくら顔を並べていても、恐怖にひざをがたがた震わせる役立たず者という印象を与える形になっており、いないがごときである。もちろん、上記の叙述文脈に左右されている面がある。しかしここで銘記すべきは、こういう形で脚光を浴びるオデュッセウスと若者の二人組の姿である。ネオプトレモスは、その戦士人生の初期から親しく関係してきた人物であり、おそらくオデュッセウスには、故郷で大人になりつつあるわが一人子を想わせる若者である。ここではあたかも父子のように相並ぶ二人である⁽¹⁹⁰⁾。メネラオスの叙述にかかるオデュッセウスの単独的雄姿とは大きく異なる情景になっている。

「馬から出」た後、トロイア陥落におけるネオプトレモスの手柄としては、とくにプリアモスの殺害がよく挙げられる。しかし、ここでは、オデュッセウス自身の名声と結びついている木馬作戦がいちばん重要なことであったかのようにプリアモスのことなどはもう触れられず⁽¹⁹¹⁾、むしろすぐに、十分な恩賞とともに「自分の船に乗った」(534)という点に話は進み、彼の幸運の称揚で締めくくられる。国に向かうネオプトレモスの幸せな、意気揚々たる姿をいま改めて眼中に浮かべながら、彼に関する自分の叙述を通じて、自分自身の心も明るくさせるオデュッセウスであったと言える。

上記のようにこれはオデュッセウスにとって同一主題の二度目の語りであり、第一回目においてもそういう希望を抱く契機になったはずであるが、その後、冥界訪問の後に、7年間にわたるカリュプソのもとでの、死に等しいような日々⁽¹⁹²⁾を送ることを余儀なくされて、彼の心はふたたび悲嘆に捉われた状態になる。しかし今、スケリアで再度そのことを物語り、追憶を新たに、希望を取り戻す彼であると言える⁽¹⁹³⁾。

3 悲嘆から希望へ

スタンフォードは、ホメロスの冥界描写に関して、「死者であることの悲哀（ペーソス）」がその主な特徴であるとともに、「ダンテ的な恐怖」もその背景に見えていと述べる⁽¹⁹⁴⁾。彼も言うように、「ダンテ的な恐怖」の要素はあまり表に出ていないが、悲哀の雰囲気全体において支配的であることは確かである。陰鬱な冥界場面全体で、「幸せな調べ（音色）」は、息子に関して良い情報を得たアキレウスの喜びにしか見いだされないとデ・ヨングは考える⁽¹⁹⁵⁾。しかし、この闇の世界では、悲哀や恐怖のみではなく、希望の光も、強い光線とまでは言えないだろうが、射そうとしている。オデュッセウスは、『ギルガメシュ叙事詩』の主人公のように、自らの意志で不死の秘密を求めて冥界に行ったのではない。キルクに命じられて、泣く泣く（10.496sq.参照）行ったにすぎない。だが、人間世界から遠く離れた長い放浪の果てに、死者の国にまで、生の彼方にまで行かねばならなかったオデュッセウスは、ある意味で再生の萌芽をここで見いだす。もちろん、20年ぶりにイタケに無事帰り着いても、テイレニアスが予言した通り、まだ苦労は待っている⁽¹⁹⁶⁾。しかしそれでも冥界は、運命の「どんぞこ」から、希望へ向かう転換点であった。デ・ヨングの言葉を用いると、ネキュイアは、軸的な位置を占めている⁽¹⁹⁷⁾。

『オデュッセイア』全体の構成から言ってみれば、冥界訪問談がスケリア島で叙述されることは、きわめて重要な働きをする。この後オデュッセウスは、「現実世界」と「物語の世界」との境目に位置する⁽¹⁹⁸⁾このスケリアから、イタケに向け船出する。物語の世界は、この場合、メルヘンの要素を含むとともに、トロイア戦争にかかわる過去の記憶と結びついている。他方、イタケにおいては、家族との再会と求婚者たちとの対決が控えており、さらに先には、安らかな死が待っていると予言される。冥界において英雄は、過去とも再会し、未来への展望も得られた。それは、ラインハルトの言うように、過去と未来とを結合する世界である⁽¹⁹⁹⁾。

『オデュッセイア』で主人公が初めて言及されるとき、彼は、「帰国と妻に焦がれている」のに、彼を夫にしたがっているニンフ・カリュプソによって、その洞窟に引き止められている状況にあることが示される（1.13sq.）。また、彼を守護する女神アテナの口を通じて、

自分の土地から煙が立ち昇る光景なりとも見たいものと焦がれながら、

(1.58-59)

いっそのこと死んでしまいたいと願っている彼であると言われていた。その後、彼の姿が読者に対して直接描かれるときも、その島の浜辺で日々泣き暮らす彼の様子が立ち現れる。神々がカリュプソに、彼を解放せよと命令を出したので、流々ながらそれに従った彼女が、彼を探しに行くと、オデュッセウスは

浜辺の上で、いつものところに坐って泣いていた。
涙と悲嘆と苦しみで心を責めさいなみ、
不毛の海の上を眺めては、涙を流していた。

(5.82-84)

しかし、今やっと彼は、七年間留まっていたこの島から、手製の小さな舟で、自分一人で脱出する。だが、ポセイドンの怒りはまだ静まっていなかった。神の送った大嵐のために大破したその舟は捨て、英雄はある島に泳ぎ着く。そこがスケリアだった。

しかし、そこで島人から歓待を受けた彼は、そのように身の上話と放浪の回顧談を彼らに語った後、いよいよ三日目に⁽²⁰⁰⁾、彼らの立派な、「鷹より速い」船で、イタケに送られることになった。その日、陽が昇ると、客人のため船に新たな贈り物が積み込まれ、それから一同は宮殿に戻り、最後の宴が彼のために催される。この宴の場においても、

彼らの間では神々しい歌人が、
民に尊ばれるデーモドコスが、吟じていた。だがオデュッセウスは、
照り輝く太陽へ頻りと頭を向けながら、
それが沈むのを待ち焦がれていた。いまは帰ることを願っていたからだ。

(13.27-30)

自分が前日には褒めちぎった (8.487sq.) この楽人の歌も耳に入らないかのように、社交上のエチケットを良く知っているのにいまはそれも忘れたかのように、宴席の広間の空隙から太陽の動きを何度も窺い見ながら、オデュッセウスは、気もそぞろに日没を待ち続けた。そして、とうとう陽が沈むと、彼は喜んで、「すぐに」アルキノオス王に、いまは送り出してくれ、と話しかける。女王に最後の挨拶をした後、人々の護送する中、彼は、船の待つ浜辺へと送られてゆく。そして乗り込んだ彼を船が運び始めると、すぐに彼は、深い甘美な眠りへと落

ちた。

このように『オデュッセイア』前半部⁽²⁰¹⁾は、テレマコスの旅やイタケでの出来事は別にして⁽²⁰²⁾、オデュッセウスの放浪の数々を叙するとともに、その追想や期待の心的描写⁽²⁰³⁾を豊かに含みながら、悲嘆から希望への転回を描いている。

*中務さんには、学生時代から今日に到るまで、人生のさまざまな局面で、たいへんお世話になってきた。この場を借りて、篤く感謝申し上げる。『オデュッセイア』という偉大な古典については、まだ論ずべき問題、語りたい点がいっぱい残っているが、ひとまずここで区切りたい。）

文献（略号を含む）

- T. W. Allen, *Homeri Opera*, Tomus V, Oxford 1946.
- K. F. Ameis - C. Hentze(-P. Cauer), *Homers Odyssee*, 2 Bde. (4 Hefte), Leipzig 1908-20.
- R. G. Austin, *P. Vergili Maronis Aeneidos Liber Sextus*, Oxford 1986.
- A. Bernabé, *Poetarum Epicorum Graecorum Testimonia et Fragmenta*, Pars I, Leipzig, 1987.
- W. Burkert, Das Lied von Ares und Aphrodite, *Rhein.Mus.* 103(1960), 130sqq.
Burkert, *Homo Necans*, Berlin 1997².
- E. F. Cook, *The Odyssey in Athens*, Ithaca/London 1995.
- G. Crane, *Calypso*, Frankfurt am Main 1988.
- G. Danek, *Epos und Zitat*, Wien 1998.
- G. Dindorfius, *Scholia Graeca in Homeri Odysseam*, Tomus I, Oxonii 1855.
- L. L. Doherty(ed.), *Oxford Readings in Classical Studies: Homer's Odyssey*, Oxford 2009.
- Doherty, Gender and Internal Audiences in the *Odyssey*, in: Doherty(ed.), 247sqq.
DNP = *Der Neue Pauly*, Hrg. von H. Cancik und H. Schneider, Stuttgart/Weimar 1996-2003.
- K. J. Dover, *Greek Popular Morality*, Berkeley/Los Angeles 1974.
- H. Erbse, *Scholia Graeca in Homeri Iliadem* (Scholia Vetera), Vol. Secundum, Berolini 1971.
- J. M. Foley, 'Reversed Similes' and Sexual Roles in the *Odyssey*, in: Doherty(ed.),

189sq.

- H. Fränkel, *Die Homerischen Gleichnisse*, Göttingen 1921.
- T. Gantz, *Early Greek Myth*, Baltimore/London 1993.
- H. A. Gärtner, 'Synkrisis', *DNP*, Band 11, 1156.
- Hiller v. Gaertringen, 'Eurysakes', *RE*, VI, 1, 1352.
- A. F. Garvie, *Homer: Odyssey, Books VI-VIII*, Cambridge 1994.
- Garvie, *Sophocles: Ajax*, Warminster 1998.
- S. Goldhill, *The Poet's Voice*, Cambridge 1991.
- B. Graziosi, E. Greenwood(ed.), *Homer in the Twentieth Century*, Oxford 2007.
- J. Grethlein - A. Rengakos(ed.), *Narratology and Interpretation*, Berlin/New York 2009.
- J. Griffin, *Homer on Life and Death*, Oxford 1980.
- P. J. Heslin, *The Transvestite Achilles*, Cambridge 2005.
- A. Heubeck - S. West - J. B. Hainsworth, *A Commentary on Homer's Odyssey*, Volume I, Oxford 1988.
- A. Heubeck - A. Hoekstra, *A Commentary on Homer's Odyssey*, Volume II, Oxford 1989.
- R. Hunter, The Trojan Oration of Dio Chrysostom and Ancient Homeric Criticism, in: Grethlein - Rengakos(ed.), *Narratology and Interpretation*, 43sq.
- I. de Jong, *A Narratological Commentary on the Odyssey*, Cambridge 2001.
- de Jong(ed.), *Homer: Critical Assessments*, Vol. IV, London 1999.
- de Jong - R. Nünlist(ed.), *Time in Ancient Greek Literature*, Leiden 2007.
- J. C. Kamerbeek, *The Plays of Sophocles, Part I*, Leiden 1963.
- G. S. Kirk, *The Songs of Homer*, Cambridge 1962.
- 木曾明子(訳, 注, 解説), 『アイアース』(ギリシア悲劇全集 4), 岩波書店, 1990.
- 高津春繁, 『ギリシア・ローマ神話辞典』, 岩波書店, 1960.
- 高津(訳), ホメロス『オデュッセイア』, 筑摩書房, 1961.
- 高津(訳), アポロドーロス『ギリシア神話』, 岩波書店, 1953.
- H. Lausberg, *Handbuch der Literarischen Rhetorik*, Stuttgart 1990³.
- W. Leaf, *The Iliad*, vol. I, II, London 1900-1902.
- LS = A Greek-English Lexicon*, by H. G. Liddell - R. Scott - H. S. Jones - R. McKenzie, Oxford 1996.
- 松平千秋(訳), ホメロス『オデュッセイア』, 講談社, 1982.

- 松本仁助, 『オデュッセイア』研究, 北斗出版, 1986.
- E. Minchin, *Homer and the Resources of Memory*, Oxford 2001.
- S. Minta, Homer and Joyce: The Case of Nausicaa, in: Graziosi & Greenwood(eds.), 92sq.
- P. von der Muehl, *Homeri Odyssea*, Basel 1961³.
- A. T. Murray(transl.), *Homer: The Odyssey*, in two volumes, Cambridge, MA. 1919.
- 岡道男, 『ホメロスにおける伝統の継承と創造』, 創文社, 1988.
- 小川正廣, 『ウェルギリウス研究 ローマ詩人の創造』 京都大学学術出版会, 1994.
- L. Preller - C. Robert, *Griechische Mythologie*, 2 Bde., Berlin 1894-1926⁴.
- P. Pucci, The Song of the Sirens, in: Schein(ed.), 191sq.
- RE = A. Pauly - G. Wissowa - W. Kroll, *Real-Encyclopädie der classischen Altertumswissenschaft*, Stuttgart/München 1894-1980.
- K. Reinhardt, *Tradition und Geist*, Göttingen 1960.
- Robert→L. Preller-C. Robert.
- H. Rohdich, Elpenor, in: de Jong(ed.), *Homer: Critical Assessments*, Vol. IV, 262sq.
- K. Rüter, *Odysseeinterpretationen*, Göttingen 1969.
- W. Schadewaldt, *Hellas und Hesperien*, Zürich 1960.
- S. L. Schein(ed.), *Reading the Odyssey*, Princeton 1996.
- L. M. Slater, *The Power of Thetis*, Berkeley 1991.
- W. B. Stanford, *The Odyssey of Homer*, Vol. I, II, New York 1965².
- Stanford, *Sophocles: Ajax*, Bristol 1981(1963).
- 丹下和彦, 『旅の地中海』, 京都大学学術出版会, 2007.
- W. G. Thalmann, *The Odyssey: An Epic of Return*, New York 1992.
- H. van Thiel, *Homeri Odyssea*, Hildesheim 1991.
- P. Vidal-Naquet, Land and Sacrifice in the Odyssey, in: Schein(ed.), 33sq.(tr. by A. Szegedy-Maszak).
- M. L. West, *The East Face of Helicon*, Oxford 1997.
- E. Wüst, 'Erinyes', RE, Supplementband VIII, 82sq.
- S. Yoshitake, Disgrace, Grief and Other Ills: Herakles' Rejection of Suicide, *JHS* 114(1994), 135sq.
- K. Ziegler, 'Neoptolemos', RE, XVI.2, 2470sq.

注

- (1) 岡 6, 25sq 参照。「プトリポルトス」＝「都（町々）の攻略者」という語はアキレウスにも適用されるが、これは（ほんらいは）彼によるトロイア周辺の町々の攻略を指すであろう。オデュッセウスにはそういう活動は知られていない。彼の果たすのは、ほんらいの戦闘以外では、むしろ敵との折衝とか、潜入とか、リクルート役である。オデュッセウス・「プトリポルトス」は、木馬作戦（またパラディオン盗み出し）に基づく「トロイア攻略者」を意味する。木馬の伝説と、太古からの宗教的祭祀的慣習との関連性について、Burkert, *Homo Necans*, 179sq. の推論参照。
- (2) フオリは、reversed simile という用語を使う(Foley, 'Reverse Similes' and Sex Roles in the *Odyssey*). inversion と言われることもある。逆さ比喩の他の例として、5.394sq., 16.216sq., 19.108sq., 23.233sq. がそこで(189sq.) 挙げられている。なお、もう一箇所引かれる 16.17sq. は、このカテゴリーに入れてよいか疑問である。
- (3) Nagy, 101 'the captive widow also has ákhos(viii 530), so that the ákhos of Odysseus is universalized: he now feels the grief of his own victims in war.' Cf. Thalmann, 63.
- (4) 丹下、53-63. 『オデュッセイア』においては、「トロイアの話が意図的に避けられて」いて、「トロイアは、トロイア戦争は、...封印されている」、そして「トロイアと訣別した男」がオデュッセウスであるという。この「訣別」は、歴史的に、オデュッセウスが新しい時代を迎えようとしており、英雄たちがいた場所や社会を脱出して、市民社会的な新しい社会に入ろうとしているという事情に関連するとされる。
- (5) 小川 206, 217.
- (6) Foley, 'Reverse Similes' and Sex Roles in the *Odyssey*, 206sq. フオリは、男が女に、女が男になぞらえられる諸例を含む逆さ比喩全体の議論に即して、『オデュッセイア』に「社会的役割の柔軟な解釈」が見られるとし、とくに、「イタケ内での男女間の関係についてのある特定の型」を説こうとしているのがこの叙事詩であると言う。それはすなわち、「はっきり定義された（男女それぞれの）権力圏と、彼らの性に属する同じ心を持つメンバー間の動的な緊張とを伴った、成熟した結婚」ということである(192, 207).
- (7) Pucci 196. 『オデュッセイア』の詩人に『イリアス』への対抗意識を見る論について、Goldhill 50, n.90(文献)参照。

- (8) Cf. Minta 93 ‘Homer denies him[Od.] that moment [of triumph] even in retrospect, by identifying him with the vanquished, not the victors.’
- (9) Minchin 208 ‘Odysseus is, in a sense, mourning himself’.
- (10) De Jong, ad VIII 83-92, cf. Fränkel 90.
- (11) Cf. Garvie, *Soph. Ajax*, ad 121-6 ‘a more enlightened... understanding that Ajax is a human being like himself, and so pities him out of common humanity’.
- (12) ピロクテテスの悲嘆も、古代で議論の対象にされた。キケロ『トゥスクルム荘対談集』2.19, 33 等参照。
- (13) ビザンツの学僧エウスタティオスは、アリストテレス『詩学』1455a3sq. にならい、想起して泣くことによって、スケリア人から、オデュッセウスと認知されるきっかけを作る、という構成面およびアナグノリシスの観点からの読み方を示している(『オデュッセイア』8.81 への注), cf. Goldhill 49, 51sq., Garvie, *Hom. Odys.*, p.293.
- (14) Cf. Gärtner, 1156.
- (15) 小川 206 参照 (「オデュッセウスは初め、木馬の物語を自己の手柄話だと思っただけで期待していた。しかし...」)。
- (16) Cf. West, in: Heubeck – West - Hainsworth, ad II 81; Hoekstra, in: Heubeck - Hoekstra, ad XVII191.
- (17) Cf. e.g. Cicero, *Tusc. Disp.* II 55, 57; Seneca, *Ep. Mor.* LXIII 1, XCIX 1, 17(*videt aliquem conlabentem et corpori adfusum: effeminatum ait et enervem* [cf. *Il.* Ω4]).
- (18) Cf. Dover, 101sq., 168.
- (19) Hainsworth(in: Heubeck – West - Hainsworth, ad VIII 522)は、ホメロスにおいて悲嘆は、非常に広範囲の感情を表現すると述べ、より具体的に「不安、安堵、苛立ち、憐憫、喪失感、失敗、あるいは無力さ」の状態から生じるものとして記している(喜びの涙はここでは「安堵」のそれに相当するかもしれないが、それではやや狭すぎる)。
- (20) 10.398 の *himeroeis...goos* という句は、人間に戻りたいと焦がれていた気持ちだが、今涙となって噴出したもの、の意か。「悲嘆への憧れ」の句と同義とも解される。
- (21) 以下については、West, in: Heubeck-West-Hainsworth, ad IV102 で挙げられる箇所を参照。
- (22) 『イリアス』23.9, 『イリアス』24.513 も参照。
- (23) 出征後トロイアで 10 年戦い、それから船出して、短い逗留期間になった

他の漂流地は除いて、キルケの島で一年過ごし、それから冥界に行き、母アンティクレイアの亡霊などと会い、次いでカリュプソの島に7年滞在してから、スケリアを経て、20年目に帰国する。

- (24) Pucci, 196. 『オデュッセイア』の詩人に、『イリアス』との対抗意識を見るブッチは、そういうノスタルジアの対象である『イリアス』的のないさおしが、『オデュッセイア』では否定されようとしている、とする(197)。しかし、では、『イリアス』においてアキレウスが見せるような悲嘆への憧れはどうか。
- (25) Stanford, ad IV102-3.
- (26) Cf. Ovid. *Trist.* 4.3.37; Seneca, *Ep.Mor.* LXIII 6, XCIX 19 (*inest quiddam dulce tristitiae...oculi velut in gaudio relaxantur*), 28 (*voluptas cognata tristitiae*).
- (27) West (in: Heubeck-West-Hainsworth ad IV 113-82)は、第4巻のこの箇所におけるテキストの前方指示(‘foreshadow[s]’)について述べている。
- (28) Cf. Hainsworth in: Heubeck-West-Hainsworth, ad VIII 532.
- (29) Cf. 11.202.
- (30) Garvie, *Hom.Odyss.* p.293 (‘folk-tale parallels for the motif of adulterers being bound together by magic’).
- (31) Cf. Burkert, *Das Lied von Ares und Aphrodite*, 140. Cf. Garvie, *Hom.Odyss.* p.294; Doherty, *Gender and Internal Audiences in the Odyssey*, 262.
- (32) したがってオデュッセウスの将来に関係する (Garvie, *Hom.Odyss.* *ibid.*). 他方、小川は、独特の読み方をして、この神々の話が、トロイア陥落や木馬の計を示唆する、つまり過去に関係すると考える(小川 204 以下)。木馬の策略およびヘパイストスの罠、あるいは、ギリシアへの帰国およびレムノスへの出立の見せかけ、といった点は互いに関連する面があるとも言えるが、他方で、アプロディテはヘレネのように誘拐されるわけでもないし、トロイア人が木馬を引き入れたことと、アプロディテがアレスをヘパイストスの家の寝室に誘い入れたこととの対応関係はほとんど存しない(この説の論理で行けば、トロイアは、アレスの館でなければならない、しかしこの「寝室」は夫ヘパイストスのそれである)。メネラオス留守中にパリスがその家でヘレネと仲良くなるということに対応しうる、ヘパイストスの家でのアレスと女神との睦みあい、トロイア戦争全体の縮図になりえたが、しかしやはり誘拐まで至らないので、この点も疑問である。なお、パイアケス相手に自分の弓の腕前をことさら誇るのも(8.215sq.)、この点に、つまり弓競技を契機とする求婚者への復讐に、関係

づけうる。

- (33) Cf. Rüter, 247, Garvie, *Hom.Odyss.* p.249(文献).
- (34) 岡 218, cf. Garvie, *Hom.Odyss.* p.249. 『イリアス』以前の、しかもアキレウスとオデュッセウスとを対立させる伝承にさかのぼるという解釈について、Nagy 22-25 参照。ちなみに、アレスとアプロディテのエピソードには、そういう「有名な話」という趣旨の説明はないので、創作と見なしうる (cf. Garvie, *Hom.Odyss.* p.293). ただし、伝統的なメルヘンの要素を一部利用した話である(上記).
- (35) 「そのとき」の句について、岡 215 n.2 参照。「なぜなら」は、「踏み越えた」を説明する。
- (36) Cf. Danek 144. 「なぜなら」は、この場合は、「喜んだ」に関係する。
- (37) 「禍の始まり」を、戦争末期に結び付けようとするダネクの解釈は、苦しいであろう (Danek 147).
- (38) Cf. Rüter 248.
- (39) Cf. Scholia(ed. Dindorfius) ad 077(B.E.) *tote eggizein tēn tēs Troias halōsin hote idēi tous tōn Akhaiōn aristous philoneikountas.*
- (40) フォン・デア・ミュールの説 (岡 215 以下参照). 宴に呼ばれるのが遅れたことを怒るアキレウスとアガメムノンとが争い、オデュッセウスがそこに加わって、前者を詰ったという内容の『キュプリア』(プロクロス梗概) およびソポクレス『シュンデイブノイ』断片 566(141)が引き合いに出される。
- (41) Cf. Danek 148 ‘Daß ein Orakel, das sich auf den Ausgang des Krieges bezieht, bereits vor Beginn der zähnjährigen Kämpfe sich erfüllt,befriedigt nicht’.
- (42) Scholia ad 077(H.Q.) *khairein agnoounta hoti tōn kakōn eti synebainen arkhēn einai.* 神託誤解説については Nagy, 24sq., 64sq.参照。
- (43) 岡 5 以下, Danek 145 参照。
- (44) この句 *aristoi Akhaiōn*(78)は, *aristēes Akhaiōn*(24.86)等の類義句と思われる。
- (45) くだんの古注釈家たちは、「禍の始まり」(81)を、アキレウスとアガメムノンの争い後、つまり戦争開始後 10 年目に置いているようである。この点は上記で反論した。
- (46) Scholia ad 075(H.Q.V.), *ibid.*(E.), cf. 77(B.E.).たとえば写本 E ではこう言われている。*dia logōn ephiloneikēsan, ho men Odysseus synesin epainōn, ho de Akhilleus andreian, meta tēn Hektoros anairesin,hote ho men biazesthai parēnei, ho de dolōi metelthein.*

- (47) 力と智との対立概念は、すでに『イリアス』にも見いだされると Nagy, 42-58 は考えている。
- (48) Cf. Danek 147.
- (49) Danek 147.
- (50) Cf. Danek 79(アキレウスの死およびアキレウスの武具の審判の結果自殺するアイアスのあとに「オデュッセウスの時代」が始まる、という)。
- (51) もともとは「叫び声が天にまで達する」(『イリアス』2.153 等) という表現が基にあり、そこから「名声(をはやす声)が、うんぬん」という句に発展したのだろう。オレステスの「万人に知られた」名声 (1.298sq., cf. Danek 144) という句よりもさらに特別な表現である (9.264 とも比較)。
- (52) 88, 89, 92 の *iterativa* 参照。
- (53) Cf. Danek 150.
- (54) Heubeck in: Heubeck-Hoekstra, ad XI 379-84.
- (55) 397 行は『イリアス』的な荘厳な句で(Heubeck, in: Heubeck-Hoekstra, ad loc.), 今の哀れさとそれだけ対比させる。
- (56) 8.82 *Dios megalou dia boulas* と 11.436sq. *eurypota Zeus/...gynaikeias dia boulas*.
- (57) 「ゼウスのはかりごと (*Dios boulē*)」という詩句とそれに関係する詩的モチーフは、『イリアス』以前の伝承に遡ると思われる。Cf. Slater, 118sq. (W. Kullmann の見解)。
- (58) 海神プロテウスから、アガメムノンの運命を聞かされて泣き崩れる、やはり放浪中のメネラオスを参照(4.538sq.)。その後彼は、エジプトで、神々に犠牲を捧げ、彼らの怒りを静める。
- (59) Sic Rüter, 235sq., cf. W. Mattes, apud Hainsworth, in: Heubeck-West-Hainsworth, ad VIII 492-3.
- (60) 予期に反して「犠牲者」の悲惨さに気づかされ、同情の涙を催した、ということではない。なお Hainsworth は、ここのテキストにおいて、登場人物の内的心理は記されていないとする(Hainsworth, in: Heubeck-West-Hainsworth, ad VIII 492-3)。本論では、ここに限らず、『オデュッセイア』のテキストからそれを読み取る試みをそのつど行なう。
- (61) E.g. Nagy, 101 ‘the *ákhos* of Odysseus is universalized’; Foley 206 ‘Once conqueror of Troy, Odysseus now understands the position of its victims.’
- (62) これらの研究者たちと同様、筆者も、『オデュッセイア』を読むさい、統

- 一論の立場を取る．分析論的立場からは、それら二箇所を別々の起源（作者）に帰しうる．
- (63) 後者の箇所は、これらの論者によって、むしろ素通りされ、考慮に入れられないことのほうが多い．筆者の見るところ、丹下だけが(簡単に)触れている(60「ここでは淡々と事実報告に終始している．この場合は状況がパトスの噴出を許さない」)．これに対する反論は下記参照．
- (64) Foley, 190.
- (65) 「そういうハゲワシのように、いやそれ以上に」を簡略化した比喻表現であろう．
- (66) 原語は *phēnai*, *aigypioi*. 前者は、LSで lammergeyer「ヒゲワシ」か、と説明されている．しかし英訳では、sea-eagle「オジロワシ」とされる場合が多い．他方、*aigypioi* は一般的な用語らしい．「ハゲタカ」としておこう．
- (67) Cf. Stanford ad loc.
- (68) Nagy 101 は、『イリオス陥落(イーリウー・ペルシス)』でのトロイア陥落時の描写をこの箇所は思わせるという一方で、この夫は「疑いなく」ヘクトルに似ていると言う．ヘクトルの死とトロイア陥落とはだいぶ時間的に離れている．
- (69) しかし Danek 159 は、キュクロスの一つ『イリオスの陥落』からの「引用」と解する(cf. Nagy 101).
- (70) フレンケル(Fränkell, 90)は、くだんの歌が、自分の「誇らしい英雄的領主的偉大さからの」転落を痛感させるからオデュッセウスは泣いたのだ、と説明する(de Jong, ad VIII 83-92 ‘the contrast’うんぬん、というのも同様の説)．これは、もちろん間違っていないが、まだ十分ではない．
- (71) Goldhill や Danek は四部分に区分する(Goldhill 52, Danek 156sq.). ナラトロジーの観点を交えた彼らの議論は説得的ではない．むしろ、木馬作戦の準備から、市中に引き入れられ、広場に据えられている情景までを前段階、そこから出て攻略そのものが行なわれる部分を後の段階と考えて、二部分に分けたほうが明快だろう．
- (72) West, in: Heubeck-West-Hainsworth, ad IV266ff. (『イリアス』13.277sq.参照)．
- (73) Cf. Hainsworth, in: Heubeck-West-Hainsworth, ad VIII23-30.
- (74) priamel という修辞手法 (de Jong, xviii ‘summary priamel’).
- (75) ここの歌の締めくくりがこれである点について Danek 159 参照．
- (76) 二人以外のギリシア人たちの戦闘——たとえばネオプトレモスによるプリ

アモス殺害—については, Gantz, 650 参照.

- (77) 『小イリアス』プロクロス梗概, アポドロロス『摘要』5.9 等. ただし『オデュッセイア』ではこの点は明確に述べられず, 同 8.517 への古注(『小イリアス』断片 4, ベルナベ版)では, 彼はヘレネの夫になっていたのではなく, 将軍(トロイア軍総大将)として, パリスの館に留まる彼女を監視していただけ, という趣旨で説明されている. しかし『オデュッセイア』4.276 における両者の密接な行動は, 夫婦であることを十分示しているであろう. 絶世の美女に, その夫の死後, すぐ求愛者が現れるのは当然である. またメネラオスが, デイポボスの館に向かったという点自体がすでにその点を反映する(Verg. *Aen.* 6.521: *thalamus* 「夫婦の寝室」参照). パリスの生前から両者は愛し合っていたという説が後世行なわれた(イビュコス, シモニデス). 他方, パリスの死後, デイポボスがヘレネを犯して無理やり妻にしたともいう(エウリピデス『トロイアの女たち』959, ただしヘレネの自己弁護の中の言い分). なお, 一伝によるとヘレネは, 生涯五人の夫(テセウス, メネラオス, パリス, デイポボス, アキレウス)を持つという予言がされていた(cf. Gantz, 596). デイポボス・ヘレネの夫婦関係はホメロス以前の伝承に遡ると考えられる.
- (78) 『小イリアス』プロクロス梗概 106 頁アレン版.
- (79) 『小イリアス』断片 4 ベルナベ版.
- (80) デイポボスがメネラオスに殺されたというのはホメロス以降の伝承, という説明(Austin, 171)はほとんどナンセンスである. なおこれは, 『イリオス陥落』プロクロス梗概 108 頁アレン版で, メネラオスが殺し, とあるのに拠るらしい.
- (81) Cf. Danek 159. 出典は『イリオス陥落』プロクロス梗概 108 頁アレン版. メネラオスがヘレネも殺そうとした, しかしその美しい乳房を見て剣を落とした, というバージョン(『小イリアス』断片 XVII アレン版, 断片 19 ベルナベ版)は, ホメロスはあずかり知らぬ話と思われる. Gantz(650)は, 『小イリアス』でほんとうにそう語られていたか疑問視する.
- (82) 4.286 ではアンティクロスなる男も挙げられる. 木馬に潜んでいた他のギリシア人について, Gantz 650 参照.
- (83) 岡 453 以下; Reinhardt 94sq; Heubeck, in: Heubeck-Hoekstra, ad X496-9, 539-40; de Jong, p.266sq.
- (84) オデュッセウスは, トロイアでは女神の援助があったことを認識していたが, しかしそこを出てからはあなたは援けてくれなかったとアテナに述べている(13.314-21).

- (85) 修辞術で言うシュンクリシスの技法は、すでにホメロスにおいても活用される創作法である。 Cf. Gärtner; Lausberg, §799, §1130. 後記参照
- (86) ホメロスの英雄の自己憐憫は頻繁に起きる (11.167, 214, 482 等). それで嗚咽することもよくある (5.82sq., 10.496sq., 586sq.). 自己憐憫の涙は稀であるという Stanford (ad VIII 522)の判断は疑わしい.
- (87) オルペウスやヘラクレスらによる本来の冥界行物語と異なり、オデュッセウスのはむしろ死者呼び出し(招魂 *nekyomanteia*)の側面が優る (cf. Crane, 88). 内部に入り込んで歩き回ったり、プルトンらと会ったりするわけではない。ラインハルトは、これは招魂的な話というより、万霊節 *Allerseelenfeste* に当たるアンテステリア祭において、死者の霊魂が生の世界との一時的接触を求めて自ら押しかけてくるのに類似する特徴を持つと言うが (Reinhardt, 111), この解釈は、ここの描写にかかる冥界のペースという主特徴を見ると、適切とは思えない。また、この段の後半はカタバシス(冥界内部への下降)になるという解釈 (Crane, 88, Cook, 75 n.78 等)への反駁は、Heubeck, in: Heubeck-Hoekstra, p.76 参照。ただし、Danek, 215-220 の考えるように、招魂の枠組みに、ほんらいは冥界下降(冥界内の移動)的な要素も一部取り込まれているが (cf. e.g. Danek 231), 後者の点は表現的にぼかしてある。
- (88) 三人の罪びとティテュオス、タンタロス、シシュポスを扱う箇所(576-600)については、統一派の代表ラインハルトすら、真正かどうか分からないとする (Reinhardt, 108).
- (89) ここの構成について、ホイベックは、(a)エルペノル・テイレシアス・アンティクレイア三人との遭遇場面、(b)一四人の神話時代の女性の霊、(c)オデュッセウスの回顧談の中断部(インテルメッツォ)、(d)アガメムノン・アキレウス・アイアス三人との遭遇場面、(e)六人の前時代の男性の霊、という五部に分け、cの中断部を中核として、シンメトリカルになっていると考える (Heubeck, in: Heubeck-Hoekstra, p.77). ちなみに I (2)は無視されている。しかし、これだとあまりにも整然とした構成になりすぎて、却って不審な思いを抱かせる。また、内容的、人物的に、aの部分になすとされる亡霊たちは、男女の点で入り混じるが、それに対応するはずの d は、男ばかりである。前座的に登場するエルペノルは、まだ葬式を受けていない迷える霊という点で、テイレシアスらとは同列にはしにくいし、話す内容の点でも、ほんらいの死者が持つ大きな視野はなく、その意味でオデュッセウスに与える有益な情報は有していない。なお、幾何学文様の構成の枠をこの箇所に押し付ける試みを、Cook, 74sq.が行っ

ている。

- (90) Cf. Reinhardt, 107 ‘Verschränkung.’
- (91) Cf. Stanford ad XI 51ff.
- (92) 10.544sq 参照。オデュッセウスがスケリア人たちに語るこちらの箇所には、エルペノル自身の説明には現れない「暑さを避けて」など、一部オデュッセウスによる推測も混じっているようだが、間違っていないと思われる。
- (93) *Contra* Stanford ad X 557sqq.
- (94) 古代以来の諸解釈について，Crane, 95 参照。近代の研究については，Heubeck, in: Heubeck-Hoekstra, ad X 551-60 も参照。
- (95) Crane, *ibid.*
- (96) Reinhardt, 104 ‘die Treue und das liebende Gedenken’, 105 ‘die... kameradschaftliche Pflichterfüllung an dem Ruhmlosen’. Cf. de Jong ad XI 51-83. このエピソードは，冥界訪問の「弱い動機」を糊塗するためのものという説明 (Kirk 239sq.) は，説得力に乏しく，その示唆的な意味合いに対して無感覚である。
- (97) 10.554 *moi* (dat. ethicus).
- (98) Reinhardt, 104.
- (99) Cf. Reinhardt, *ibid.*
- (100) Leaf, ad *Il.* XII 358; II p.620 ‘in order...that he may not have to return to plague Odysseus’.
- (101) Wüst, ‘Erinys’では考慮されていない。
- (102) De Jong, ad XI 66-8 (家族について)。
- (103) De Jong, 275 は，アンティクレイアとの対話への関連性(‘seed(=prolepsis)’)を見る。
- (104) Reinhardt, 99 ‘Als Gestalt einer Oedipodie oder Thebais tritt Teiresias in das Leben des Odysseus: als der Seher tragischen Verhängnisses, als Warner vor dem Zorne der Götter’.
- (105) Cf. Reinhardt 104. テイレシアスの予言は，第 12 巻でのキルケの指示と重なる部分もあるが，基本的に役割分担的な性質を持っている(cf. de Jong, ad XI 100-37).
- (106) アキレウスの塚にかかわる 24.82 参照。
- (107) 敵には敵らしく，友には友らしく，が英雄的道徳である。
- (108) この名の意味に関する別の説「男らしさ(勇武)を望む者」に，Rohdich(269) が言及している。

- (109) Reinhardt, 104.
- (110) Cf. Danek, 213.
- (111) キルケは、テイレシアスの霊に尋ねる以前に他の霊が血に近づかないようにせよと指示しただけで(10.536sq.), この原理は説明していない. キルケとテイレシアスの役割分担の一例である.
- (112) 「メリエーデア・テューモン・アペーウラー」. 『イリアス』10.495 参照.
- (113) Cf. Danek, 222.
- (114) Leaf, II p.621 ‘It (sc. Patroklos’ ghost) does not even know its own powerlessness’.
- (115) 20, 69sq.と比較. Cf. Leaf, *ibid*.
- (116) 古代の学者によって *hysteron proteron Homērikōs* と呼ばれた技法(Stanford, *ad loc.*).
- (117) Cf. Ameis-Hentze *ad XI* 185; Danek, 230; de Jong, *ad XI* 181-7. 『オデュッセイア』で扱われる事件の時系列については de Jong, 587sq., Cook, 68 参照. 冥界叙述の一部にアナクロニズム(ここでは, 故意の時間順序無視)を見ようとするスタンフォードらの解釈は正しくないと思われる(Stanford *ad XI* 115sq., 184sqq.; Ameis-Hentze *ad XI* 449 等).
- (118) 116 *katedousi*, 117 *mnomenoi*, *didontes* は, いずれも, prophetic present という解釈が妥当である(*contra* Stanford *ad loc.*).
- (119) Cf. Danek, 230; de Jong, *ad XI* 181-7. 『イリアス』22.484sq.参照.
- (120) Cf. de Jong, *ad XI* 181-7.
- (121) Cf. Danek, 230.
- (122) オデュッセウスは, 冥界訪問後, いくつかの場所を途中で通過してから, ニンフ・カリュブソの島オギュギアで7年間滞在することになり, それから, スケリア島を経て帰国することになる. テイレシアスは, 「暴慢な」求婚者たちが妻に求愛している「難儀な状態」をそこで見いだすだろうと予言しているが, また彼らに英雄が復讐を果たすであろうことも述べている(11.115sq.). オデュッセウスが, これを念頭に置きながら, 母の「彼女ペネロペは, 悲しみに暮れてはいるが, 館に留まっている」という少し漠然とした言葉(181sq.)を聞いたとき, 両者の話を直結させて理解し, 成り行きについてある程度樂觀的な見通しを持った可能性がある.
- (123) エルペノルは, オデュッセウスの「妻と父と子」の名にかけて嘆願したが(67sq.), 与えるべき情報は何も持っていない.

- (124) Cf. de Jong, ad XI 181-7.
- (125) 乙女が神と交わり、その子を人間が娶るというパターンはよく見られる(『イリアス』16.176sq.等). 王族の女が神の種を宿して、というモチーフは、オリエントの説話でも用いられる称揚の手段であり、ヘシオドスの『エーホイアイ』では叙述の基本要素にされる(cf. M. L. West, 117sq., 458sq.). しかし、ここではテュロが河神エニペウスを自分から愛して、という状況設定が独特に思われる.
- (126) イピメディアの子たちオトスとエピアルテスの話(305sq.)は、神々を蔑する傲慢さという宗教的主題に属し、インテルメツソの後で語られるティテュオスらの劫罰のくだりと呼応する(576sq.). 上述の「交差的」叙述法である.
- (127) Cf. Danek, 231.
- (128) アポロドロス『摘要』5.6では、彼の狂気が女神によって引き起こされたとあるが、キュクロスの『小イリアス』では、とくにそうとは述べられない(プロクロス梗概). 神の介入がないとすれば、異常な心的緊張によって狂ったということになる.
- (129) アポロドロス『摘要』5.6, 『小イリアス』プロクロス梗概, ソポクレス『アイアス』参照. なおホメロスでは、アイアスが自殺したということには明確な言及はないが、前提されているはずである.
- (130) 母テティスが産んだ子は何人かいたが、不死にする試みまたは不死であるか確かめる検査の中で次々死なせ、アキレウスだけ残った、その出産後まもなく、彼女は夫と別居した.
- (131) 別伝ではもう一人の息子ピライオスがあった. ピライオスは、パウサニアス 1.35.2によるとアイアスの孫(エウリュサケスの子)だが、ヘロドトス 6.35によると、アイアスの子. しかし、ピライオスについてはソポクレスの劇では全く触れられない.
- (132) 『神統記』1011sq. キルケとの子は、アグリオス、ラティノス、そしてテレゴノス. カリュプソとの子は、ナウシトオスとナウシノオス.
- (133) アルキノオス王は、オデュッセウスに「子供たち」がいると考えた(8.243). この想定は全く自然である.
- (134) アガメムノンの息子に関する別伝(カッサンドラとの子)について、Gantz, 675 参照.
- (135) 『小イリアス』断片3アレン=ベルナベ版, アポロドロス『摘要』5.7. 火葬(*kauthēnai*, *kaēnai*)が、ホメロスの英雄のための本来の葬式法である(ただ

し火葬した薪山に土を盛って塚を築くので、この点からは埋葬と言われることもある)。ソポクレスの『アイアス』では、埋葬(*thaptein*)すべきかどうかの問題にされる。

- (136) 母の子に対する呪いの例は、ホメロスにおいて、他に、『イリアス』9.568sq. (アルタイアとメレアグロス), 21.412sq. (ヘラとアレス), 『オデュッセイア』2.135 (ペネロベとテレマコス) がある(cf. Wüst, ‘Erinys’ 101sqq.). エピカステのは、これらよりも、自分の死を賭す分だけ、いっそう恐ろしい行為である(オイディプス自身は無実だが、と Wüst は言うが、彼女の夫を殺し、その結果やもめになった自分と結婚した息子を呪う動機は理解できる)。詩人のエピカステの自殺への言及には、何ら非難(blame)的口調は見られないという吉武の説は疑わしい(Yoshitake, 139 n.13)。自分の命を犠牲にした復讐のいまわしい面が、「まことに多くの苦しみを残した」といった表現で示されている。自殺行為の事実的記述(277-79)だけを見るのは不十分であり、その直後に付け足される、エリニュスへの言及も考慮に入れないといけない。
- (137) Cf. Kamerbeek, p.172.
- (138) 友軍に見捨てられたピロクテテスが全軍を呪う行為には斟酌する余地があるが、アイアスに関してはそれは困難である (cf. Winnington-Ingram, 45, 292 n.39)。アキレウスの武具の審判において不正があったというのは、根拠がないであろう。ギリシア軍はそれ以前は彼に好意的だったが、この凶行の試みと家畜の殺戮以降冷たくなった (Winnington-Ingram, 45 n.103)。
- (139) 一般に、名誉(恥辱)感と絶望が、ギリシア人の自殺の最大の二動機という点について、Yoshitake, 138sq.参照。復讐のための自殺については、Stanford, *Sophocles: Ajax*, 289sq.参照。
- (140) 後代に到るまでギリシア・ローマ人の自殺に対する態度は概してアンビバレントであり、たとえばプラトンの考えもまだ揺らいでいる。さらに後には、キュニコス(犬儒)派はそれを推奨し、逆にネオプラトニストたちは明確にそれを禁じた。ホメロスでは、自殺願望やその試みについては何回か触れられるが、その実行例が言い表されるのは上記の二つだけである。自殺一般、またそれに関する古代ギリシア人の意見の相違について、Stanford, *ibid.*; *RE II A*, 1 ‘Selbstmord’(Thalheim); Garvie, 9 n.35 参照。
- (141) Cf. Garvie, *Soph. Ajax* 6, 16(‘the vindication of Ajax’).アイアンティス部族について、木曾 387 参照。
- (142) ロイテイオン岬における埋葬(アポドロロス『摘要』5.7)も、『オデュ

- ッセイア』では触れられない。後代では、レウケ島（アキレウスのための至福の島）にアイアスもいるとされることがある（パウサニアス 3.19.11）。
- (143) アイアスの行動は、戦友同士の反目は敵を喜ばせるだけだという老将ネストルの諫めに背反する（『イリアス』 1.255sq. 参照）。「敵には敵らしく」という原理でアイアスの行為を擁護しようとする Garvie の意見 (*Soph. Ajax*, p.11) は的外れである。
- (144) Cf. Hiller v. Gaertringen, 1352.
- (145) Cf. Stanford, *Soph. Ajax*, li.
- (146) 後者の点について、『オデュッセイア』 1.237sq., 24.30sq. 参照。
- (147) 「アキレウスに次ぐ勇者」（11.469sq., 551, 556sq., 24.17sq. でも同様に言われる）。『イリアス』でもすでに用いられ、後代にもよく現れる定型的な表現だが (vid. Stanford, *Soph. Ajax*, xv n.16, xx n.2, Hor. *Serm.* 2.3.193, et al.), ここではそれが繰り返されて、アキレウスとの近似性が強調される。
- (148) 553 でも彼は「テラモーンの子」と呼ばれる。
- (149) ソポクレスの劇では、自分の後継者としてエウリュサケスのことを心配しながら、彼をテウクロスに託すなどの配慮をしてから死ぬ（『アイアス』538sq., 339 参照）。
- (150) 562 参照。ソポクレスの劇で、アイアスとその妻子は、ヘクトルとその妻子の関係に擬せられるが、後者が守ろうとした家族の絆をアイアスは自ら断ち切る (cf. Garvie, *Soph. Ajax*, p.169)。また同劇で「テラモーンの子」アイアスは、父の勇士としての高名を意識しながら自分のこれまでの働きを恥じるが、そういうアイドース「恥辱」も、対照的に『オデュッセイア』においては表に出されない。
- (151) アキレウスのための葬礼競技に付属した催しだったか（24.85sq. 参照）。
- (152) これに関して、patronymic に対する ‘paedonymic’ なる用語を Leaf (ad loc.) は使っている。なお、別の例として、Althaea Meleagris が挙げられている (ibid.)。
- (153) これは、24.116sq. でも触れられる。
- (154) アガメムノンがその後で改めてペネロペたち女性への猜疑心を煽り立てようとする言葉 (454-56) は、古代の学者によって、真正ならざる部分と見なされた。もし真正な句とすると、アガメムノンの偏執的な女性不信を描写しようとしている。
- (155) ソポクレスは姉エレクトラの働きにした。なお、乳母は、彼の救出のため、自分の子を犠牲にしたという歌舞伎的なヴァージョンがペレキュデスにあ

- る (Schol. Pind. *Py.* XI 25b, cf. Robert, III1306).
- (156) 復讐を遂げた彼は、このときすでに成人していた (Velleius Paterculus I.1.3 ではこのとき 20 歳とされている)。したがって亡命したときは、10 歳くらいだったと思われる。Cf. Robert, II 1307.
- (157) 3.307. ペイシストラトス時代の挿入句という説がある (Robert, II 1308, n.1). アリスタルコスは、「アテナのおかげで (促しで)」に変更した (*ap' Athēnaōn* → *ap' Athēnaiēs*: 'fort. recte' von der Muehl). しかし、どこから、という点を記す必要がやはりあると思われる。ゼノドトスの「ボキスから」という書き換えは乱暴すぎる。亡命地はボキスという通説と折り合わせるため、幼年時はボキスで、次いで教育を受けるためアテナイに移ったという説明も古注釈者によって試みられた (Robert, *ibid.*).
- (158) 『ノストイ』プロクロス梗概 109 頁アレン版(ピュラデスの名が見える)、ステシコロス『オレスティア』, その他. 『オデュッセイア』の詩人にもこの、後代に通説となる伝承は知られていただろう。
- (159) アガメムノンとその勢力下にあるアルカディアとの関係は、『イリアス』2.603sq. 参照。オルコメノス市もそこに出ている (605)。他方、北方ギリシアのオルコメノスとアガメムノンとの個人的なつながりは特に認められないだろう。
- (160) 458, 459, 460 (*pou*). 古注釈者は、アガメムノンが、「オレステスは死んではいない」と言う傍らで、「ひょっとして (彼の生きていることを聞いていないか)」という句を使うのは矛盾しているから、ここの文 (458) は校訂者によって削除されると述べている (Schol. ad λ458)。オレステスはまだ生きているというのは、幽明境を異にするアガメムノンの、希望を込めた推論であり、必ずしも確信しているわけではない。それがオデュッセウスへの、「ひょっとして」という語を伴った質問としても現れている (そしてオデュッセウスも「生きているかどうか知らない」と答える)。これら「ひょっとして」の語は、第一のも含めて、希望的心理を表現した語である。
- (161) 9.263sq. では、キュクロプスに対して、アガメムノンたちギリシア人のトロイア攻略に誇らかに言及するが、戦争の叙述までには到らない。
- (162) 541 参照。『イリアス』16.155sq. で、50 隻の船に乗ってやってきた 5 つの部隊 (各 50 人) のミュルミドネスが、各隊長の名前とともに、紹介されている。少なくとも、それら隊長のうちの一人ポイニクスはすでに死亡している。
- (163) これは、9.80, 10.29sq. とは厳密には合致しない。少し誇張的な表現だが、

オデュッセウスの自己に対する不幸感を強調する。

- (164) 489 *eparouros* については Stanford (ad loc.) や Heubeck, in: Heubeck-Hoekstra (ad loc.) の解釈が説得的である ('on earth').
- (165) Cf. Griffin, 100 n.56 (文献).
- (166) Danek, 239.
- (167) 『イリアス』におけるアキレウスとオデュッセウスの比較については, Nagy, 42sq. 参照. 修辞術におけるシュンクリシス (ラテン語で *comparatio*) について, Lausberg, §799, §1130 参照.
- (168) Cf. Lausberg, p.543 '*Plutarchs parallele Vitae sind breit ausgearbeitete comparationes*'.
- (169) 『イリアス』 19.321sq.
- (170) エウリピデス『トロアデス』等 (Gantz, 688sq.). ダネクは, ペレウスの亡命はキュクロスの『ノストイ』で語られていて, 『オデュッセイア』の聴衆にもそのバージョンが知られていたと考える (Danek, 241).
- (171) 『イリアス』 11.766sq. でアキレウスは, パトロクロスとともにプティアから, 召集者のネストルとオデュッセウスによって, アガ멤ノンのもとに (おそらく船隊集結地アウリス港へ) 連れて行かれたと語られる. またそのときのアキレウスの年齢 (*nēpion*) について, 『イリアス』 9.440sq. 参照.
- (172) 一伝によれば, 今の引用文 (11.506sq.) で語られたのと同様のことが, アキレウスに関してもあった. アキレウスは, 少年時代, トロイア戦に参加させまいとする母テティスのはからいで, 父ペレウスの支配下に属する (cf. Scholia ad II. 9.668 b [ed. Erbse]) スキュロス島に送られて身を潜めていたことがあるという (こういう説が語られていたと確言できる最初の典拠は, エウリピデス『スキュロス人』である, cf. Gantz, 581.). そのとき, 島の王女ダイダメイアともうけたのがネオプトレモスだった. その後, アキレウスがいないとトロイア陥落はかなえられないという託宣のゆえに (トロイア陥落の前提たるヘクトル殺害を意味すると解される, cf. Robert, II1107, n.4.), オデュッセウスが, 他のギリシア人とスキュロスに赴き, 少女たちの間に女装して隠れていたアキレウスを, 策略を用いて見いだした. すなわち, 女用の小間物や仕事道具とともに, 武具も並べて皆に見せたところ, 少女たちとは異なり, アキレウスは真っ先に武具に手を伸ばした, それで見破られ, けっきょくトロイアに行くことになった. しかし, 後代に有名になるこういう説話が, 『オデュッセイア』の詩人にも知られていたかは不明である. もしそうだったとすれば, 父も子も,

オデュッセウスの主導のもとに、スキュロスからトロイアへ連れてゆかれるという運命の繰り返しとなる。他方、もしそうではなく、アキレウスの召集についてはむしろ『イリアス』での説と同じことが前提されているとしたら—たぶんそうだと思うのが—、アキレウスはスキュロスからではなく、彼の故郷プティアから、まだネオプトレモスは生まれていないときに、召集されたということになる。「女装」を伴うアキレウスのスキュロス滞在という伝説が古い起源を持ちホメロスにも知られていた（しかし黙殺された）とか、すでに『キュプリア』の内容に含まれていたとかとする解釈があるが（e.g. A. Severyns）、これに対する Heslin の反論（202sq.）は説得的であると思われる。なお、Severyns の説によると、アキレウスはスキュロスに二度行っている、すなわち少年のときこの島に隠れていたところを召集される（子の誕生）、その後第一次遠征（次注参照）におけるミュシア戦があり、いったんギリシア軍が帰航するさいにアキレウスは嵐に遭ってスキュロスに漂着した（『キュプリア』プロクロス梗概参照）、そして正式な結婚をしたのだという（ap. Heslin 203）。Heslin 自身は、ホメロスも『キュプリア』の詩人も、ミュシア戦のあとにアキレウスがスキュロスに漂着し（『イリアス』については 9.668 参照）、そこでネオプトレモスをもうけたという点で一致していたと考える（205）。

(173) テレマコス、オデュッセウス出征時に赤子だったので、陥落時には約 10 歳、父の帰国時にはほぼ 20 歳である。他方のネオプトレモスであるが、父アキレウスは、戦争勃発直後に（アウリスから？、挫折したミュシア戦の後に？、cf. *RE*, IV, 2, 2383(Kaerst)）スキュロスへ小遠征し、または漂着し、そこを荒らした。そのとき王女デイダメアと交わったらしい。そのときに孕まれたネオプトレモスは、したがって、トロイア陥落直前に参戦したとき、10 歳にも達していなかったことになる。母の胎内での年月を考えると、9 歳未満である（スキュロス遠征を故郷から、父の命令で、行ったという説（ピロストラトス、cf. Kaerst, *ibid.*）では、妊娠はより早くなるか）。異常な早熟ぶりだが（cf. Servius ‘*Pyrrhus admodum puer evocatus ad bellum est*’, *Cypria* fr.21, ed. Bernabé）、やはり少年のときに参戦した無比の英雄アキレウスの血を引いているとも言える。ネオプトレモスは、トロイア戦伝説において比較的新しく造型された—といっても『オデュッセイア』以前に成立しているが—英雄と考えられるので（cf. Robert, II, 1218; Ziegler, 2442）、こういう常識的には不合理な点が生じている。なお、第一次トロイア遠征で、ミュシアをトロイアと誤認し、そこで戦った後、ギリシア軍はいったんギリシアに戻り、第二次の遠征をやり直す（ミュシア戦を古

- い伝承と考えれば、という前提であり、ホメロスにはそれは知られていなかったという可能性もある)。ある説では、この第一次と第二次遠征との間に8年が経過したという（アポドロロス『摘要』3.18, なおヘレネ誘拐と第一次遠征開始までとの間に2年かかったという）。トロイア戦争全体を、『オデュッセイア』におけるように20年間ではなく、30年間の出来事にするこの説に従うと、ネオプトレモスは参戦時18歳くらいとなる（Scholia ad *Il.* 9.668b）。ネオプトレモスをすでに成人した戦士にするこの説は、より後代の成立と考えられる。
- (174) 『イリアス』19.326sq.参照。
- (175) 『イリアス』9.440sq. (cf. Stanford ad *Il.* 272, XI 512)。9.443での *paromoiosis* は、この二面が両方とも必要なことを表現する。
- (176) 500 *pephnon laon ariston amynōn Argeioisin*—518 *hosson laon epephnen amynōn Argeioisin*.
- (177) 11.519sq.で（「テーレポスの子…エウリュピュロス」という形で）言及されるテレポスは、後代（ヘカタイオス以来）の記述やアッティカ悲劇においては、ミュシアにおいてギリシア軍と戦う王だが、ホメロスの知る伝承では、ヘクトルの戦友としてトロイアその地で戦う戦士だったか（Robert, *Il.* 1127, 1140）。
- (178) パウサニアス 10.28.8 (Robert, *Il.* 1140, n.1)。
- (179) 原文では「アーレース」以降(537)は別の文章。
- (180) Ameis-Hentze, ad loc.
- (181) ネオプトレモスのノストス（帰国談）やその後の運命に関しては、ホメロス以外の詩人・作家たちによってさまざまな説が行われた。『ノストイ』では、ネオプトレモスは陸路を行き、キコネス族の地のマロネイアでオデュッセウスと出会ったというが（プロクロス梗概）、この話は『オデュッセイア』のとは別伝である（『オデュッセイア』では、オデュッセウスのキコネス立ち寄りのエピソードにおいて、ネオプトレモスのことには何も触れられない）。故郷プティアには帰れなかったというバージョンもある（ピンダロス『パイアン六』）。国で圧迫されていたペレウスを救助したという説も、それには間に合わず、祖父は追放されて死去していたというバージョンもある。またネオプトレモスのデルポイにおける非業の死(cf. Gantz, 690sq.)については、ホメロスでは語られない。
- (182) Cf. de Jong, ad XI 523-32.
- (183) 構成上は、岡(89)が述べるように、テレマコスのペロポネソスへの旅と、オデュッセウスのカリュプソの島からの出発とのストーリーが平行関係に置

- かれ、父子の対面において合流することになる。 Cf. de Jong, p.589.
- (184) Vorverweis(foreshadowing)および Nachverweis.
- (185) 8.74sq.にも木馬のことが部分的に含意されていると筆者は考えるが、テキスト上は明確でないのでここには入れない。上記した、アイオロスへの叙述なども含めない。なお 22.230 も参照 (de Jong, p.103 n.14).
- (186) ただしヘレネの描写法は、ホメロスあるいはギリシア・ローマ文学全体において、複雑多様であり、そのときどきで異なった相貌を見せる彼女である。これは彼女がもともと女神であり、人間にはうかがい知れない領域に属している存在であることを意味するだろう。
- (187) ここのオデュッセウスのアキレウスへの語りという点に関して、Danek, p.241 参照。
- (188) 『イリアス』13.277sq.参照 (West, in: Heubeck-West-Hainsworth, ad IV266ff.).
- (189) オデュッセウスのここの自己称揚について、Danek, 242 参照。第8巻のように同じ話題ながら嗚咽には至らないのは、この点も関与する。「淡々とした事実報告」というのは、丹下(60)の意見。
- (190) ここのオデュッセウスの「父的役割」については Danek(241)も指摘しているが、彼はこの箇所全体の基調として、オデュッセウスとアキレウス(ネオプトレモスの父)との「競い合い」、または力の英雄父子に対する智将オデュッセウスの「批判」を見る(242)。本論では、むしろ、テレマコスへの想起性という観点から、ネオプトレモスとオデュッセウスとの心的結びつきを主調と見なす。なお、作品後半部への前指示(Vorverweis)に関して、de Jong, ad XI 523-32 'A possible 'key' function of this story(sc. of the Wooden Horse) might be to prepare the narratees for Telemachus'role in the second half of the poem as Odysseus' youthful and courageous helper'参照。
- (191) Cf. Danek, 241.
- (192) 死の女神に通じるカリュプソの本質について、松本 110 以下参照。Crane(18sq.)は、『デメテル讃歌』とのモチーフ的類似性を見て、ハデスとペルセポネとの関係を、カリュプソとオデュッセウスとのそれに対応させる。
- (193) 「再度」というのは、もちろん、オデュッセウスの立場に立って厳密に言うならば、という話である。しかしわれわれ読者には(スクリア人聴衆にとってもそうだが)、彼の再生の希望は今初めて提示される。作品構成上は、オデュッセウスもあたかも始めてそれを物語るかのようなようである。これは、ナラトロジー的に、作品内の登場人物が叙述する場合の「内的語り手 (internal narrator)」

が、「はめ込み物語(embedded narrative)」を、回想談として、遡及的に(*ex anastropēs*)物語るという形式によって、可能になっている。冥界訪問は、オデュッセウスの放浪全体において比較的初期の(その約3年目の)出来事であり、「外的語り手(external narrator)」として詩人が神の視点から、そして経過順に(*kata physin, kata taxin*)語っていたら、それは叙述の初めのほうに置かれていたかもしれない。そして、そこで(アキレウスへのネオブトレモスに関する情報提供などを含め)主人公の冥界行を一度記述してから、スケリア滞在の場面で英雄がそれを島人たちにふたたび語るのを記すという繰り返しの叙述になったかもしれない(繰り返しの技法自体はホメロスになじみのあるものである)。しかしその場合、「転換点」としてのスケリアにおける冥界訪問談の役割はずっと希薄になっただろう。ナラトロジー的語りについては、de Jong, in: de Jong-Nünlist(edd.), XI(Glossary), 1sq., 遡及および経過順(自然順)の語りについては、Hunter, 52sq.参照。

(194) Stanford ad XI 634.

(195) De Jong, ad XI 538-40(cf. p.272). ただし、アンティクレイア場面に関する彼女の言葉と少し齟齬する(ad XI 181-7, cf. ad XI 601-27).

(196) イタケへの「外的」帰還の後に、家族との再会や領主の地位の回復を果たす「内的」帰還が残っている(de Jong, p.313). Schadewaldt(21)は、パイアケス人のもとでの(難破者の立場からの)名前と栄誉の回復、そしてイタケでの領主の地位の回復と、二回の帰還が行われると言っている。

(197) De Jong, p.271(a pivotal place). ただしこれは、オデュッセウスの心的展望という観点よりも、もっぱら構成的内容的な意味合いから言っている。Schadewaldt(ibid.)は、パイアケス人のもとでの栄誉回復ということを述べているが、より焦点的な位置を、そこで話される冥界訪問談が占めている。

(198) Vidal-Naquet, 47.

(199) Reinhardt, 92.

(200) Cf. Stanford, Introduction, p.xi; de Jong, p.588.

(201) 第12巻は、本来13.92まで続けられるべきだったと Stanford(ad XII 453, et alibi)は考え、アレクサンドリアの校訂者たちによる巻分けに問題あり、とする。

(202) De Jong(589)は、『オデュッセイア』に、三本の「ストーリーの流れ」、すなわち‘Odysseus’, ‘Telemachus’および‘Ithaca’の storyline を見る。

(203) 主に上記の「内的」帰還に、これらの心的要素はかかわる。